

松戸市彦八山遺跡

——北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書 I——

1 9 8 7

日 本 鉄 道 建 設 公 団
財団法人 千葉県文化財センター

松戸市彦八山遺跡

— 北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書 I —



1 9 8 7

日本鉄道建設公団

財団法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉県は、首都東京に接し、急速な発展をとげていますが、それに伴い交通網の整備も重要な課題となっております。このような状況に対応するため、東京圏高速鉄道網整備計画に基づき、北総開発鉄道の新設が計画されました。

ところで、鉄道の路線予定地の下総台地上は、先土器時代から近世に至る数多くの遺跡が残されています。とくに、松戸市と市川市が接する国分台は自然環境に恵まれ、史跡堀之内貝塚をはじめ、古くから文化財の宝庫として知られています。

このため千葉県教育委員会では、鉄道建設工事予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、日本鉄道建設公団をはじめ、関係諸機関と慎重に協議を重ねた結果、松戸市の彦八山遺跡については、発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は、千葉県教育委員会の指導のもとに、当センターが担当することとなりました。

昭和60・61年度の2か年にわたる発掘調査の結果、縄文時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡11軒、中・近世の竪穴状遺構9基などの遺構と、それに伴う遺物のほか、先土器時代の石器集中地点10か所が検出されました。なかでも先土器時代の調査では、立川ローム層の第2黒色帯に文化層が発見され、興味ある成果を得ることができました。これらの遺構・遺物は、当地域における歴史を解明していくうえで、貴重な資料になるものと思われまます。

このたび、整理作業も終了し、その成果を「松戸市彦八山遺跡」として刊行することとなりましたが、本書が学術的資料としてはもとより、多くの方々が、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることを望んでやみません。

終わりに、地元関係者、日本鉄道建設公団、千葉県教育庁文化課、松戸市教育委員会の御協力、御指導に深くお礼を申し上げるとともに、発掘調査等に御協力をいただいた調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和62年12月

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 山本 孝也

凡 例

1. 本書は、日本鉄道建設公団による北総開発鉄道建設工事に伴い調査した、松戸市大橋に所在する彦八山遺跡^{ひこはちやま}の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び整理作業は、千葉県教育委員会の指導のもとに、日本鉄道建設公団との委託契約に基づき、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、昭和60・61年度に下記により実施した。

(昭和60年度) 調査期間 昭和60年11月1日～昭和61年1月31日

調査面積 上層本調査1,470㎡ 下層本調査1,180㎡

調査担当 調査部長 鈴木道之助 部長補佐 岡川宏道 班長 矢戸三男
調査研究員 小林清隆

(昭和61年度) 調査期間 昭和61年9月1日～昭和61年9月30日

調査面積 路線外現状保存部分の上層確認調査320㎡

調査担当 調査部長 鈴木道之助 部長補佐 古内 茂 班長 小宮 孟
調査研究員 糸川道行

4. 調査で使用した遺跡コード番号は、207(市町村コード)-005(遺跡コード)である。
5. 整理作業及び本書の作成は、調査部長 鈴木道之助 部長補佐 古内 茂 班長 小宮 孟の指導・助言のもとに、主任調査研究員 田村 隆 調査研究員 小林清隆 同 永沼律 朗が担当し、昭和61年10月1日から昭和62年3月31の間にいった。
6. 本書の執筆は、III-1・IV-1を田村が、それ以外と編集については小林が担当した。
7. 本書に使用した地形図のうち、第3図は国土地理院発行の1:25000松戸(NI54-25-2-1)と船橋(NI54-25-2-2)、第51図については同じく1:10000松戸(東京2-1-4)である。
8. 本書に使用した図面の方位は、座標北を指すものである。
9. 先土器石器器種別分布図に使用したインレタは下記による。

△ ナイフ形石器 ● 削 器 ○ R・Uフレイク ● フレイク ● チップ
● 石 核 □ 礫 ■ ハンマー

10. 本書に使用した空中写真は、京葉測量機の撮影になるものである。
11. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、日本鉄道建設公団関東支社、千葉県教育庁文化課、松戸市教育委員会の関係者各位をはじめ、多くの方々から御指導、御協力を賜りました。ここに謝意を表します。

本文目次

序文

凡例

I. 序章

1. 遺跡の位置と立地…………… 1
2. 彦八山遺跡と周辺の遺跡…………… 2
3. 調査の経過と遺跡の概観…………… 4

II. 検出遺構

1. 竪穴住居…………… 6
2. 竪穴状遺構…………… 12
3. 焼土遺構…………… 17
4. 土坑…………… 18
5. 溝状遺構…………… 20
6. 確認調査検出遺構…………… 21

III. 出土遺物

1. 先土器時代の石器群…………… 22
A 概況 B 上層のブロック群 C 下層のブロック群
D 表面採集の遺物
E 彦八山遺跡石器文化の編年的位置
2. 遺構から出土した遺物…………… 71
3. グリッド出土遺物…………… 79

IV. まとめ

1. 先土器時代について…………… 83
2. 遺構・遺物について…………… 85

挿図目次

第1図	遺跡の地形	第41図	004竪穴住居出土土器	73
第2図	遺跡の周辺図	第42図	005・006竪穴住居出土土器	75
第3図	遺跡の位置と周辺地形	第43図	009・011竪穴住居出土土器	76
第4図	遺跡調査状況	第44図	010・012竪穴住居出土土器	77
第5図	標準土層	第45図	004・006竪穴住居出土土製品	77
第6図	竪穴住居配置図	第46図	202土坑出土土器	77
第7図	001竪穴住居	第47図	204土坑出土土器	78
第8図	002竪穴住居	第48図	202・205・209土坑出土土器	78
第9図	003竪穴住居	第49図	グリッド出土遺物①	79
第10図	004竪穴住居	第50図	グリッド出土遺物②	81
第11図	005・006竪穴住居	第51図	彦八山遺跡と周辺の地形	
第12図	竪穴状遺構配置図	第52図	彦八山遺跡の地形	
第13図	007(竪穴住居)竪穴状遺構	第53図	第1ブロック出土石器①	
第14図	竪穴状遺構調査状況	第54図	第1ブロック出土石器②	
第15図	401・402竪穴状遺構	第55図	第2ブロック出土石器①	
第16図	403・404・405・406竪穴状遺構	第56図	第2ブロック出土石器②	
第17図	焼土遺構	第57図	第3ブロック出土石器①	
第18図	土坑①	第58図	第3ブロック出土石器②	
第19図	土坑②	第59図	第3ブロック出土石器③・第4ブロック出土石器①	
第20図	溝状遺構	第60図	第4ブロック出土石器②	
第21図	遺構確認状況	第61図	第5ブロック出土石器	
第22図	検出ブロック分布状況	第62図	第6ブロック出土石器①	
第23図	第1ブロック	第63図	第6ブロック出土石器②・第7ブロック出土石器①	
第24図	第2ブロック①	第64図	第7ブロック出土石器②	
第25図	第2ブロック②	第65図	第7ブロック出土石器③・第8ブロック出土石器①	
第26図	第3ブロック①	第66図	第9ブロック出土石器①・第10ブロック出土石器①	
第27図	第3ブロック②	第67図	第10ブロック出土石器②	
第28図	第4ブロック	第68図	第8ブロック出土石器②	
第29図	第5ブロック	第69図	第9ブロック出土石器②・第10ブロック出土石器③	
第30図	第6ブロック	第70図	ブロック外出土土器	
第31図	第7ブロック	第71図	004竪穴住居遺物出土状況	
第32図	第8ブロック①	第72図	006竪穴住居遺物出土状況	
第33図	第8ブロック②	第73図	205土坑遺物出土状況	
第34図	第9ブロック①	第74図	全体図	
第35図	第9ブロック②			
第36図	第10ブロック①			
第37図	第10ブロック②			
第38図	主要遺跡の地層柱状図			
第39図	井戸向遺跡の層位			
第40図	001・002竪穴住居出土土器			71

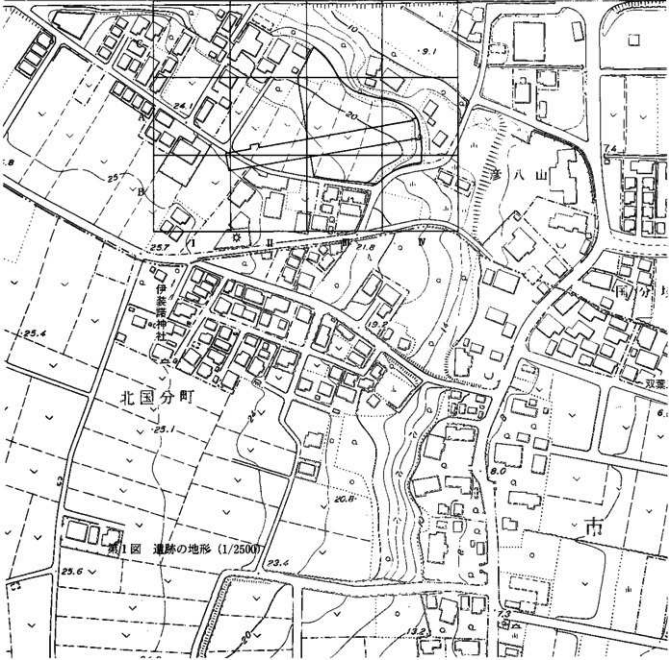
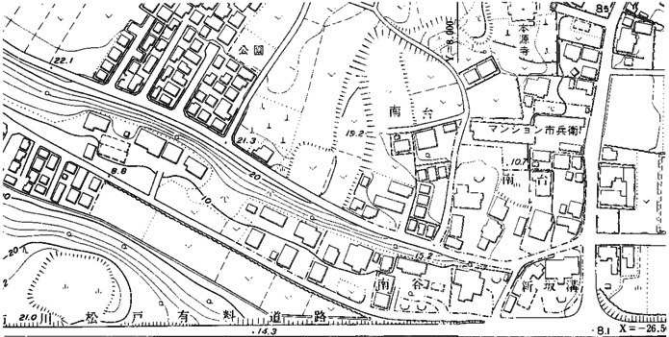
表目次

表1	第1ブロックの石器組成	23
表2	第1ブロックの石器属性	25
表3	第2ブロックの石器組成	26
表4	第2ブロックの石器属性	30
表5	第3ブロックの石器組成	32
表6	第3ブロックの石器属性	35
表7	第4ブロックの石器組成	39
表8	第4ブロックの石器属性	42
表9	第5ブロックの石器組成	43
表10	第5ブロックの石器属性	45
表11	第6ブロックの石器組成	45
表12	第6ブロックの石器属性	46
表13	第7ブロックの石器組成	48
表14	第7ブロックの石器属性	50
表15	第8ブロックの石器組成	52
表16	第8ブロックの石器属性	54
表17	第9ブロックの石器組成	56
表18	第9ブロックの石器属性	57
表19	第10ブロックの石器組成	58
表20	第10ブロックの石器属性	61
表21	編年表	68
表22	土製品計測値	80

図版目次

図版1	彦八山遺跡と周辺の空中写真
図版2	彦八山遺跡の空中写真
図版3	(1)遺跡の遠景、(2)畠山谷から見た遺跡 (3)遺跡の近景
図版4	(1)調査後の全景、(2)001竪穴住居
図版5	(1)002竪穴住居、(2)003竪穴住居
図版6	(1)004竪穴住居、(2)004竪穴住居遺物出土状況
図版7	(1)005竪穴住居、(2)006竪穴住居
図版8	(1)竪穴状遺構検出状況、(2)401竪穴状遺構
図版9	(1)402竪穴状遺構、(2)403竪穴状遺構
図版10	(1)201土坑 (2)202土坑 (3)203土坑 (4)204土坑

図版11	(1)205土坑遺物出土状況、(2)207土坑 (3)208土坑、(4)209土坑遺物出土状況 (5)210土坑
図版12	(1)302溝状遺構、(2)303溝状遺構 (3)303溝状遺構土層断面
図版13	(1)009・303検出状況、(2)011検出状況 (3)305検出状況
図版14	(1)第1ブロック、(2)第3ブロック (3)第4ブロック
図版15	(1)土層断面、(2)第5ブロック、(3)第6ブロック、 (4)第7ブロック
図版16	(1)第9ブロック、(2)第9ブロック
図版17	第1ブロック出土石器
図版18	第1ブロック出土石器
図版19	第2ブロック出土石器
図版20	第2ブロック出土石器
図版21	第3ブロック出土石器
図版22	第3ブロック出土石器
図版23	第3・4ブロック出土石器
図版24	第4ブロック出土石器
図版25	第5ブロック出土石器
図版26	第6ブロック出土石器
図版27	第6・7ブロック出土石器
図版28	第7ブロック出土石器
図版29	第7・8ブロック出土石器
図版30	第9・10ブロック出土石器
図版31	第10ブロック出土石器
図版32	第8ブロック出土石器
図版33	第9・10ブロック出土石器
図版34	ブロック外出土石器
図版35	001・002竪穴住居出土石器
図版36	004竪穴住居出土石器
図版37	004・006竪穴住居出土石器
図版38	010・011・012竪穴住居・202・205土坑出土 石器
図版39	(1)202土坑出土石器、(2)縄文土器
図版40	(1)縄文土器・弥生土器、(2)土師質土器 (3)土製品、(4)004・006竪穴住居出土石器製品、 (5)石斧状石器、(6)石鏃



第1図 遺跡の地形 (1/25000)

I 序 章

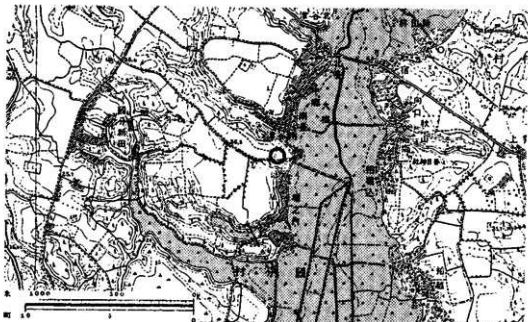
1 遺跡の位置と立地 (第1・2・3・51・52図、図版1・2)

千葉県の北部に広がる下総台地の西南端は、現在の市川市街地付近から北に延びる二つの谷によって、大きく三つの地区に分断される。その二つの谷のうち、西側の国分川谷については国分谷とよばれており、遺跡は国分谷と江戸川間の国分台にある。

国分谷によって分けられた国分台と対岸の曾谷台には、さらにいくつもの谷津が入りこみ複雑な地形が作りだされている。谷口から約3km北上した国分川右岸にも小支谷が刻まれ、本遺跡はその小支谷のなかで、国分谷から西北西へ延びる南谷津・道免き谷津という二つの谷に囲まれた北国分地域の北東端に位置する。東に広がる国分谷の谷幅は約500mで、そのほぼ中間を国分川が南に流れていく。

今回の調査地の地番は、松戸市大綱^{オホノ}字^ノ彦八山^{ヒコヤチヤマ}291-1他である。南谷津の谷口の南側にあたるところで、かつ南に伊装諾神社に向かう浅い谷があるため小さな舌状台地となっている。標高は、20m~25mで、秋山方面を良く見渡せる場所である。本遺跡の全体の範囲は、過去における本格的な発掘調査が未経験のため、確定し難いところもあるが、市川松戸有料道路で台地が切断される両側あたりが北・西端と考えられる。現況は宅地・畑地・荒地などである。

第2図と第3図を比較してみれば明らかなように、遺跡の周辺は大きく変貌してきており、鉄道の建設を契機にさらに開発が進むことが予想される。そのような、いわば歴史的な転換期に発掘が実施されることになったわけである。



第2図 遺跡の周辺図(大正8年大日本帝國陸地測量部発行)

2 彦八山遺跡と周辺の遺跡

彦八山遺跡における過去の調査は、昭和53年3月に土砂採取に伴い、700m²の発掘が実施されているのが唯一の例である¹。しかし、その際には後期の縄文土器が発見されたのみで、遺構は未検出で終わっている。また『千葉県埋蔵文化財分布地図²』には、縄文時代後期・弥生時代の集落跡として登録されており、称名寺・堀之内の後期縄文土器と弥生土器、土師器の散布が報告されている。ただこれも地表面からの所見で遺跡の実態はつかみきれていない。したがって、路線内の調査とはいえ今回が遺跡主要部分の初めての発掘となった。

国分谷の両側の台地上には数々の遺跡が立地し、その時期も原始から近世にわたっている。微視的に北国分に限定してみても、当遺跡の南に縄文時代のイザナギ神社境内遺跡が接し、権現原遺跡が続き、国の史跡で堀之内式土器の標式遺跡である、堀之内貝塚が台地南西部の一角に位置する。西に目を転ずれば、縄文時代を主とする大橋向山・八反割A・八反割B・東作山の各遺跡が密集している³。これらの遺跡では、昭和42年の権現原遺跡の調査成果をはじめ、縄文時代の遺構・遺物に注目すべきものがあり、先土器時代の状況は不明といわざるを得ないところがあった。昭和60年1月から11月にかけて、堀之内貝塚を除く北国分の地の広範囲にわたって、土地区画整理事業に伴う発掘調査が行われ、従来の認識に新たな知見を加えることになった。それはある程度予想されていたが、実際にローム層中に19か所の石器集中地点を検出できたことである⁴。武蔵野ローム層上面まで掘り下げて確認調査を実施した、彦八山遺跡の最も古い文化層は、立川ロームの第2黒色帯に確認され、本地域における人間活動の痕跡はA T降灰以前、すなわち2万数千年前に一気に遡ることになった。なお北国分の台地に所在する遺跡群について、市川考古博物館の堀越正行氏が時代ごとに概観されている⁵。

次に調査が実施されている周辺の遺跡について簡単にふれておきたい。南谷津を挟んだ大橋地区には、加曾利E期末葉から称名寺式期にかけて営まれた、大塚越遺跡・内山遺跡がある⁶。弥生時代から古墳時代になると報告例がかなり限定されてしまう。そのなかで代表的な遺跡が、弥生末から古墳時代前期の集落である諏訪原遺跡になる。古墳時代中期以降では谷口に位置する須和田遺跡まで範囲を広げなくてはならなくなり、現時点での報告例だけでは意外に遺跡数が少ないようにも思われる。しかし、これは単に資料の公表が追いついていないだけの問題であり、近い将来に空白の地域と時期は確実に埋まっていくことになろう。

1. 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報』—昭和52年度— 千葉県教育庁文化課 1979
2. 『千葉県埋蔵文化財分布地図』(1)—東葛飾・印旛地区— (財)千葉県文化財センター 1985
3. 『権現原遺跡』『市川市史』第1巻 市川市史編纂委員会編纂 1971
4. 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報』—昭和60年度— 千葉県教育庁文化課 1986
5. 堀越正行「北国分を掘る」『かいづか』No.27,28 市川市川博物館友の会 1986
6. 『大橋』松戸市文化財調査報告第3集 松戸市教育委員会 1971
7. 『諏訪原遺跡』松戸市文化財調査報告第5集 松戸市教育委員会 1974
8. 『須和田遺跡』『市川市史』第1巻 市川市史編纂委員会編纂 1971



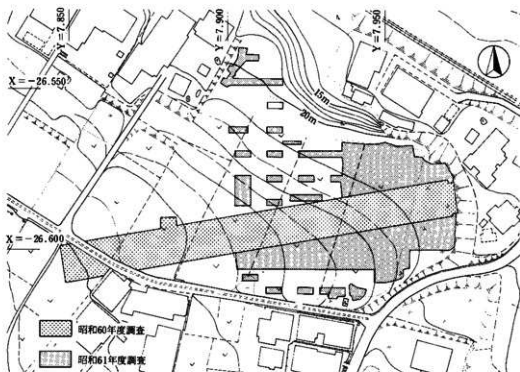
第3図 遺跡の位地と周辺地形

3 調査の経過と遺跡の概観

本調査は、日本鉄道建設公団による「北総開発鉄道」建設に伴い実施したものである。発掘は2年度にわたり、昭和60年度は路線内の確認・本調査を行い、翌昭和61年度は鉄道の建設工事に関連して、地表に改変が及ぶと考えられる範囲について確認調査を実施した。

路線内の調査は、現地詰所の設営などの準備作業を昭和60年11月1日から開始し、11月5日に発掘区の設定に入った。発掘区は公共座標を基準に50m×50mの大グリッドを設定し、大グリッド内を5m×5mの小グリッド100個に分割した。この発掘区と路線のセンター杭を基に2m×4mの確認トレンチ調査を行い、土層の状況と遺構の分布を確認した。この結果により、県文化課から1,470㎡という本調査面積が示された。表土除去後、検出遺構の精査を西側から始め、予想以上の遺構数のために、これを終えたのが12月12日になった。実測・写真撮影終了の後先土器時代の文化層確認の2m×2mのテストピットを設け、武蔵野ローム層上面まで掘り下げた。ローム層の保存状態は良好で、10か所に石器や礫が発見され、県文化課の指示をうけて1,180㎡について先土器時代の本調査を実施する運びになった。年が明けて昭和61年1月30日までローム層の調査に費やし、撤収・埋め戻しを含め31日に遺跡における作業を完了した。

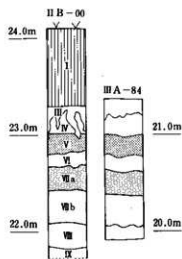
昭和61年度の実質的な調査は、9月5日から9月30日の間に行った。前年度に設定した発掘区を基準に、路線の南北に広がる3,200㎡の範囲に、遺構の分布が捉えられるような効果的なトレンチを設定して実施した。



第4図 遺跡調査状況図

2年度の調査で検出した遺構数は52基で、さらにローム層中に10か所の石器集中地点を明らかにした。詳しくは、次章からふれていくので、層序と遺構の概要について述べておく。

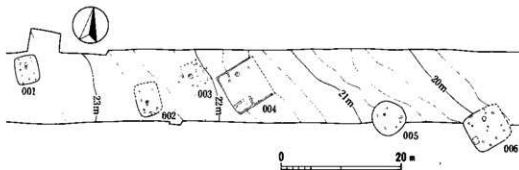
基本層序のI層は表土で上面は現在の生活面である。層厚は場所によって異なり、東にいくにしたがって厚くなる。II層である漸移層は、調査区の西端部に僅かに認められたのみで、ほとんどI層と混合している。III層はいわゆるソフトローム層である。東側では本層の大部分が失われている。IV層からハードローム層になる。V層は第1黒色帯である。下総台地東部では明瞭でないが、ここでの識別は容易である。VI層は上・下の層より明るく、乾燥すると白っぽくなり固い。ATを含む層と考えられる。VII層は第2黒色帯である。2枚に分かれ、上の暗さの薄いほうをa層、下の黒味の強い暗い部分をb層とした。a・bの間層は確認できない。VIII層は立川ローム層の最下層である。以上のように分層した。



第5図 標準土層

総数52の遺構の内訳を示すと、竪穴住居11軒、竪穴状遺構9基、焼土遺構6基、土坑19基、溝状遺構7条になる。竪穴住居の構築時期は、縄文～古墳時代後期に属すると考えられ、分布状況からは、各時期とも、まばらな竪穴住居から成る集落であったことがうかがわれる。竪穴状遺構としたものが、調査区の東部において集中して検出された。この遺構は、構造などから竪穴住居とは区別可能な遺構だが、出土遺物が僅かなため明確な時期を比定するのが難しい。本調査で発掘した10基の土坑については、縄文時代～古墳時代の所産と考えられる。また、掘り込みが不明瞭で、焼土が単独で検出されている。これを焼土遺構と呼んだ。

先土器時代の石器集中地点は、VI層より下層で6か所、VI層よりも上の層で4か所検出した。ナイフ形石器のような調整が加えられた定形的な石器は数少ないものの、調査面積に比較すれば、集中地点は多いと思われる。調査事例が少ない本地域にあっては、今後先土器時代の好資料になるであろう。なお、本書では石器集中地点を「ブロック」と呼称することにした。



第6図 竪穴住居配置図

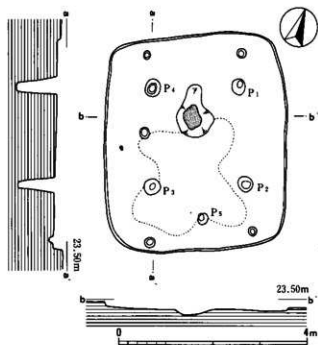
II 検出遺構

検出した遺構は、竪穴住居11軒、竪穴状遺構9基、焼土遺構6基、土坑19基、溝状遺構7条である。遺構数をみただけでも、かなり密集した様子がうかがわれるが、昭和61年度検出分については、確認のみで精査は実施していない。したがって遺構の説明は、昭和60年度に調査した遺構が中心になり、確認分は本章の最後でまとめて記すことにしたい。以下竪穴住居から順に進めていく(第74図)。

1 竪穴住居

001 竪穴住居(第7図、図版4)

II A-95・96グリッドを主に位置する。確認調査の時点ですでに存在が判明していた遺構である。平面形は、四辺に張りをもつ隅丸長方形である。各辺に多少の歪みが生じているが、長軸4.5m、短軸3.9mの規模を有する。主軸方向はN-23°-Wを示す。検出面から床面までは、良好なところで20cmと大変浅い。ソフトローム層の中位でプランを確認しているため、本来の掘り込み面はこれより上であったことが明らかであり、後世にかなり削平されたことがうかがわれる。遺存する壁には攪乱はなく、床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には壁溝は存在しない。ピットは10か所に発見された。四隅を結ぶ対角線上に穿たれた P_1 ・ P_2 ・ P_3 ・ P_4 が柱穴と考えられる。また P_1 - P_2 ・ P_3 - P_4 それぞれの延長線上に小ピットが配されている。柱

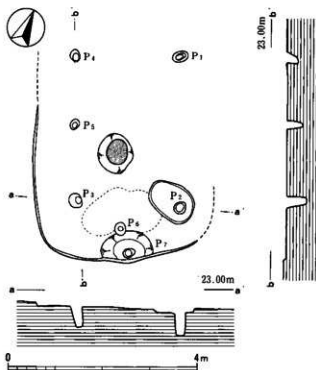


第7図 001竪穴住居

穴の深さは、 P_1 が72cmで、他の3か所は83cm前後に掘られる。柱間間隔は主軸方向の P_1 - P_2 が2.1m、短軸の P_2 - P_3 間2mとあまり差がない。 P_3 は入り口に伴ういわゆる梯子ピットになると思われる。床面は、図の点線範囲で固く踏み込まれるが、全体に小さな凹凸が認められる。炉は中央から北寄りに設けられ、長径50cm、短径40cmの火床が形成されている。覆土は、炭化粒を含む第一次堆積土である。遺物はこの下層から散発的に出土している。遺存状況からも当然のことであるが、土器細片が少量である。(出土遺物→71ページ)

002 竪穴住居（第8図、図版5）

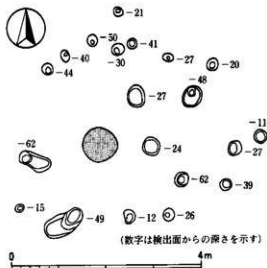
II A-99・III A-90グリッドに位置する。壁の残りが悪く、南西コーナー部分を検出したにとどまる。規模は明らかでないが、形態は隅丸長方形であった可能性が高い。西壁および入り口施設等から考えると、主軸方向はN-23°-Wになる。壁高は残りの良いところで6cm。床面は梯子ピットと推測されるP₈の北側で固く、ほかは削平されてしまったものとみられる。P₁~P₄が柱穴で、深さはP₁46cm、P₂52cm、P₃41cm、P₄25cmである。柱間間隔はP₁-P₂が3.1mで、P₂-P₃間は2.0mを測る。P₇は貯蔵穴かと思われる。しかし底面に小ピットがあり、別の用途があったのかもしれない。炉は主軸線上で、やや南寄りに位置し、80cm×70cmの楕円形を呈している。火床のロームはあまり固くなく、そう赤くもなっていない。遺物は、遺構遺存度が低かったことから貧弱で、炉内から小破片が出土した。（出土遺物→71ページ）



第8図 002竪穴住居

003 竪穴住居（第9図、図版5）

III A-81グリッドに位置する。当初ロームの赤色硬化部分が検出されたので、単独の焼土遺構ととらえ調査を開始したが、この周辺から20個のピットが発見され、縄文時代の竪穴住居と判断するに至った。壁が全く遺存しないため、形態と規模については確定できない。ピットの配置などから復原すると、仮に円形のプランを有していたならば、直径5.5m前後の大きさが想定される。柱穴は、検出面からの深さが50cm~60cmに達している5か所が相当すると考えられるが、断定はできない。床面は、当時の生活面が完全に削られ、その



第9図 003竪穴住居

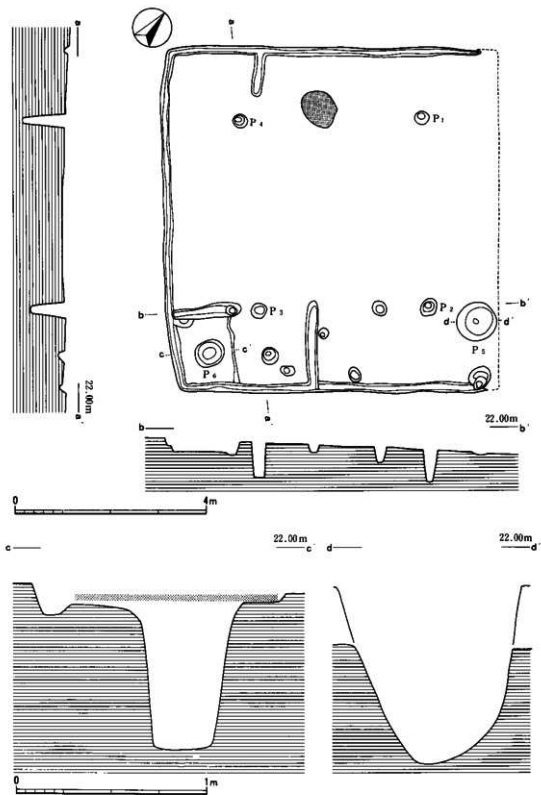
状況を知ることができない。検出時に焼土遺構とした部分が炉である。中央から若干南西に寄せて設置している。元もとは床面を掘り込んで作っていたはずであろうが、現状ではその底面が残っているのみで、直径90cmの範囲でローム層が赤変・硬化している。

遺物は、ピット内から縄文土器と判る程度の細片と、炉の周辺を精査中に黒曜石の小割片1点が出土した。いずれも実測・拓本に耐えないもので、時期の決め手にならない。

004 竪穴住居（第10・71図、図版6）

III A-37・83・93グリッドを主に位置する。他の竪穴住居と同様に検出面から床面までの残存度が悪く、谷側の東壁はすでに削平されてしまって、検出できなかった。西壁の規模から一辺7.15m前後の、正方形プランと考えられる。主軸方向は、N-42°-Wである。遺存壁高は、残りの良好な北西コーナー付近で23cmで、北・南壁は東に行くにしたがって低くなる。壁下に幅15cmの壁溝が伴い、全周していたと考えられる。壁溝の深さは大体5cm程度。また、壁溝から枝分かれするように内側に走る間仕切り溝が3条発見された。柱穴 P_1 ～ P_4 はほぼ対角線上に位置し、直径30cm内外の掘り形から真直ぐに掘り込まれている。 P_1 ・ P_2 ・ P_3 は底面の標高がほとんど同じレベルになっており、床面から約90cmの深さがあつたとみられる。 P_4 は、他の3か所より浅く、検出床面からの深さは70cmである。 P_3 については、他の柱穴と深さに違いが認められただけでなく、位置にも若干のずれが生じている。柱間間隔を測定すると、 P_1 - P_2 ・ P_1 - P_4 ・ P_2 - P_4 がそれぞれ3.9mであるのに対し、 P_2 - P_3 の間隔が3.6mと狭まっている。そのため P_4 - P_1 - P_2 ・ P_1 - P_3 - P_4 を結ぶ線は直角を成すが、 P_2 - P_3 - P_4 を繋ぐと鈍角になってしまう。あと30cm西に寄っていれば、一辺3.9mの正方形の配置になるが、その方向には西壁から延びる間仕切り溝が存在する。この間仕切り溝が柱穴の位置を規制したかもしれないが、そういう解釈が成り立つためには、最初から間仕切りの設置場所と規模が確定されていたことが条件になるだろう。柱穴以外に直径20cm～40cmの小ピットが6か所に検出された。深さは7cm～28cmで、柱穴と比べてかなり浅く、性格もつかめない。 P_5 ・ P_6 は、いわゆる貯蔵穴である。東西に分かれており、設置に時期差があるのか掘り形が異なる。南西コーナー部に設置された P_6 は、床面から一段低い面から掘り込まれている。床面と段の差は4cmあり、ここに蓋状の覆いがかせてあつたと想像される。また段区画内は固く締まっていて、使用頻度が高かったことを示している。床面は P_1 - P_2 を結ぶラインから東側では全く遺存せず、 P_3 の周囲に堅緻な面の広がりがある。炉は P_1 - P_4 の北に設けられ、北壁に近接する。形態は85cm×65cmの楕円形である。

遺物は、貯蔵穴 P_6 の周囲からまともに出て出土した。特に西壁から30cmの間隔を開けたところからは、壁と並行するように、壺・甕・高杯が並べて置いたような状態で出土している。このほかでは、東の貯蔵穴から P_5 内から高杯が出土した。覆土中には所々に焼土が含まれていて、床面にも密着していた。（出土遺物→72・76ページ）



第10圖 004竅穴住居

005 竪穴住居（第11図、図版7）

III A-88・99グリッドを主に位置する。平面形は、直径約5.5mの楕円形に近い形態をとる。主軸方向はN-53°-Wを向き、検出竪穴住居のなかで最も西に偏している。住居の中央に大きな攪乱が入り、床面と炉の一部が破壊されている。壁は垂直に立ち上がり、南西側の遺存度の良い部分で、壁高25cmである。破壊された床面の状態は知る術もないが、この攪乱部周辺の床面全体は、壁の回りより一段低くなっている。これは初めから意図されていたようで、一応ベッド状遺構の範疇として考えられる作りである。上面との比高は4cm～6cmと小さい。P₁～P₄が柱穴になる。深さはP₃が34cmで、ほかは50cm～57cmに掘られる。P₅は梯子ビットであろう。また別に、P₂の東に性格のはっきりしない小ビットが2個あるが、貯蔵穴状の施設は検出していない。炉は、主軸方向に沿って中心から80cm北に寄った位置に設置している。

検出面からの覆土は以下の2層に分けることができた。1：細粒の黒色土にローム粒と、少量の焼土粒を含む黒色土層 2：黒色土とローム粒が混ざり合ったしまりのある黒褐色土層。

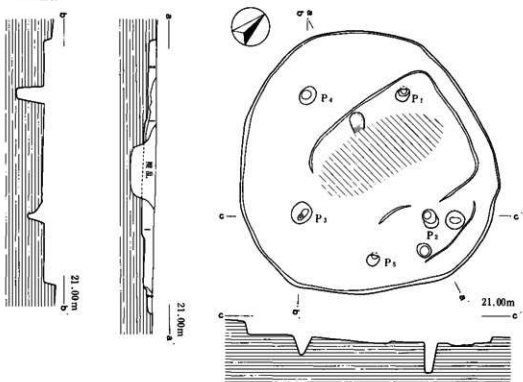
遺物は、散発的に床面に密着するような状態で出土している。いずれも破片になっており、P₂の近辺から出土したものが、唯一壺形土器に復原できた。しかし、これも部分的で全容は明らかでない。（出土遺物⇒74ページ）

006 竪穴住居（第11・72図、図版7）

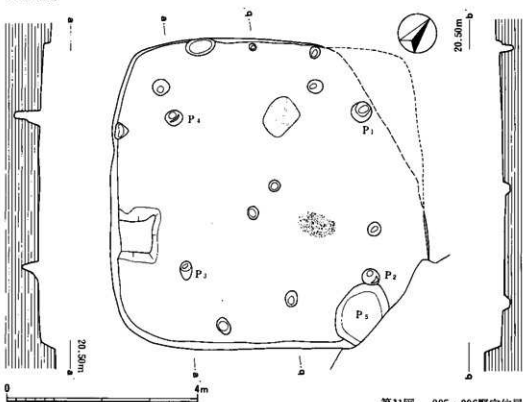
IV A-81グリッドを主に位置する。南東コーナーを404竪穴状遺構に切られ、北東壁も検出時にはすでに削平されていた。遺存壁から考えると、主軸方向に6.4m、直交方向に6.6mの隅丸方形になるものとみられる。主軸方向はN-43°-Wである。壁の残りは東側が不良で、立ち上りの一部しか確認することができない。良好に検出された南東コーナーの壁は、40cm弱の壁高を有している。壁下には溝がなく、傾きは垂直に近い。床面は、北東部で本来の面を失い、中央が壁際よりも僅かに低くなっていく傾向が認められる。全体に目立った凹凸や、攪乱は受けていないが、そう固いという様子もとどめてない。床面に穿たれた直径15cm～40cmの小ビットが合計15個発見されている。P₁～P₄が柱穴になるだろう。柱間間隔は、主軸の直交方向が4m前後で、主軸に並行するP₁～P₃の3.4m・P₃～P₄の3.1mより長い。深さはP₂・P₄が50cmに達し、もう2か所は40cmにいかない。P₅は404竪穴状遺構により一部破壊されている深さ6cmの浅い掘り込みで、本住居に伴う可能性が低い。P₃の西側にロームを削り残して、床面から8cmの高まりを作っているところがある。梯子ビットに相当するものが見当たらないので、入り口に伴う施設であろうか。炉は主軸線上で、P₁とP₃のほぼ中間に設けられている。掘り込みはほとんどなく、80cm×60cmの規模を有する。またP₂の西に成因の定かでない80cm×50cmの焼土を検出している。

遺物は、壺・台付壺・壺・高杯が出土している。残存度の高かった住居の南西部で完形に近い台付壺が出土したほかは、集中する様子は認められなかった。（出土遺物⇒74・76ページ）

005 整穴住居



006 整穴住居



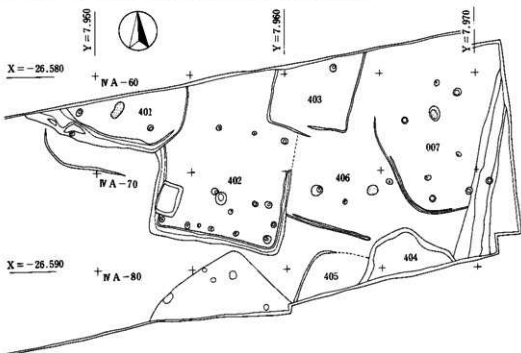
第11图 005・006整穴住居

2 竪穴状遺構 (第12図、図版8)

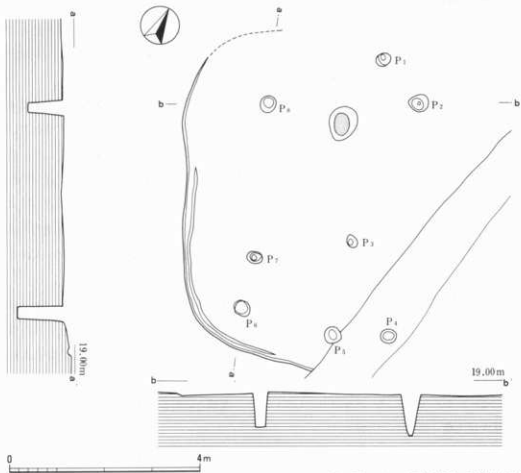
調査区の東端の地形は小規模な改変を受けて崖状になっている。この国分谷を見下ろす位置に様々な形態の落ち込みが検出された。地山を掘って平坦な面を設定しているような点は、縄文～奈良・平安時代の竪穴住居と変わらない。しかし覆土の感じや、不整形のプランなどからは、いわゆる竪穴住居の雰囲気が出てこない。主観的であるが、この遺構を竪穴住居とは区別して、ここでは竪穴状遺構と呼ぶことにしたい。また、現場で007竪穴住居とした遺構を整理段階で、遺構番号を改めずに、竪穴状遺構に含めることにした。

007 (竪穴住居)竪穴状遺構 (第13図)

IV-63・73グリッドを主に位置する。初め楕円形を呈するプランを確認したので、弥生時代の竪穴住居と考えて調査を開始した。しかし遺物が出土せず、床面の設定層位がほかの住居と比べて低いなど、周辺の状況から思量すると竪穴状遺構の可能性が高くなった。実際に検出できたのは、南壁～西壁の一部で壁高は6cmである。本来の形状は、ほかの竪穴状遺構が不整形であるから、このように大部分が削平されてしまったのでは、到底明らかにし得ない。壁の下には幅10cm～15cm、深さ6cmの溝があるが、全体に巡っていたかどうかは不明である。床面はVI層上面に設定されていたものと思われる。壁の遺存している南西部にしても、特に踏み固められている様子は残っていない。東側は、304溝状遺構によって切られており凹凸も目立つ。ピットは8か所に発見された。このうちP₂・P₃・P₄の深さは、72cm～94cmと深く真直ぐに掘り込まれている。またP₂～P₃間に75cm×55cmの炉状の遺構がある。



第12図 竪穴状遺構配置図



第13図 007 (竪穴住居) 竪穴状遺構



第14図 竪穴状遺構調査状況

401 竪穴状遺構（第15図、図版8）

IVA-60グリッドを主に位置する。遺構確認作業の段階では、単に谷側へ急激に落ち込んでいく自然地形かと思われた。しかし慎重にプランを追ったところ、隅丸となるコーナーが検出され、南壁のラインも明らかにできて、遺構であることが確実になった。

昭和61年度調査部分は、最大で80cm程度の壁高を有し、南壁の下には底幅20cmの壁溝が認められる。壁溝の深さは10cmになるところもあるが、コーナー部分あたりを境に途中で切れて、東壁下には存在していない。壁の良く残っているところは、約45°のゆるやかな傾斜で立ち上がり、中間に小さな段を作っている。床面は全体に平坦で、丁寧に構築される。貼床ではないので、掘り形の時点で設定した面と考えられる。この床面は固さが認められないが、南壁、特にその西側の上端から南が大変固くなっている。遺構に伴う固さなのか、本跡より古い遺構の床面なのか判然としない。ピットは、P₁40cm・P₂55cmの2か所を検出した。図中央の網を入れた部分は、炉のような掘り込みではなくただロームが火熱によって赤くなっている。

覆土は、表土層以下6層に分かれ、西側から流れ込んで堆積したような状況を示す。1：炭化物を含む黒灰色土層、2：ローム粒の多い暗灰褐色土層、3：ブロック状の黒色土を含む黒褐色土層、4：しまりをもつ暗褐色土層、5：荒いローム粒を含む黒褐色土層、6：ローム粒を主とする褐色土層。

遺物は床面から第50図52の石器が出土しているが、遺構と同時期のものではないだろう。

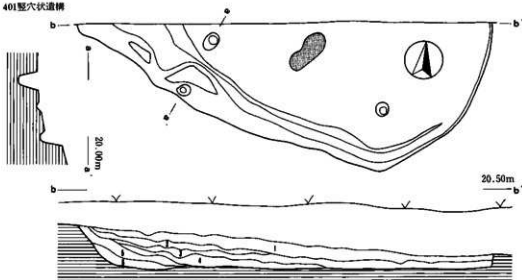
402 竪穴状遺構（第15図、図版9）

IVA-61・71グリッドを主に位置する。台地の肩側である南壁を完全に検出できた。しかし西壁は401竪穴状遺構と重複し、北壁が削平されているので、全容をつかむことはできなかった。P₁がP₈と、P₂がP₉、そしてP₃がP₄と、それぞれ対応するピットと考えられ、これから規模を想定すると、東西7.1m×南北6.8mはあったと思われる。長辺方向を主軸とした場合、その方向はN-80°-Wとなり、ほぼ東西を向いている。南西コーナーの壁高は65cmあるが、南西コーナーでは30cmと低くなる。壁の下には、底の幅で15cm～30cmの割としっかりした溝が掘られている。北側での状況は明らかでないものの、全体に巡っていた可能性は高い。遺存壁内の床面は平坦に構築され、16か所に小ピットが存在する。壁に沿って穿たれているP₁～P₉が柱穴状のピットと推測され、深さはP₄の55cmからP₁の13cmの間でばらつきがある。P₈は166cm×120cmの長方形を呈する土坑で、床面を削がして存在が判明した。

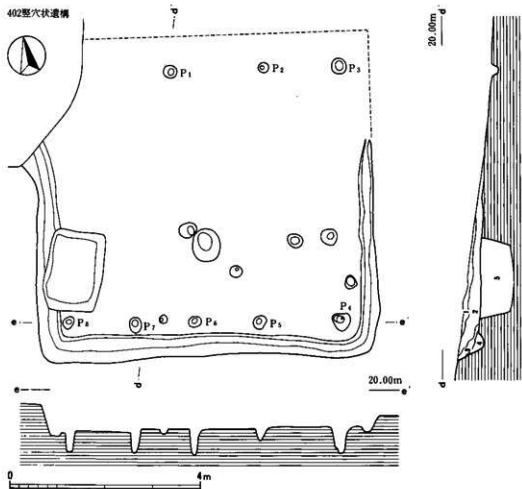
覆土は4層を残す。1：焼土を少量含む黒褐色土層、2：1よりロームを多く含む黒褐色土層、3：黒色土とローム粒が混ざり荒いローム粒を多く含むしまりのある暗褐色土層、4：黒色土とローム粒から成る暗褐色土層、5：小ロームブロックに黒色土を僅かに含む単一層。

遺物は覆土中から出土した土器片があるが、時期が様々で遺構の構築から廃棄の間に属する、と断定でき得るものは皆無であった。

401 豎穴狀遺構



402 豎穴狀遺構



第15圖 401・402豎穴狀遺構

403 竪穴状遺構 (第16図、図版9)

IVA-62グリットに位置し、IVA-52グリットへ続いていることを昭和61年度の調査で確認している。確認部分を考慮にいと、5.5m×4.2mの不整長方形になることがうかがわれる。長辺の方向はN-12°-Eである。検出した壁のうち、東・西壁は直線的に延びて、7cmの壁高を残す。南壁は途中で切れるところがあり、開いたような形で終わっている。壁溝は存在しない。床面は基本的には平坦構築がなされているが小さな凹凸が目立つ。設定層位はハードルーム層で、特に踏み固められてはいない。ピットは深さ37cmのP₁が発見されただけである。

全体に遺存度が低いため、時期を明確にできるような遺物は出土していない。

404 竪穴状遺構 (第16図)

IVA-82グリットに位置し、404竪穴状遺構と重複する。土層断面からの所見で、405竪穴状遺構によって切られていることが判る。確認部分を含めると、長さ7 m前後の規模になると思われる。形態は楕円形に近いといえるが、特にプランを意識して構築している様子がない。西壁の壁高は検出面から36cmを測り、傾斜しながら立ち上がっていく。壁溝はない。床面にピットはなく、全体に小さな凹凸が生じている。

覆土は、8：黒色土とローム粒が混ざり焼土が含まれる暗褐色土層、9：細粒で真黒な黒色土層、10：黒色土にローム粒を含む黒色土層 から成る。また405竪穴状遺構が埋まりきってから、1：しまりの弱い黒褐色土層、2：1よりしまりもち粗いローム粒を含む黒褐色土層、3：細粒の黒色土に焼土を含む黒色土層が堆積する。

覆土中からは縄文土器、土師器などの破片が出土しているのみで、時期決定遺物はない。

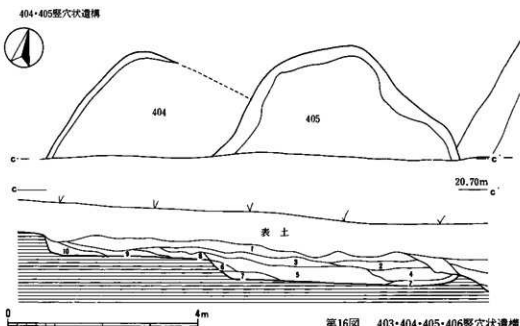
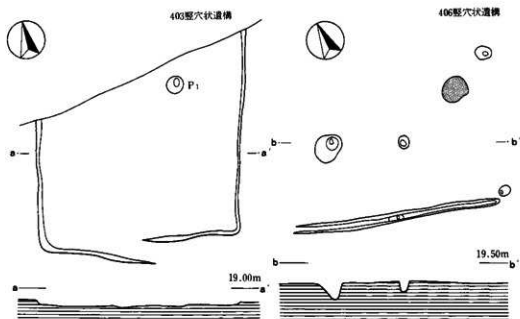
405 竪穴状遺構 (第16図)

404竪穴状遺構の東、IVA-73グリットを主に位置する。404竪穴状遺構が廃棄された後に構築され、同じように南側に広がる遺構である。東は304溝状遺構によって切れ、全容は不明である。検出部分からすれば不整の掘り込みで、定形的なプランはもっていないかたものと考えられる。床面は404竪穴状遺構より40cm～50cm低い位置に設定され、壁は約50°のゆるやかな傾斜で、開くように立ち上がる。底面は東にいくにつれて僅かに低くなっていくほかは、404竪穴状遺構と同じような状態を示す。

覆土は、4：暗褐色土層、5：焼土粒を含む黒褐色土層、6：粗いローム粒を含む黒褐色土層、7：ソフトロームを主とする褐色土層に分けられる。時期決定の遺物は出土していない。

406 竪穴状遺構 (第16図)

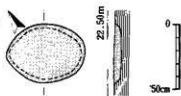
402竪穴状遺構の東、IVA-72グリットに位置する。南限は南壁下に伴っていたと思われる壁溝により確定できるが、壁が全く削平されているので詳細はあきらかでない。本跡に伴う施設としては、4か所のピットと、直径50cmの焼土の堆積がある。しかし構築時の床面の大部分は失われているものと考えられる。時期を決定できる遺物は出土していない。



第16図 403・404・405・406竪穴状遺構

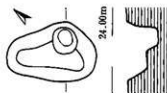
3 焼土遺構 (第17図)

竪穴住居に伴う炉のような施設でなく、また縄文時代早期のいわゆる炉穴とも異なり、単独で検出され、焼土だけから成る遺構である。101焼土遺構はII A-89グリッドに位置し、60cm×45cm×5cmに焼土が堆積する。209土坑が近接するが、検出面である第三層上面は特に固くはなっていない。

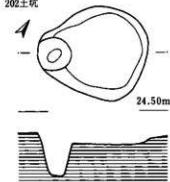


第17図 焼土遺構

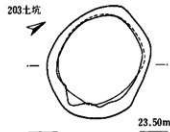
201土坑



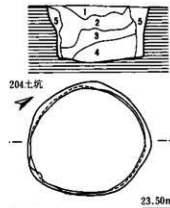
202土坑



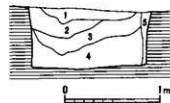
203土坑



204土坑



204土坑



第18図 土坑①

4 土坑 (第18・19図)

昭和60年度の調査により検出した土坑は10基である。明らかに土坑(墓)であると断定できるものがなかったため、ここではすべて「土坑」とすることにした。

201 土坑 (図版10)

I B-09グリッドに位置する。長径95cm、短径63cmの楕円形を呈し、深さは23cmある。長軸方向はN-38°-Eである。底面は70cm×30cmの範囲で比較的平坦な面が形成され、直径28cm前後、深さ10cm程の小ピットが穿たれる。遺物は縄文土器の細片が出土したにとどまる。

202 土坑 (図版10)

201土坑の南、II B-10グリッドに位置する。115cm×100cm、深さ5cmで南西側に小ピットをもつ。底面からの立ち上がりがはっきりせず、掘り込み面も現状より上であったと考えられる。遺物は底面からやや浮いた位置で、4個体分以上になる縄文土器の破片が出土している。(出土遺物→76ページ)

203 土坑 (図版10)

II A-96グリッドに位置し、204・210土坑が近接して発見されている。上端の平面形は121cm×100cmの楕円形を呈し、底面で95cm×85cmになり、深さは53cmである。一部オーバーハングされているところがあるので、円筒形となつてはいるが、フラスコ状に掘られていた可能性が高い。

覆土は、1：かなりのしまりをもち焼土粒を含む黒褐色土層、2：小ロームブロックと焼土粒を僅かに含む黒褐色土層、3：全体に細粒な黒褐色土層、4：小ロームブロックを含みしまりある暗褐色土層、5：ローム粒を主とする暗褐色土層。遺物は拓本に至らない縄文土器の細片が出土している。

204 土坑 (図版10)

203土坑の北東50cmに並ぶように位置する。直径120cmのほぼ円形の平面形を有し、深さ60cmの円筒形を呈する。この土坑も開口部より底面が広がるフラスコ状であったものと思われる。覆土の1～5層は203土坑と同じで、5点の縄文土器細片が出土している。(出土遺物→78ページ)

205 土坑 (図版11)

ⅢB-01グリッドに位置し、東隣に206土坑がくっついて検出されている。直径95cmの円形を呈し、深さ15cmのたらい状の土坑である。底面に固さは認められないが平らである。覆土は真黒な土にローム粒を含む単一層で、この堆積土のなかに土器と炭が多く含まれていた。土器は壺や高杯の破損品で、炭化材は7~8cmに切断されたようなものが不規則に出土している。日常的に使用されていた施設とはいえない難い遺構である。(出土遺物→78ページ)

206 土坑

50cm×40cmの楕円形を呈し深さは25cmになる。覆土は真黒な土だが遺物の出土は認められなかった。205土坑とかなり接近して検出されているものの、関連性は薄いと思われる。

207 土坑 (図版11)

ⅢA-86グリッドに位置し、80cm南に208土坑が存在する。上端の平面形は直径57cmの円形である。底面は中央が若干低くなっており、深さは検出面から20cm強を測る。遺物としては土師器の甕の破片が2点出土している。

208 土坑 (図版11)

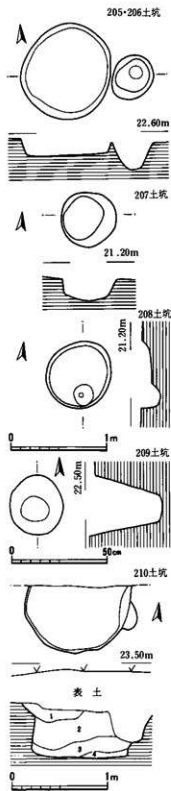
直径70cm、深さ10cmの浅いもので、両側に径20cmの小ピットを作っている。遺物の出土は認められなかった。

209 土坑 (図版11)

ⅡA-89グリッドに位置する直径30cm程の小ピットである。101焼土遺構がすぐ近くに存在する。下にすばまっていき深さは35cmになる。この狭い空間に押し込まれたような状態で、土師器の高杯脚部と甕の破片が出土している。(出土遺物→78ページ)

210 土坑 (図版11)

ⅡA-87グリッドに位置し、一部が調査区の外へ続く。203・204土坑と同じ形態になると考えられる。検出面がかなり下になり上端は不明となった。底面の直径は190cmである。覆土は、1：しまりをもつ暗褐色土層、2：焼土粒を含む黒褐色土層、3：粗いロームブロック、4：暗褐色土層。



第19図 土坑②

5 溝状遺構 (第20図)

調査した溝状遺構は4条ある。しかし路線内という限られた範囲のため、全体を検出できた溝は一条もない。またその性格を明らかにし得ることも困難な状況である。

301 溝状遺構

最も西で検出した溝で6mを発掘できたにすぎない。一部302溝状と並行し、東・西各方向へ延びていくようである。深さは30cmと浅く、断面は「U」の字状を呈する。

302 溝状遺構 (図版12)

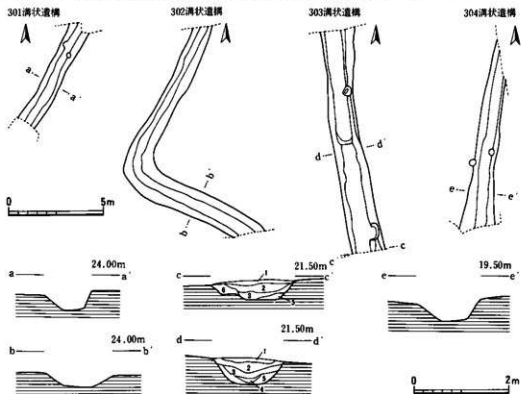
北東方向から続いている溝で、IID-03グリッドから南東へ向きを変えている。掘り形が丁寧でなく、覆土はローム粒・ロームブロック・黒色土が混ざり合ったやわらかい単一層である。

303 溝状遺構 (図版12)

竪穴状遺構群の西で南北に延びる。掘り形がしっかりしており、検出した南側では掘り直しが行われたような形跡がうかがわれる。覆土は全体にしまりをもち、1～4層には焼土・炭化物などが含まれ、5：は粗いローム、6：は細粒のロームを主としている。

304 溝状遺構

調査区の東端に検出され、007竪穴住居・405竪穴状遺構を切って南北に続いている。覆土はしまりのない黒色土で、他の溝と同じように時期を決定できる遺物は出土していない。



第20図 溝状遺構

6 確認調査検出遺構

昭和61年度に実施した確認調査では、統計25基の遺構の存在を確認した（第21図）。

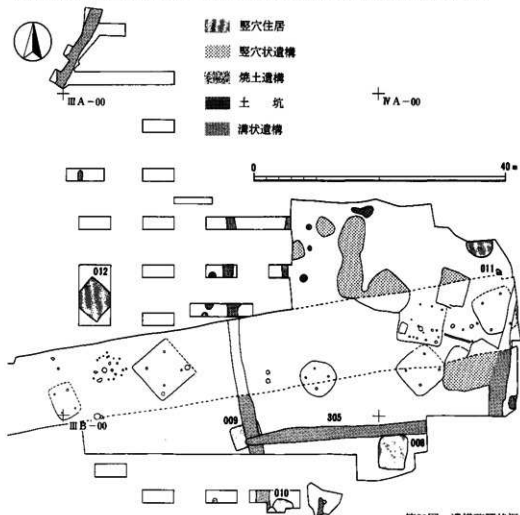
竪穴住居は、昭和60年度の本調査区域の南側で008・009・010の3軒が見つかり、北側では011と012の2軒が、路線予定地に接して検出された。これにより北側の緩斜面部よりも南側の平坦部に集落が展開していたことがうかがわれる。しかし、検出面で出土した遺物から考えると、同一時期に存在していた竪穴住居の数は、かなり限定されてしまうと思われる。

竪穴状遺構として捉えられる遺構は3基あり、いずれも台地の東側、すなわち先端部の方に集中する傾向が認められた。不整形のプランでその規模も一定しない。

焼土遺構は5基確認された。散在しているが、北端部からは検出されていない。

土坑は9基存在することが判った。円形を呈するものが多い。直径1m内外と、それ以上の大きさを有するものの二つに分けることが可能である。

溝状遺構は、303がさらに南北に延びることが判明したほか、新たに3条を発見した。



第21図 遺構確認状況

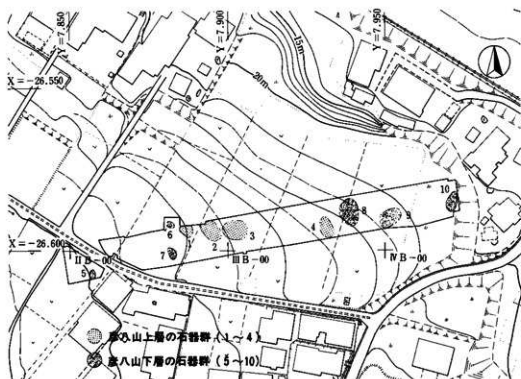
III 出土遺物

1 先土器時代の石器群

A 概況

今回の彦八山遺跡の調査に際しては、台地平坦面より緩斜面にかけて、東西に細長く調査区が設定された。上層遺構精査後の試掘調査の知見によれば、立川ローム層中には、調査区の西端から東端に至る広い範囲に亘って石器群の埋没が予測されていたが、本調査に移行し、順次拡張をすすめた結果、およそ10箇所の石器集中域を検出することができた。これらの石器集中域を便宜的に第1～第10ブロックと呼称することにしよう。この調査結果から類推すると、先土器時代の石器集中域の分布は今回の調査区を超えて、その周辺部にも広く及んでいるものと考えられた（第22図）。

次に石器の産出層準について見ると、IV層からVII層に及んでいるが、IV層からV層にかけて集中するグループとVI層からVII層に集中するグループに大別することができる。各グループ内の時間差は当然認め得るのであろうが、一応の目安として、前者を彦八山上層の石器群、後者を彦八山下層の石器群としよう。上層に帰属するブロックは第1～第4ブロック、下層が第5～第10ブロックであり、これらは平面的にもある種のまとまりを示している。すなわち、上



第22図 検出ブロック分布状況（数字はブロックの番号）

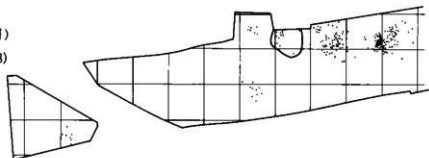
層のブロック群がおおむね調査区中央に占地するのに対し、下層の6ブロックは調査区の東西両端に3ブロックずつ偏在している。

B 上層のブロック群

第1ブロック

(第23・53・54図)

(図版13・17・18)



a 分布状況 II A-87区にある。平面的に見ると、II A-97ポイント東北部に径2 m程の集中部が形成され、その周囲に少量の遺物が散在している。この集中部分の遺物の産出層はV層下部であるのに対して、ブロックの外縁部を構成するものにはレベルの低いものが目立ち、かつ、集中部分との石材構成にも差が認められるところから、最低でも上下2枚の包含層が重複している可能性も指摘される。この場合、本ブロックの西側に、第6、第7ブロックとした下層のブロックが存在しているところから、それらとの関連が問題となるかもしれない。

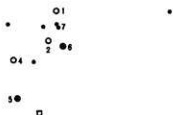
b 出土遺物 第1ブロックから検出された石器は総数で13点あるが、このうち3点は産出層準が深く、帰属性に疑問があるので一応除外すると、残りは10点となり、小規模、零細なブロックと言うことができる。

確實に上層に帰属する石器は使用痕のある剥片2点(1、2)、剥片6点(3、4、7)、石核2点(5、6)である。剥片のうちには微細なものがないばかりか、ブロック内で石核から剥離されたと理解される直接的事例を欠いているので、いずれも別地点から目的々に搬入され

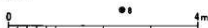
表1 第1ブロックの石器組成

母岩番号	ナイフ形石器	用器形器	剥片 剥片	石核	剥片	石核	原	石	器	総数	数量比(%)	総重量(g)	重量比(%)
砂岩 1	0	0	0	1	1	4	0	0	0	6	45.1	172.4	60.7
砂岩 2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	7.7	3.3	1.2
チャート 1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	7.7	11.7	4.1
珪化岩 1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	7.7	2.7	1.0
珪化岩 2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	7.7	2.8	1.0
珪化岩 3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	7.7	46.3	16.3
ホルンフェルス 1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2	15.4	44.7	15.7
総計	0	0	0	3	3	6	0	0	1	13	100	283.9	100
組成比(%)	0	0	0	23.1	23.1	46.1	0	0	7.7				

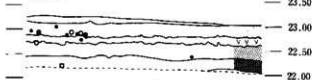
II A-87



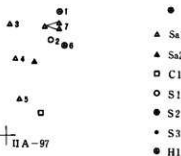
II A-97



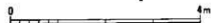
II A-97



II A-87

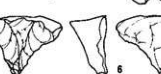
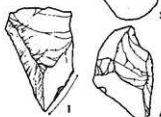
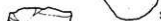


II A-97



第23図 第1ブロック

II A-88



II A-98

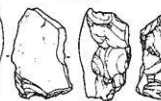


II A-98
23.50

II A-88



II A-98



*石質の略号については60ページのとおり

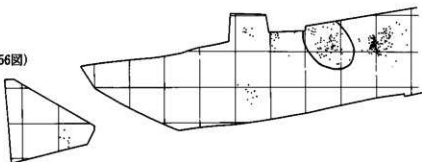
細は表1に示したが、砂岩1が6例あり、他はいずれも2点以下の検出。砂岩には石核1点と剥片5点からなっているが、既に述べたように石核(5)が盤状剥片石核であるが、剥片(3、4)はそれとは異なる技法によって作出されたものであり、同一母岩の分割によって別種の石核を生じている例である。

d小結 本ブロックは産出層準から見て、2枚の文化層に分離される可能性が高いので、上層である第1黒色帯に帰属する10点のみを対象としたい。ブロックは規模、石器数量共に貧弱で、剥片類を主体的に保有している。微小な剥片も含まず、極めて単純な石器組成を示している。

第2ブロック

(第24・25・55・56図)

(図版19・20)

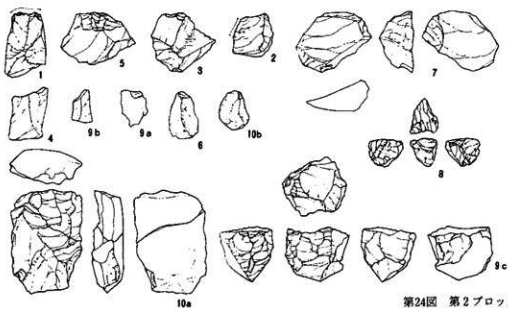
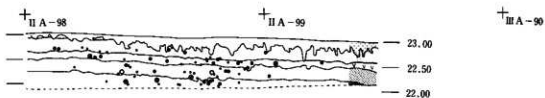
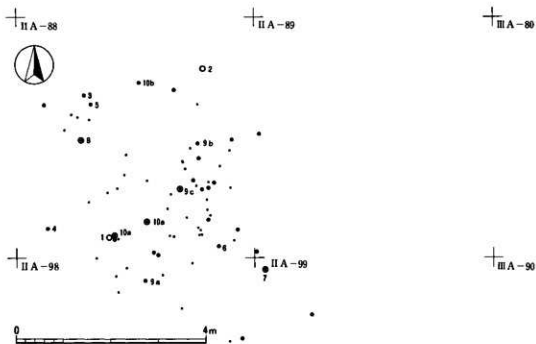


a分布状況 II A-88区を中心としている。第1ブロックと第3ブロックの中間部にあたる。平面分布を見るとII A-88区の中央、ほぼ径4.6mの範囲に遺物が集中しているような印象を受けるが、詳細な検討を要する問題があるようである。

垂直分布状況を観察すると、石器類はV層最上部から始め、V層下部からVI層上部のあたりでブロックの全容が露呈するが、ブロックの中央部分を中心として更に遺物の出土は下位に

表3 第2ブロックの石器組成

母岩番号	ナイフ形石核	削器	彫器	器	剥片 剥片R	石核	剥片	石核	黒石	燧石	總数	数量比(%)	総重量(g)	重量比(%)
安山岩 1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	2.7	4.9	3.2
安山岩 2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1.4	13.5	9.0
安山岩 3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.4	1.4	1.0
砂岩 1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	2.7	9.3	6.2
花岩 1	0	0	0	0	0	1	47	0	0	0	48	65.8	57.7	38.2
燧化石 3	0	0	0	0	2	2	2	0	0	0	6	8.2	45.8	32.3
黒曜石 1	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	3	4.1	5.2	3.4
黒曜石 2	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	3	4.1	1.3	0.9
黒曜石 3	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	2.7	0.5	0.3
黒曜石 4	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.4	0.5	0.3
黒曜石 5	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	3	4.1	1.1	0.7
ホルンフェルス 1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1.4	6.8	4.5
総数	0	0	0	0	2	5	66	0	0	0	73	100	151.6	100
組成比(%)	0	0	0	0	2.7	6.8	90.4	0	0	0				

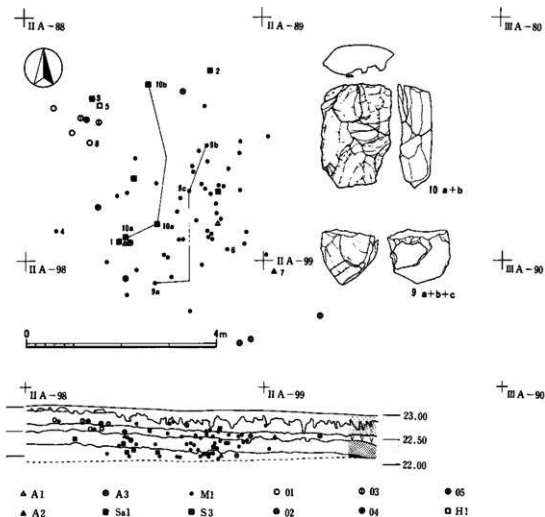


第24図 第2ブロック①

続き、第2黒色帯の下部にまで及んでいる。この特異な出土状況で注意されるのは、垂直分布が一般的に観察されるが如き紡錘形状の分布を示さず、ブロックの周辺部から中央にかけて鍋底状の落ち込みを呈する点であろう。そこでまず、前項で指摘した様に、文化層自体の複数重複の可能性がまず想定されるが、第25図の母岩分布状況と接合関係を見る限り、この見方に賛成することはできない。

次に、遺物の出土層位毎の分布状態を見ると、V～VI層の遺物は万遍のない分布を示しているのに対して、VII層出土と記録されている資料はブロックの中央部分に集中していることが分かる。この部分が鍋底状の特異な垂直分布域に相当しているため、見かけ上、紡錘型分布を示さないことになる。

以上の様相をどのように解釈するのかによって、ブロックの産出層準が大きく変動することになってしまう。従って、ここでは仮にV層下部を産出層準と認定したが、これにも根拠の根



第25図 第2ブロック②

拠がある訳ではない。しかし、V層下部と認定した場合、下層検出の遺物の出土状況に対する何らかの解釈が求められるかもしれないが、それに対する明確な回答は持ちあわせていない。

b 出土遺物 第2ブロックからは73点の遺物が検出された。石器組成は表3に示したとおりであり、石核と剥片のみからなっている。2次加工のある石器を含まず、第1ブロックと近似した様相を呈している。

1～6に剥片、7、8に石核、9と10に接合資料を示した。接合資料9は泥岩1を素材とする石核(9c)と剥片2点(9a、9b)の接合したものである。図の4と6の剥片も泥岩1から作られている。ブロック状の円礫を素材とし、打面を固定して石核を半周するように剥片が作出されている。作出剥片には縦長の不整形のものが多く、小型のものが多く、長さが20mmを超えるものはほとんどない。10は珪化岩3の例で、破損した石核に剥片が1点接合する。1に示した使用痕の認められる剥片もこの石核から落とされたものであろう。円礫の自然面を打面とし、連続的な剥片剥離が行なわれている。石核を観察すると、剥離作業面に直角に切られる古い剥離面と、これを切り、最終作業面には切られる逆位の剥離面があるので、これが本来、板状の礫面つきの剥片を素材とし、腹面側に作業面を設定するものであったことが推測されよう。

7、8は石核であるが、技術的特徴を把握し難い。剥片3、5を見ると、背面を構成する剥離面の剥離方向が一定せず、あるいは、打面を一面に固定せず、求心的な剥離を繰り返すような剥離手法が採用されたのかもしれないが、判然としない。使用痕のある剥片2点のうち1点(1)は、対応する2側縁に刃こぼれがあり、楔形石器と分類する方が良いのかもしれない。

c 石器石材 73点の資料は12個体の母岩に還元された。このうち泥岩1に48点(65.8%)の資料が集中し、次いで珪化岩3が6点(8.2%)あるが、他はいずれも3点以下の少数母岩である。泥岩1と珪化岩3は接合資料を構成し、かつ残核を留めていることから、本ブロック内で消費されたものと理解される。

泥岩1の分布状況は、その大半が鍋底状の分布域と重複するという際立った特徴を示している。接合資料のうち、石核がV層、剥片2点はVII層から出土している。珪化岩3の場合、近接して出土した石核破片は鍋底状分布域内にあり、共にVII層のブロック下部から出土しているが、接合する剥片はブロック外縁部VI層上部を産出層準としている。

d 小結 第2ブロックは第1ブロックと同様に2次加工のある石器を含まず、剥片を中心とする石器組成を示している。両ブロック間のちがいは、第2ブロックでは2個体の母岩の消費が行なわれている点であろうが、あまり本質的な差異を指摘することはできない。分布状況に関する特異性に就いては決論を留保したいが、これと同様の出土状況は他にも指摘し得てであろう。例えば、井戸向遺跡S-24aブロック(田村 1987)では、所謂グリーナス曲線分布とは性格を異にするかと思われる、やはり鍋底状の落ち込みを検出し、これを土坑の一種と積極評価したが、遺物移動のメカニズムを早急に解明すべきである。

御堂島ら(御堂島 上本 1987)の周水河作用による遺物移動のメカニズムに関する実験的研究によれば、石器の垂直移動には、重量、底面積、埋没時の石器の垂直高の3要素が関与していることが推測されており、今後の遺跡へのフィードバックが期待されよう。

表4 第2ブロックの石器属性

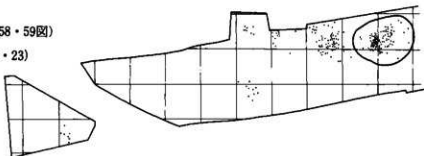
No.	遺物No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	先端	使用痕	折面	母岩
1	II A-88-1	削片	26 × 12 × 3	1.0		-	-	-	C-H-2	F	-	-	泥岩 1
2	II A-88-2	削片	11 × 17 × 5	0.5									泥岩 1
3	II A-88-3	削片	12 × 11 × 3	0.3									泥岩 1
4	II A-88-4	削片	11 × 18 × 3.5	0.7									泥岩 1
5	II A-88-6	削片	26 × 12.5 × 4	1.1		1(0)	6.5 × 3	115°	H-3	F	-	-	泥岩 1
6	II A-88-7	削片	12 × 6 × 1.5	0.1									泥岩 1
7	II A-88-8	削片	24 × 16 × 3.5	1.3	6	1(0)	5 × 2.5	105°	C-H-1	F	-	-	泥岩 1
8	II A-88-9	削片	14 × 12 × 3	0.5									泥岩 1
9	II A-88-10	削片	8 × 6 × 2	0.1									泥岩 1
10	II A-88-11	削片	27 × 22 × 8.5	4.2		2(0)	26 × 4.5	95°	C-B-1 → H-1	F	-	-	珪化岩 3
11	II A-88-12	削片	9 × 14 × 2.5	0.2									泥岩 1
12	II A-88-13	削片	4 × 4 × 1	<0.1									泥岩 1
13	II A-88-14	削片	12 × 18 × 2.5	0.6									泥岩 1
14	II A-88-15	削片	17 × 11 × 5.5	0.7									泥岩 1
15	II A-88-16	削片	21 × 11.5 × 6	1.4		1(0)	13.5 × 3.5	110°	H-3	-	-	t-B	安山岩 3
16	II A-88-17	削片	13 × 13.5 × 2	0.4									泥岩 1
17	II A-88-18	削片	8 × 3 × 1.5	<0.1									泥岩 1
18	II A-88-19	石核	17.5 × 33 × 29	30.8	9c								泥岩 1
19	II A-88-20	削片	9.5 × 5 × 2	0.1									泥岩 1
20	II A-88-21	削片	4.5 × 3 × 1	<0.1									泥岩 1
21	II A-88-22	削片U	26.5 × 21 × 5.5	2.8	2	1(0)	15 × 5	90°	C-H-3	F	+	-	珪化岩 3
22	II A-88-23	削片	12 × 12.5 × 4	0.5									泥岩 1
23	II A-88-24	削片	16 × 21 × 7	1.7									泥岩 1
24	II A-88-25	石核	44 × 41 × 16.5	29.2	10a								珪化岩 3
25	II A-88-26	削片	4.5 × 5.5 × 2	<0.1									泥岩 1
26	II A-88-27	削片	11 × 8 × 1.5	0.1									泥岩 1
27	II A-88-27	削片	12 × 9 × 2	0.2									泥岩 1
28	II A-88-28	削片	7 × 4 × 1.5	<0.1									泥岩 1
29	II A-88-29	削片	6 × 5 × 2.5	0.1									砂岩 1
30	II A-88-30	削片	13 × 11 × 4.5	0.5									泥岩 1
31	II A-88-31	削片	31 × 28 × 5	3.8		1(0)	7 × 3.5	105°	(R-1-H-1) → H-3	F	-	-	安山岩 1
32	II A-88-32	削片U	34 × 23 × 16	10.1	1	-	-	-	B-3	F	+	t-B	珪化岩 3
33	II A-88-33	削片	17 × 13 × 3.5	0.8									黒曜石 5
34	II A-88-34	削片	25 × 27 × 7.5	3.1	4	1(0)	21 × 8.5	97°	H-2	F	-	-	泥岩 1

No.	造物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	彎面構成	先端	使用紙	折面	母岩
35	II A-88-37	石核	19.5×16.5×18	2.9	8								黒曜石 1
36	II A-88-38	削片	11×14.5×2	0.2									黒曜石 3
37	II A-88-39	削片	27×38.5×9	6.8	5	1(0)	15×5	101°	R-1→H-7	F	-	-	ホルンフェルス 1
38	II A-88-40	削片	20×15.5×3.5	1.0	10b	1(0)	4×2	90°	R-1→H-1	H	-	-	珪化岩 3
39	II A-88-41	削片	31×32×12.5	9.2	3	1(0)	11×3	100°	L-1→B-2 →H-4	F	-	-	砂岩 1
40	II A-88-42	削片	11×10.5×5.5	0.5									黒曜石 4
41	II A-88-43	削片	13×7×4.5	0.3									黒曜石 3
42	II A-88-44	削片	21×12×6.5	1.4									黒曜石 1
43	II A-88-45	削片	17×12×4.5	0.9		-	-	-	H-2	-	-	t-B	黒曜石 1
44	II A-88-46	削片	10×21×3	0.6									泥岩 1
45	II A-88-47	削片	21.5×13×3.5	0.6		1(0)	6.5×2	105°	R-5	F	-	-	泥岩 1
46	II A-88-49	削片	22×11×2	0.5									泥岩 1
47	II A-88-50	削片	17.5×12×4	0.6	9b	-	-	-	H-2	O	-	t-M	泥岩 1
48	II A-88-51	削片	25×17×4	1.3		2(0)	13×4	95°	R-3→H-1	F	-	-	泥岩 1
49	II A-88-52	削片	17.5×8×3	0.3									泥岩 1
50	II A-88-54	削片	7×10×1.5	<0.1									泥岩 1
51	II A-88-55	削片	15×19×6	1.1		1(0)	14.4×6	85°	B-1→H-2	F	-	-	泥岩 1
52	II A-88-56	削片	15×18.5×4	1.0		-	-	-	H-2	F	-	t-B	泥岩 1
53	II A-88-57	削片	16×24×4	1.0		-	-	-	不明1→B-1 →H-3	F	-	-	泥岩 1
54	II A-88-58	削片	20×13×4	1.1		1(0)	9×4	92°	B-1→H-2	F	-	-	安山岩 1
55	II A-88-59	削片	12×12.5×2.5	0.2									泥岩 1
56	II A-88-60	削片	16×10×2	0.4									泥岩 1
57	II A-88-61	削片	22×12×2	0.6		-	-	-	H-3	H	-	-	泥岩 1
58	II A-88-62	削片	10×10×3	0.2									黒曜石 5
59	II A-88-63	石核	28×36×4	1.5	10a								珪化岩 3
60	II A-89-57	削片	23×14×25	0.9		1(0)	5×2	140°	H-3	F	-	-	泥岩 1
61	II A-89-58	削片	11×18×3.5	0.6		3(1)	12×35	105°	B-1→H-2	H	-	-	泥岩 1
62	II A-98-1	削片	17×7×2.5	0.3		-	-	-	H-3	F	-	-	黒曜石 2
63	II A-98-4	削片	11×10×5	0.5									泥岩 1
64	II A-98-5	削片	10×10×4	0.3									泥岩 1
65	II A-98-6	削片	11×13.5×2	0.3									泥岩 1
66	II A-98-7	削片	16.5×18×3	0.8	9a	1(0)	11.5×2.5	90°	C→H-1	F	-	-	泥岩 1
67	II A-98-8	削片	8×12×3	0.2									泥岩 1
68	II A-98-9	削片	13×11.5×1	0.1									黒曜石 5
69	II A-98-10	削片	14×14.5×6	0.7									泥岩 1
70	II A-98-11	削片	5×3.5×1.5	<0.1									泥岩 1
71	II A-98-13	削片	6×8×2.5	<0.1									黒曜石 2
72	II A-99-5	石核	2.7×39×16	13.5	7								安山岩 2
73	II A-99-6	削片	23×12×3	0.9		1(0)	10×3	105°	H-4	F	-	-	黒曜石 2

第3ブロック

(第26・27・57・58・59図)

(図版14・21・22・23)



a 分布状況 IIIA-80区を中心に検出された。第2ブロックに東接し、第1、第2、第3と3つのブロックの並存する状態が看取される。遺物はIIIA-90ポイントの北側に剥片類の濃密な飛散範囲が認められ、これの東側に礫片、剥片、ナイフ形石器等から構成される比較的まばらな分布域がひろがっている。垂直分布の状況は、第2ブロックと比較するとノーマルであり、V層中位を中心として、IV層からVI層の範囲内に収まっている。第1、第2ブロックよりも多少上部に位置するようにも見えるが、断定することはできない。

b 出土遺物 検出された遺物の総数は140点に達し、今回の調査において最も資料数に恵まれたブロックであった。16点の礫を除外した石器組成は、ナイフ形石器5点、削器2点（1個

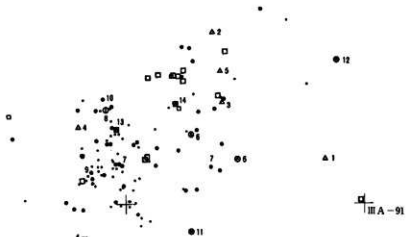
表5 第3ブロックの石器組成

母岩番号	ナイフ形石器	両面形器	剥片/剥片片	石核	剥片	石礫	原石	礫	総数	数比(%)	総重量(g)	重量比(%)
安山岩 4	0	0	0	0	0	0	0	10	10	7.2	170.3	22.8
安山岩 5	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.7	196.5	26.3
安山岩 6	0	2	0	1	0	11	0	0	14	10.0	30.3	4.0
安山岩 7	1	0	0	0	0	8	0	0	9	6.4	11.5	1.5
安山岩 8	1	0	0	0	0	9	0	0	10	7.2	19.7	2.6
安山岩 9	1	0	0	0	0	1	0	0	2	1.4	1.8	0.2
安山岩 10	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.7	4.4	0.6
安山岩 11	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0.7	8.9	1.2
砂岩 3	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.7	92.0	12.3
砂岩 4	0	0	0	0	0	0	0	2	2	1.4	6.6	0.9
砂岩 5	0	0	0	0	0	2	1	0	3	2.1	52.8	7.0
砂岩 6	0	0	0	0	2	64	0	0	66	47.1	131.3	17.5
砂岩 7	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.7	1.1	0.1
泥岩 1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.7	0.1	<0.1
泥岩 2	1	0	0	0	0	12	0	0	13	9.3	16.4	2.1
泥岩 3	0	0	0	0	0	2	0	0	2	1.4	2.6	0.3
黒曜石 2	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.7	0.5	<0.1
流紋岩 1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.7	1.6	0.2
不明	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.7	0.1	<0.1
総数	5	2	0	1	2	113	2	15	140	100	748.5	100
組成比 (%)	3.7	1.4	0	0.7	1.4	80.7	1.4	0	10.7			

II A-89

III A-80

III A-81



II A-99

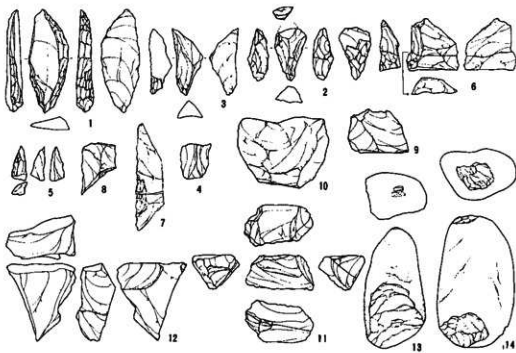
III A-91



II A-99

III A-90

III A-91

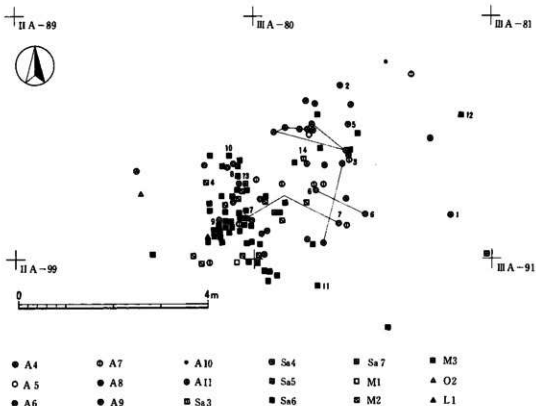


第26図 第3ブロック①

体)、剥片113点、石核2点であり、他に石槌が2点、原石が1点ある。

1～5をナイフ形石器に分類したが、4は撥ね物、5は細かな破片であるため、状態を観察し得るのは1～3の3点にすぎない。1は2側縁加工の例。打面を基部側においている。一見すると縦長剥片製のように見えるが、背が高く、素材剥片の本来の形状を大きく変更している可能性があり、俄かに断定することは困難である。安山岩11を素材にしているが、この母岩は本資料を以って唯一とする。2は尖端部を欠損する基部側の破片。横断面が3角形となっており、角錐状石器に通じる雰囲気は漂っている。また、基部に腹面剝離が加えられている。3は縦長不整形の剥片の打面を折り取るような2次加工の認められるもの。2が安山岩8、3が安山岩7を素材としているが、両母岩共に他に少量の剥片類がある。6は側削器であろう。背面右側縁に簡単な2次加工が認められる。

7～10に剥片、8、9に石核2例を示した。13、14は石槌である。第3ブロックからは112点の剥片が検出されているが、このうち64点を（細粒）砂岩6が占め、石核2点もこの母岩に帰属している。図示した剥片のうち、7、8が安山岩6であるが、9、10に砂岩6の例を掲げた。砂岩6の剥片を観察すると、横に長い矩形をしているものが多い。10の例が典型的なのであるが、幅の広い打面を保持し、かつ石核底面を残した板状のものである。また、打面、底面共に



第27図 第3ブロック②

1枚の剥離面から構成され、剥離角は110°前後に集中している。11、12共にかかり消耗した状態の石核であるが、11の正面、12の左側面が作業面であるので、剥片の特徴とほぼ一致した状況を窺うことができる。これと剥片の背面構成をあわせて吟味することによって、本母岩の剥片剥離技術の概要を知ることができるであろう。

c 石器石材 本ブロックを構成する石材は表5に示したように、安山岩、(細粒)砂岩、泥岩、黒曜石、流紋岩の5種であるが、黒曜石は隣接する第2ブロックからの混入品であるかもしれない。また、石器以外に礫片が15点あり、これには安山岩2個体、砂岩2個体、流紋岩1個体が含まれている。礫は安山岩5の1個体が完存しているが、他は全て破碎しており、表面が暗赤色に変色しているものが大半である。

各母岩の分布状況で特に注目されるのは砂岩6で、a項で指摘した剥片の集中部分を構成している。すなわち、剥片の集中部分には砂岩6の剥片が多く含まれていることになる。しかし、この部分が砂岩6によってのみ構成されている訳ではなく、同時に安山岩6や泥岩2などの剥片類もある程度のまとまりをもちながら混在している点に注意したい。

d 小結 第3ブロックは2つの部分の統一的呼称である。ひとつはブロック西半の特定母岩の消費スペースであり、もうひとつは、ブロック東半の小礫群を中心としたまとまりであり、そこには狩猟具や加工具が含まれている。小規模ではあるが礫群の存在と石器組成の多様性という点で、第1、第2ブロックの様相とは大きく異なっているように思われる。各種の石器類とともに、小規模ながら礫群を保有し、該期の典型的なブロックと評価することができよう。

表6 第3ブロックの石器属性

No.	遺物No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	未端	使用痕	折面	母岩
1	II A-89-1	剥片	18 × 11 × 4	0.6		1(0)	7 × 1.5	105°	H-2	F	-	-	泥岩 2
2	II A-89-2	剥片	14 × 11 × 5	0.8		1(0)	12 × 4.5	85°	H-2	F	-	-	泥岩 2
3	II A-89-3	礫	10 × 8 × 3	1.6									流紋岩 1
4	II A-89-3	剥片	9 × 8 × 2	0.1									砂岩 6
5	II A-89-4	剥片	15.5 × 12 × 4.5	0.8									砂岩 6
6	II A-89-5	剥片	8 × 13 × 4	0.5									砂岩 6
7	II A-89-5	剥片	9 × 14 × 6	0.7									砂岩 6
8	II A-89-5	剥片	5 × 3 × 2	<0.1									砂岩 6
9	II A-89-6	剥片	6 × 3 × 2	<0.1									砂岩 6
10	II A-89-7	剥片	15 × 26 × 5	2.4		1(0)	24 × 4	110°	H-1	F	-	-	砂岩 6
11	II A-89-8	剥片	14 × 25.5 × 7	2.7		1(0)	14 × 6	110°	H-1	F	-	-	砂岩 6
12	II A-89-9	剥片	22 × 32 × 14.5	8.3	9	-	-	-	H-2	O	-	-	砂岩 6
13	II A-89-10	剥片	9.5 × 5 × 3	0.1									安山岩 6
14	II A-89-11	剥片	8 × 11 × 4	0.4									砂岩 6
15	II A-89-11	剥片	8 × 5 × 2.5	0.1									砂岩 6
16	II A-89-12	剥片	9 × 12 × 3.5	0.4									砂岩 6
17	II A-89-14	剥片	7 × 11 × 2.5	0.1									砂岩 6

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	目	打面	打面長×高	打角	背面構成	未端	使用 痕	折面	母 岩
18	II A-89-15	断片	4 × 3 × 2	<0.1									砂岩 6
19	II A-89-16	断片	20 × 17 × 8	1.5	7	-	-	-	H-1→L-3	F	-	t-B	安山岩 6
20	II A-89-17	断片	15.5 × 8 × 4.5	0.7									砂岩 6
21	II A-89-18	断片	8 × 5 × 4	0.1									砂岩 6
22	II A-89-19	断片	10 × 21.5 × 5	1.0		100	18 × 2.5	120°	B-6→H-1	O	-	-	泥岩 2
23	II A-89-20	断片	7 × 7 × 3	0.3									泥岩 2
24	II A-89-21	断片	9 × 17 × 3	0.4									砂岩 6
25	II A-89-22	断片	9 × 4.5 × 3	0.1									砂岩 6
26	II A-89-22	断片	5 × 8 × 2	0.1									砂岩 6
27	II A-89-23	断片	21 × 9 × 5	1.1									砂岩 6
28	II A-89-24	ナイフ	18 × 17 × 10	2.2	4								泥岩 2
29	II A-89-25	断片	20 × 28 × 7	2.9		100	18 × 11	135°	L-1→R-1	F	-	-	安山岩 6
30	II A-89-26	断片	12 × 8.5 × 7	0.8									砂岩 5
31	II A-89-27	断片	37 × 48.5 × 14	28.8	10	100	44.5 × 12	120°	H-3	O	-	-	砂岩 6
32	II A-89-28	断片	8.5 × 9 × 2	0.1									安山岩 6
33	II A-89-29	断片	13 × 34 × 6.5	2.5		100	32.5 × 6	135°	H-6	O	-	-	泥岩 3
34	II A-89-31	断片	15.5 × 28.5 × 11.5	4.1		-	-	-	不明		-	-	砂岩 6
35	II A-89-32	断片	11 × 7 × 5	0.3								破片	砂岩 6
36	II A-89-33	断片	8.5 × 14 × 3.5	0.5									砂岩 6
37	II A-89-34	断片	17.5 × 13 × 2	0.5		100	4 × 1.5	100°	B-1→H-2	F	-	-	安山岩 6
38	II A-89-35	石器	61 × 29 × 22.5	51.8	13								砂岩 5
39	II A-89-36	断片	7.5 × 5 × 2	<0.1									砂岩 6
40	II A-89-37	断片	2 × 2 × 1	<0.1									不明
41	II A-89-38	断片	37 × 24 × 10	6.6		-	-	-	H-2	F	-	v-L	安山岩 6
42	II A-89-39	断片	21 × 33 × 7	4.1		100	14.5 × 4.5	112°	不明→H-1	F	-	-	砂岩 6
43	II A-89-39	断片	9 × 4 × 2.5	<0.1									砂岩 6
44	II A-89-40	断片	12 × 7 × 3.5	0.2									砂岩 6
45	II A-89-41	断片 R	21 × 28 × 7.5	2.8	8	100	14.5 × 5	90°	B-2→H-1	F	-	-	安山岩 6
46	II A-89-42	断片	5 × 3 × 1.5	<0.1									砂岩 6
47	II A-89-43	断片	8 × 7.5 × 4	0.2									砂岩 6
48	II A-89-44	断片	32.5 × 32 × 8.5	4.7		100	5 × 1	115°	R-1→H-1	F	-	-	泥岩 2
49	II A-89-45	断片	9 × 7 × 2.5	0.1									砂岩 6
50	II A-89-46	断片	9.5 × 3.5 × 2	<0.1									砂岩 6
51	II A-89-47	断片	16.5 × 14.5 × 3	0.5		100	-	-	R-1→L-2→ H-1	O	-	-	黒曜石 2
52	II A-89-48	断片	12 × 9 × 6.5	0.5									安山岩 4
53	II A-89-49	断片	39 × 14 × 6	2.2		100	5.5 × 4	110°	H-2	F	-	-	安山岩 6
54	II A-89-50	断片	9 × 8 × 2	0.1									砂岩 6
55	II A-89-51	断片	7 × 9 × 3	0.2									泥岩 2
56	II A-89-52	断片	10 × 7 × 1.5	0.1									安山岩 7
57	II A-89-53	断片	5.5 × 5 × 2	0.1									砂岩 6
58	II A-89-53	断片	7 × 5 × 2.5	<0.1									砂岩 6

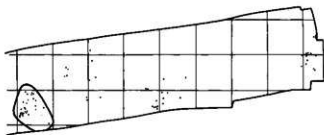
No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	先端	使用痕	折面	母岩
59	Ⅱ A-89-54	削片	7.5 × 6 × 3	0.1									砂岩 6
60	Ⅱ A-89-55	削片	10 × 7 × 3.5	0.2									砂岩 6
61	Ⅱ A-89-59	削片	10.5×7.5 × 3	0.2									砂岩 6
62	Ⅱ A-99-1	削片	4.5 × 4 × 2	<0.1									砂岩 6
63	Ⅱ A-99-2	削片	8 × 10 × 3	0.1									泥岩 1
64	Ⅱ A-99-3	削片	8 × 19 × 5.5	1.0		1(0)	10 × 5.5	125°	H-1	H	-	-	安山岩 7
65	Ⅱ A-99-4	削片	25 × 26.5 × 6	3.5		1(0)	20 × 4.5	110°	H-1→B-1	O	-	-	泥岩 2
												→H-2	
66	Ⅲ A-80-1	削片	18 × 7.5 × 6	0.4									泥岩 2
67	Ⅲ A-80-1	削片	11 × 5 × 2	0.1									泥岩 2
68	Ⅲ A-80-2	削片	10 × 13 × 3	0.4									砂岩 6
69	Ⅲ A-80-2	削片	7.5 × 13.5 × 2	0.2									砂岩 6
70	Ⅲ A-80-3	削片	16 × 21 × 7.5	3.5		2(0)	14 × 5	90°	H-2	H	-	-	砂岩 6
71	Ⅲ A-80-4	削片	12 × 7 × 3.5	0.2									安山岩 8
72	Ⅲ A-80-5	削片	14 × 10 × 3	0.2									安山岩 6
73	Ⅲ A-80-7	削片	11 × 10 × 3	0.1									安山岩 7
74	Ⅲ A-80-8	削片	25 × 22 × 7	4.4		2(0)	15 × 5	110°	H-3	F	-	-	砂岩 6
75	Ⅲ A-80-9	削片	16 × 19.5 × 5.5	1.2		1(0)	11.5 × 5	92°	H-3	F	-	-	泥岩 2
76	Ⅲ A-80-10	削片	16 × 28 × 3	2.1		-	-	-	H-2	F	-	-	砂岩 6
77	Ⅲ A-80-11	削片	9 × 17 × 3	0.4									泥岩 2
78	Ⅲ A-80-12	削片	12 × 17.5 × 4.5	1.0		1(0)	14.5 × 3.5	110°	不明-2→H-2	F	-	-	安山岩 6
79	Ⅲ A-80-13	削片	7 × 10 × 2	<0.1									安山岩 7
80	Ⅲ A-80-14	礫	36 × 24 × 12.5	7.5									安山岩 4
81	Ⅲ A-80-15	礫	16 × 12 × 8	1.4									安山岩 4
82	Ⅲ A-80-16	礫	21.5 × 16 × 7										安山岩 4
83	Ⅲ A-80-16	礫	62 × 40 × 43	78.5									安山岩 4
84	Ⅲ A-80-17	礫	51 × 44 × 28	52.1									安山岩 4
85	Ⅲ A-80-18	礫	50 × 80 × 42	196.5									安山岩 5
86	Ⅲ A-80-19	礫	17.5 × 29 × 18	18.8									安山岩 4
87	Ⅲ A-80-20	削片	6 × 7.5 × 5	0.2									砂岩 6
88	Ⅲ A-80-21	石髓	69 × 40 × 29	92.0	14								砂岩 3
89	Ⅲ A-80-22A	削片	16 × 12 × 6	0.9									砂岩 6
90	Ⅲ A-80-22B	削片	9 × 21 × 9	1.4									砂岩 6
91	Ⅲ A-80-22C	削片	26 × 8 × 7.5	2.2									砂岩 6
92	Ⅲ A-80-22D	削片	11 × 25 × 4.5	1.5									砂岩 6
93	Ⅲ A-80-22	削片	7 × 11 × 0.5	0.2									砂岩 6
94	Ⅲ A-80-22	削片	12 × 6 × 4	0.2									砂岩 6
95	Ⅲ A-80-22	削片	6 × 4 × 4	0.1									砂岩 6
96	Ⅲ A-80-22	削片	5 × 5 × 2	<0.1									砂岩 6
97	Ⅲ A-80-23	削片	24 × 23 × 1	3.6		1(0)	28.5 × 11	135°	不明-1→H-2	F	-	-	安山岩 7
98	Ⅲ A-80-24	削片	37 × 17 × 7	5.3	7	1(0)	4 × 2.5	77°	H-1→L-3	-	-	t-H	安山岩 6
99	Ⅲ A-80-25	削片	11 × 15.5 × 4.5	1.0		1(0)	9 × 2	95°	H-1→B-2	F	-	-	泥岩 2
												→H-2	

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	部	打面	打面長×高	打角	背面構成	未端	使用痕	断面	母岩
100	ⅢA-80-26		12 × 14 × 4	0.5									安山岩 7
101	ⅢA-80-27	削片	16 × 20 × 8	1.5		100	16 × 8	85°	H-2	F	-	-	安山岩 7
102	ⅢA-80-28	削片	23 × 19 × 5.5	2.1		100	13 × 5.5	110°	H-2	F	-	-	安山岩 8
103	ⅢA-80-29	磨器	10 × 28 × 10	3.6	6								安山岩 6
104	ⅢA-80-30	削片	9 × 5 × 0.2	0.1									安山岩 6
105	ⅢA-80-31	削片	13 × 29 × 7.5	2.4		-	-	-	C→H-1	F	-	t-B	安山岩 8
106	ⅢA-80-32	削片	13 × 21 × 5	1.0		-	-	-	R-3	F	-	t-B	安山岩 9
107	ⅢA-80-33	削片	13 × 7 × 3.5	0.3									砂岩 6
108	ⅢA-80-34	削片	30.5 × 18 × 6.5	3.0		-	-	-	H-2	F	-	t-B	安山岩 8
109	ⅢA-80-36	削片	27 × 14 × 18.5	3.2		100	10.5 × 7	135°	R-1	-	-	t-H	安山岩 8
110	ⅢA-80-37	削片	26 × 32 × 10	9.1		300	31 × 8.5	111°	H-1	F	-	-	砂岩 6
111	ⅢA-80-38	磨	30 × 18 × 16	7.6									安山岩 4
112	ⅢA-80-39	ナイフ	26 × 16.5 × 10	3.6	2								安山岩 8
113	ⅢA-80-40	削片	19 × 22 × 11.5	4.4		100	14 × 8	110°	C→H-1	-	-	t-H	安山岩 10
114	ⅢA-80-41	削片	8 × 15 × 4	0.7									安山岩 7
115	ⅢA-80-42	削片	15 × 14 × 3	0.5									安山岩 8
116	ⅢA-80-43	石核	40 × 36.5 × 18.5	23.4	12								砂岩 6
117	ⅢA-80-44	削片	12 × 10 × 5	0.6									砂岩 6
118	ⅢA-80-45	削片	13 × 29 × 3.5	1.3		100	22 × 4	125°	H-1→L-1	F	-	-	安山岩 8
119	ⅢA-80-46	削片	21.5 × 11.5 × 3	0.6		100	8 × 2	122°	H-2	F	-	-	安山岩 8
120	ⅢA-80-47	磨	9 × 11.5 × 4.5	0.4									安山岩 4
121	ⅢA-80-48	ナイフ	34 × 15 × 10	3.9	3								安山岩 7
122	ⅢA-80-49	磨器	19.5 × 25 × 9	3.4	6								安山岩 6
123	ⅢA-80-50	削片	7 × 14.5 × 4	0.3									砂岩 6
124	ⅢA-80-51	磨	22 × 28 × 9.5	6.2									砂岩 4
125	ⅢA-80-51	磨	10 × 7 × 4.5	0.4									砂岩 4
126	ⅢA-80-51	削片	8 × 6 × 4	0.2									砂岩 5
127	ⅢA-80-52	削片	35.5 × 17 × 6.5	2.8		100	24 × 5	125°	H-2	F	-	-	安山岩 8
128	ⅢA-80-53	磨	19 × 14 × 13	3.5									安山岩 4
129	ⅢA-80-54	ナイフ	17 × 11 × 7	0.8	5								安山岩 9
130	ⅢA-80-56	ナイフ	52.5 × 21 × 8.5	8.9	1								安山岩 11
131	ⅢA-80-57	磨	12 × 21.5 × 5	1.1									砂岩 7
132	ⅢA-90-1	削片	10.5 × 10 × 2.5	0.1									砂岩 3
133	ⅢA-90-2	削片	6 × 5 × 3	0.1									砂岩 6
134	ⅢA-90-2	削片	5 × 4 × 4	<0.1									砂岩 6
135	ⅢA-90-2	削片	5 × 3 × 1	<0.1									砂岩 6
136	ⅢA-90-3	削片	25 × 9 × 5	1.6									砂岩 6
137	ⅢA-90-4	削片	17 × 8 × 4.5	0.8									砂岩 6
138	ⅢA-90-5	削片	10 × 7 × 3.5	0.2									砂岩 6
139	ⅢA-90-6	石核	20.5 × 35.5 × 18	13.5	11								砂岩 6
140	ⅢA-90-7	削片	19 × 30 × 8	4.9		200	27 × 8.5	110°	H-1	F	-	-	砂岩 6

第4ブロック

(第28・59・60図)

(図版14・23・24)



a 分布状況 IIIA-86区にあり、第3ブロックの東方約30m、台地端部に近い緩斜面に位置している。ブロックの大きさは、長軸4.3m 短軸3 m ぐらいで、この範囲から少しはなれたところからナイフ形石器が1点検出されている。ブロック自体の密度はあまり高くなく、剥片を主体とした構成をとっているが、細かな剥片(削片)はブロックの前半に集中をみせている。産出層準はV層の下部と推定され、第1～第3ブロックの想定層準に近いようである。

b 出土遺物 出土した遺物は全て石器類で、礫は含んでいない。総数で32点と少数であるが、ナイフ形石器を3点含んでいる。残り29点は全て剥片であり、石核を含んでいないが、注目すべき接合資料が認められる。

1～3 a がナイフ形石器である。1は縦長剥片の斜め整形による2側縁加工のもので、基部は尖り気味となり、打面を完全に除去している。明らかに第2ブロックの類品(資料番号1)に近いであろう。泥岩4を素材とするが、この母岩はブロック内に別資料が遺存していない。2と3は同一母岩(安山岩13)の横打剥片製のものである。2は横打剥片の打面部を折り取り、更に対応する縁辺にも簡略な2次加工の認められる例で、切出形石器の仲間であろう。3 a もこれに近い加工工程を踏んでいるが、打面に対応する縁辺の剝離は入念である。これには剥片が1点接合する(3 b)が、この剥片は所謂ブランディングチップである。斜め整形の縦長剥片製ナイフ形石器と、切出形に近い横長剥片製ナイフ形石器の共伴に注意したい。

4～6 c に剥片を示した。4、5は安山岩12の同一母岩によるもの。4の背面には多方向からの剝離面が入り乱れ、打点の頻繁な移動があったのであろう。5は礫面付きの例で、平坦打面上に2箇所に加撃痕が観察される。かつてパンチマークと呼ばれたものであるが、直接加撃

表7 第4ブロックの石器組成

母岩番号	ナイフ形石器	削片	削片U	石核	剥片	石核原石	礫	総数	数量比(%)	総重量(g)	重量比(%)
安山岩 12	0	0	0	0	4	0	0	4	12.5	26.8	44.2
安山岩 13	2	0	0	0	19	0	0	21	65.7	19.3	31.8
泥岩 3	0	0	0	0	5	0	0	5	15.6	9.1	15.0
泥岩 4	1	0	0	0	0	0	0	1	3.1	4.9	8.0
チャート 2	0	0	0	0	1	0	0	1	3.1	0.5	1.0
総数	3	0	0	0	29	0	0	32	100	60.6	100
組成比(%)	9.4	0	0	0	90.6	0	0				

によっても生じると言われている。

次に6の接合資料について観察する。素材は泥岩3である。この母岩に帰属する資料は全てで5点あり、このうち4点が接合し、残余は細かい剥片である。6 a→6 b→6 cという順番で剥離がすすめられている。3点はいずれも石核底面を保持する横打剥片である。石核が遺存せず剥離工程の実態を窺うためには制約が大きいが、6 aの背面が重要である。6 aの背面には3面の剥離面が識別される。これらを打面に接する面(a₁)、底面(a₂)、及びこれに扶まれる面(a₃)とする。a₁面と打面との切り合いは良く判らないが、あるいは打面は切られているのかもしれない。a₃面の一端には明瞭なポジティブバルブがあるので、各面の新旧はa₂→a₃→a₁となろう。a₂→a₃の過程が石核素材たる剥片の作出過程であるので、この接合資料の底面は剥片のポジ面であることは明らかである。従って、6 aの打面は素材剥片の背面となり、部厚い板状の剥片素材の石核の存在が復元されることになる。a₃→a₁の過程は、打面との切り合いははっきりしないので断定は避けたいが、想定される石核におけるファーストブレイクの作出段階である可能性が高い。

6 bの打面を見ると、6 aの打面に認められる剥離面を切る2枚の剥離面があり、このうちの1枚にはネガティブバルブが看取されるので、6 a→6 bと剥片剥離の進行する間に打面の山形修整が介在することが窺われる。もうひとつ重要であるのは6 a→6 bの進行過程における打点の横への移動である。この移動は6 b→6 cの過程においても看取される。このため、各剥片の打面はく字状に屈曲するが、ポジ面とネガ面の打点位置が僅かに横にずれるため、それはゆるやかな曲線を描くものになっている。

c 石器石材 本ブロックにおいて認められる石材は、安山岩、泥岩、チャートの3種類であった。このうち、チャートは細片のみで、泥岩、安山岩、就中安山岩13とした資料が多く、ナイフ形石器とプランティングチップの接合によく象徴されているように、ブロック内におけるこの母岩を素材としたナイフ形石器の製作が想定されよう。また、この母岩の分布がブロックの規模を規定するものとなっているが、具体的な工作位置の推定は困難であった。泥岩3に関しては4点の接合関係からブロック内における剥離作業を推定することもできようが、各資料間には相当の距離があり、また、石核を遺存しないなど、別地点からの搬入の可能性もあって、断定することは困難であろう。

d 小結 V層下部を産出層準とする小規模なブロックで、調査区域内に関連ブロックを見出すことはできなかった。石器組成としては第3ブロックに近いが、礫を含んでいない。資料の過半は単一母岩による石器製作によるものであるが、注目すべき横打剥片の生産技術の一端をも開示している。

南関東地方において、AT降下以後に横打剥片の多出する段階の存在する事実が指摘されて久しい。そしてこの背景として瀬戸内技法との関連の有無が議論されていることも周知のとおり

りである。諸種の技法が提唱され彼らの異同が論じられている。本ブロックの横打剃片技術は所謂三国技法に最も近く、殿山技法とも通ずる点がある。ところで、いち早く高井戸東遺跡報文中で指摘されているとおり、南関東地方においては、A T降下以前の剃片剥離技術の一部に、多様な横打剃片作出技術を保有していた。筆者は、武蔵野台地IV・V層石器群の存立基盤として、このような横打的伝統が深く関与していると理解しているが、瀬戸内方面との関連を如何に理解したらよいのであろう。問題は多岐に亘るようである。

表8 第4ブロックの石器属性

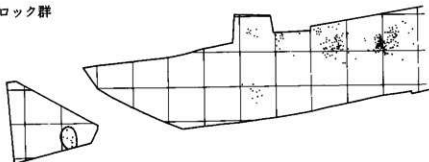
No.	遺物No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	頭	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	母岩
1	田A-75-1	削片	7 × 19.5 × 5	0.5									安山岩 13
2	田A-75-1	削片	10 × 16 × 3	0.6									安山岩 13
3	田A-86-1	ナイフ	36 × 15 × 7.5	3.5	3a								安山岩 13
4	田A-86-2	ナイフ	49 × 15 × 6.5	4.9	1								凝岩 4
5	田A-86-3	剃片	16 × 23.5 × 6	1.4		100°	6 × 3	125°	不明1→H-6	F	-	-	安山岩 13
6	田A-86-4	剃片	16 × 19 × 3.5	1.1		100°	15.5 × 4	90°	R-1→L-1 →H-1	F	-	-	安山岩 13
7	田A-86-5	削片	12 × 9 × 3	0.1									安山岩 13
8	田A-86-6	ナイフ	32 × 19 × 8	3.6	2								安山岩 13
9	田A-86-7	削片	17 × 12.5 × 6.5	0.9									安山岩 12
10	田A-86-8	削片	9 × 7 × 2.5	0.1									安山岩 13
11	田A-86-9	削片	13.5 × 8 × 2.5	0.1									安山岩 13
12	田A-86-9	削片	4 × 6.5 × 1.5	<0.1									安山岩 13
13	田A-86-10	削片	10.5 × 13 × 3	0.3									安山岩 13
14	田A-86-11	剃片	35 × 23 × 13	9.7	5	100°	18 × 6	165°	C→H-2	H	-	-	安山岩 12
15	田A-86-12	剃片	17 × 18 × 4	1.0	6a	100°	19.5 × 2.5	118°	H-2(接合後)	O	-	-	凝岩 3
16	田A-86-14	剃片	11 × 20 × 4.5	1.0		100°	14 × 2	165°	H-4	O	-	-	安山岩 13
17	田A-86-15	剃片	18 × 29 × 3.5	1.7		100°	15.5 × 3	115°	不明1→H-3	F	-	-	安山岩 13
18	田A-86-16	剃片	18 × 41.5 × 5	3.5	6b	3(1)	36 × 5.5	125°	H-2	O	-	-	凝岩 3
19	田A-86-17	削片	10.5 × 8.5 × 5.5	0.5									チャート 2
20	田A-86-18	剃片	32 × 35 × 10.5	12.9	4	-	-	-	B-1→L-3	F	-	t-B	安山岩 12
21	田A-86-19	剃片	12 × 16 × 6	1.0		100°	8 × 5	92°	H-5	F	-	-	安山岩 13
22	田A-86-20	剃片	20 × 22 × 6	3.3	4	100°	15 × 4.5	100°	L-2→H-1	-	-	t-H	安山岩 12
23	田A-86-21	剃片	9 × 13.5 × 2	0.3		100°	7 × 1.5	91°	H-4	-	-	t-H	安山岩 13
24	田A-86-22	削片	8.5 × 21 × 3.5	0.4	3b								安山岩 13
25	田A-86-23	削片	7 × 7.5 × 1.5	<0.1									安山岩 13
26	田A-86-24	削片	6 × 12.5 × 1	0.1									安山岩 13
27	田A-86-25	剃片	15.5 × 36 × 4	1.4	6c	3(0)	29 × 4	115°	H-1	O	-	-	凝岩 3
28	田A-86-26	剃片	16.5 × 25.5 × 5	3.0	6a	100°	19.5 × 2.5	110°	H-2(接合後)	O	-	v-R	凝岩 3
29	田A-86-31	削片	7 × 7.5 × 3.5	0.2									凝岩 3
30	田A-86-32	削片	15 × 17 × 4	0.8									安山岩 13
31	田A-86-33	削片	7 × 5 × 1.5	<0.1									安山岩 13
32	田A-86-34	削片	24 × 12.5 × 7	2.4		-	-	-	L-1→H-3	-	-	t-M	安山岩 13

C 下層のブロック群

第5ブロック

(第29・61図)

(図版15・25)



a 分布状況 調査区の最西端、II B-11区に検出された。たいへん規模の小さなブロックで、径約2 mの範囲内に6点の遺物が散在している。石器類は、V層上部から出土し始め、VIII層にまで及んでいる。最大レベル差は1 m以上もあり、遺物量が僅少であることと相俟って、産出層準の確定はなかなか難しいが、VII a層からVII b層にかけて4点が集中するので、そのあたりに比定しておきたい。

b 出土遺物 総数6点あり、剥片5点、礫の細片1点から構成されている。1、2に剥片を、3に剥片2点の接合状況を示した。

1は単独母岩（泥岩6）の剥片である。打面を大きく残した逆三角形の形態を示している。打面、背面共に大き目の2枚の剥離面を残しており、打面と作業面との置換による剥片剥離手法がとられた可能性が高い。2と3は同一母岩（泥岩5）の資料。この母岩の場合、固定化された平坦打面から打点位置を少しずつずらしながら連続的に剥片が作出されている。作出される剥片は縦長の形状を示し、背面にも平行する稜線が残される場合がある。打面調整、頭部調整等の、剥片剥離に先行する細かな加工は加えられていない。

c 石器石材 本ブロックの石材構成は、総点数が少ないこともあって、3種の石材からなるという単純な様相を呈している。砂岩は礫の細片である。石器類は泥岩2種で、このうち、泥岩5が4点と卓越している。両母岩共に剥片のみからなり、石器組成もまた極めて単純である。なお、泥岩6は単一母岩であり、かつ産出層準が深いので、ブロックへの帰属関係に問題を残している。V層検出の剥片は泥岩5であり、残余の個体別資料がVII a層の前後から検出されて

表9 第5ブロックの石器組成

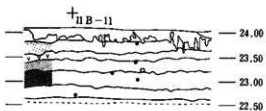
母岩番号	ナイフ形石	剥片	礫	形器	石器	剥片	石核	剥片	石核	剥片	石	礫	石	礫	総数	数量比(%)	総重量(g)	重量比(%)
砂岩 8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1			1	16.7	1.6	2.7	
泥岩 5	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0				4	66.6	28.6	47.6	
泥岩 6	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0				1	16.7	29.9	49.7	
総数	0	0	0	0	0	5	0	0	0	1				6	100	60.1	100	
組成比 (%)	0	0	0	0	0	83.3	0	0	0	16.7								

† II B-11



- 1 • 2 □
- 3b
- 3a

† II B-11

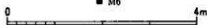


† II B-11



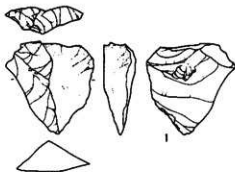
- 1 □ 2 ○
- 3b
- 3a

† II B-21



- Sa 8
- M5
- M6

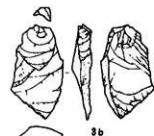
† II B-12



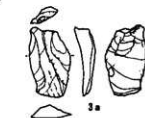
† II B-12



† II B-12



† II B-12



† II B-22



3 a+b

第29図 第5ブロック

いるところから、帰属関係に問題はないであろう。

d 小結 少量の剥片類が小範囲に散在している。上層の第1ブロックと近い印象を受けるが、遺跡内に関連するブロックが存在する可能性もあり、性格に関して議論することはできない。

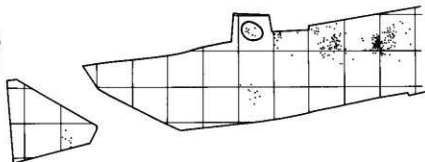
表10 第5ブロックの石器属性

No.	遺物No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	型	打面	打面長×高	打角	背面構成	未端	使用痕	折面	母岩
1	II B-11-2	鏃	22 × 17 × 5.5	1.6									砂岩 8
2	II B-11-3	剥片	28 × 39 × 6.5	5.0		-	-	-	R-6	F	-	-	泥岩 5
3	II B-11-4	剥片	48 × 28 × 8.5	5.8	3b	1(0)	9.5 × 5	115°	H-3	F	-	-	泥岩 5
4	II B-11-5	剥片	37 × 22 × 7	9.7	3a	4(3)	16 × 6	95°	H-3	F	-	-	泥岩 5
5	II B-11-6	剥片	33.5 × 28 × 8	8.1	2	1(0)	19 × 5.5	105°	H-3	-	-	破損	泥岩 5
6	II B-11-7	剥片	51 × 46 × 15	29.9	1	3(2)	41.5 × 12.5	112°	C → H-2	F	-	-	泥岩 6

第6ブロック

(第30・62・63図)

(図版15・26・27)



a 分布状況 第1ブロックの北東約27mのあたりから検出された。第1ブロックと同様に、小規模なもので、II A-86区の中央部、径約2mの狭い範囲から少量の石器類が出土した。産出層準はVII a層の下部であると推定される(第30図)。

b 出土遺物 総数8点と少ない。石器組成は、類形器1点、使用痕の認められる剥片2点、剥片5点という単純な構成を示しており、大半が剥片類によって占められている。図に従って説明する。

1は類形器とした。平坦打面を有する縦長の剥片を素材としている。この剥片の尾部折断面から背面右側縁に沿うように小さ目の剥離が加えられ、これを一種の刻打であろうと理解した。

表11 第6ブロックの石器組成

母岩番号	ナイフ形石器	類形器	形器	剥片U形剥片	石核	剥片	石鏃	原石	鏃	総数	数量比(%)	総重量(g)	重量比(%)
安山岩 14	0	0	0	0	0	3	0	0	0	3	37.5	79.8	58.7
安山岩 15	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	12.5	12.0	8.8
泥岩 7	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	25.0	20.2	14.9
陸化岩 4	0	0	1	1	0	0	0	0	0	2	25.0	23.9	17.6
総数	0	0	1	2	0	5	0	0	0	8	100	135.9	100
組成比(%)	0	0	12.5	25.0	0	62.5	0	0	0				

折断面と刻打面との交叉する稜には微細な刃こぼれが顕著に観察され、この部位を作業縁と認定することができる。2～6 bが剥片で、2と5には刃こぼれがある。また、6 aと6 bとは接合するので、その状況を6に示した。

剥片類しか遺存せず、剥片剝離の詳細は不明であるが、観察し得た諸点を指摘しよう。初めに接合資料6を参照すると、6 b→6 aという順に剥片が落とされいるが、この間にも1枚6 bと近似した形態の剝離が作出されている。従って打点は背面に向かって右から左へと移動していく。これは第1ブロックにおける泥岩6の接合資料において確認された手法に近い。また、6 aの打面、6 bの背面右側縁には、いずれも3面からなる旧剝離面が残置されており、打面と剝離作業面の入れ換えの工程が窺知される。作出剥片は不整な矩形を呈し、打面を大きく残す場合が多い。一方、その他の剥片類の背面構成を見ると、1と2では逆位に剝離面の切り合いが認められ、打面の転位が実施されたい。打面は平坦打面と複剝離打面との両者があるが、明確な調整痕を指摘し得るものはない。

c石器石材 安山岩、泥岩、珪化岩の3種からなる。安山岩は2種に細別され、総計4母岩からなるが、総数が少ないこともあって、特定の母岩に石器が集中することはない。1母岩あたり1～3点の範囲内にあり、第5ブロックと同様の傾向が指摘される。なお、本書においてはしばしば珪化岩という名称を用いるのが、これは珪質な岩石の一般的総称にすぎない。

d小結 極めて規模の小さなブロックである。石器組成は、類形器と剥片類からなり、剥片のうちには明らかな刃こぼれのあるものが2点あるなど、木材や骨角などの加工と関連のありそうな石器が多いことは指摘しておいてよいだろう。このような小規模かつ遺物量の少ないブロックは、従来とかく一過的な露當地と考えられがちであり、皮相的な類型化が試みられる場合も散見されてきたが、ユニットブロックの有する多様な機能の一端を開示するものである可能性もあり、また調査範囲の限定されていることもあって、即断は極めて危険であろう。まず、個々のブロックの形成過程の究明に心がけねばならない。

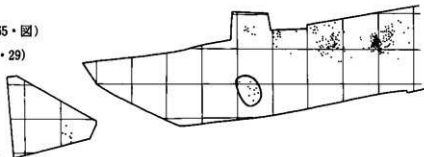
表12 第6ブロックの石器属性

No.	遺物No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	面	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	母岩
1	II A-86-1	剥片	35 × 34 × 7	6.2	6b	2(0)	13 × 6	113°	H-3	F	-	-	安山岩 14
2	II A-86-2	剥片	59 × 43 × 20	48.3	6a	3(0)	29 × 10	100°	H-6	F	-	-	安山岩 14
3	II A-86-3	剥片	52 × 34.5 × 16	25.3	3	1(0)	19.5 × 10	105°	C→H-4	F	-	-	安山岩 14
4	II A-86-4	剥片	48 × 28 × 15	18.8	4	1(0)	4.5 × 3.5	90°	H-5	F	-	-	泥岩 7
5	II A-86-6	剥片U	42 × 32 × 11	12.4	2	5(4)	22 × 11	90°	C→R-1 →B-2→H-2	F	+	-	珪化岩 4
6	II A-86-7	剥片	17 × 18 × 5	1.4									泥岩 7
7	II A-86-8	彫器	40 × 24.5 × 11	11.5	1								珪化岩 4
8	II A-86-9	剥片U	44 × 25 × 11.5	12.0	5	2(1)	17.5 × 8	105°	C→R-1 →H-3	F	+	-	安山岩 15

第7ブロック

(第31・63・64・65・図)

(図版15・27・28・29)



a 分布状況 II B-06区にあり、これは第6ブロックの南側約5 mの地点にあたる。遺物は長軸3.4m、短軸2 mの範囲内に散漫にひろがり、特に分布の疎密を指摘することはできない。器種別の分布にも特に偏りは認められない。遺物台帳によれば、VI層からVII a層にかけて出土した遺物が多いと記録されているが、投影図では何らかの要因によってレベルが高めに表示されている。ここでは現場での所見を重視して下層のブロックに編入する。この点は母岩別資料によって検証したかったのだが、本ブロックと母岩を共有するブロックは皆無であった。

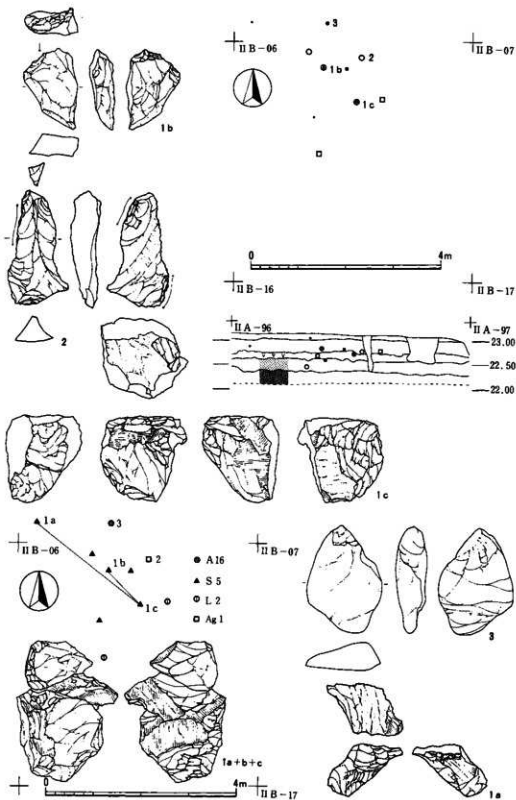
b 出土遺物 遺物は総数で10点あるが、このうち2点が礫片であったため、石器類は8点となる。内訳は、削器1点、使用痕のある剥片2点、剥片4点、石核1点である。1に石核(1c)と削片(1a)、削器(1b)の接合資料、2、3に剥片を示した。

石核1は自然面と節理面によって構成される多面体状のもので、良好な剥片の剥離された痕跡を留めていない。これに接合する削片2、削器3も、共に節理面に沿って破砕した不整な石片であり、正確な加撃面の同定もできない。一応、多打面の多面体石核の仲間としておこう。1bは剥片の一端に細かな2次加工があるが、これは表裏両面から錯向的に行なわれていて、上面から見るとZ字状の刃部が形成されている。類形器の一種とも見られよう。2は比較的整った石刃状の剥片で、側縁部の処々に細かな鱗状の剥離痕が残されている。3は部厚い礫面付きの剥片である。これ以外の剥片はいずれも小型のもので、特徴に乏しい。

c 石器石材 石材は安山岩、珪化岩、流紋岩、メノウの4種あり、各1個体分である。流紋岩は礫片であるので、石器用材としては、3種あることになる。このうち珪化岩5(多分珪質頁岩)が6点を占め、接合資料もある。この母岩はブロックの中央部分に集中しており、残余

表13 第7ブロックの石器組成

母岩番号	ナイフ形 石核	削器	形器	剥片 U 剥片 R	石核	剥片	石核	剥片	石核	剥片	種数	数量比(%)	総重量(g)	重量比(%)
安山岩	16	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	10	31.2	8.2
珪化岩	5	0	1	0	1	1	3	0	0	0	6	60	132.2	34.6
流紋岩	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	20	201.0	52.6
メノウ	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	10	17.4	4.5
総数	0	1	0	2	1	4	0	0	0	0	10	100	381.8	100
組成比(%)	0	10	0	20	10	40	0	0	0	20				



第31図 第7ブロック

の3母岩4点が外縁をとり囲むように散っている。流紋岩の礫は2点共に表面が暗赤色に変色しており被熱礫と見られる。

d小結 第5、第6ブロックと同様に少量の石器類が狭小な範囲内に分布するという特徴を示している。石器組成においても、剥片類を主体とし、これに少数の加工痕のある剥片（類形器あるいは削器）が加わるという共通した内容を具備している。接合資料も若干認められるものの、ブロック内における剥片剥離を示す程のものではない。各ブロック共に4種以内の母岩を保有するが、各母岩の帰属個体数の僅少なものが多く重要な性格として指摘しておきたい。

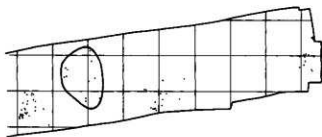
表14 第7ブロックの石器属性

No.	遺物No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	未端	使用痕	折面	母岩
1	II A-96-1	削片	29 × 43.5 × 17	12.1	1a				C→H-2	F	-	-	珉化岩 5
2	II A-96-2	削片	56 × 39 × 17	31.2	3	-	-	-	C→H-2	F	-	-	安山岩 6
3	II B-06-1	削片	19 × 20 × 9	3.2									珉化岩 5
4	II B-06-2	礫	100 × 3.9 × 35.5	168.4									流紋岩 2
5	II B-06-3	削片U	21 × 34 × 13.5	8.6		1(0)	26.5 × 13	75°	H-4	F	+	-	珉化岩 5
6	II B-06-4	削器		15.9	1b								珉化岩 5
7	II B-06-5	削片	18 × 22 × 25	1.1		1(0)	14 × 3	110°	H-2	F	-	-	珉化岩 5
8	II B-06-6	削片U	59 × 32 × 13.5	17.4	2	1(0)	8 × 11.5	105°	L-1→B-1 →H-3	F	+	-	メノウ 1
9	II B-06-7	石核	43 × 55 × 37	91.3	1c								珉化岩 5
10	II B-06-8	礫	46 × 36 × 14.5	32.6									流紋岩 2

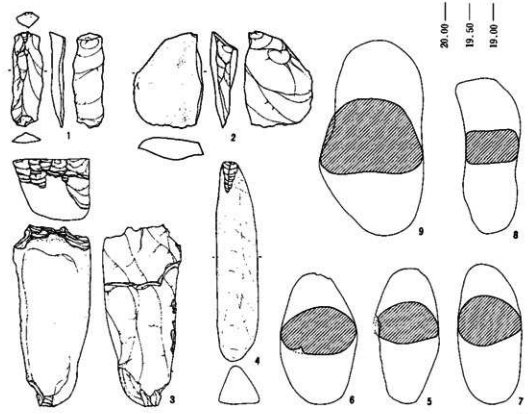
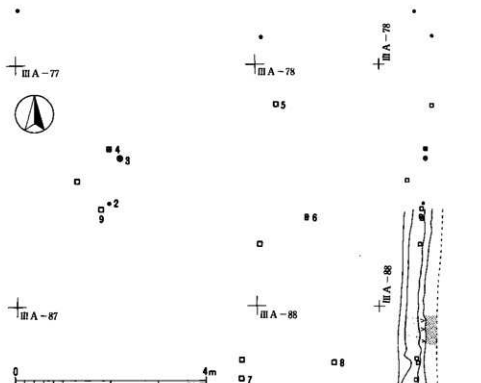
第8ブロック

(第32・33・65・68図)

(図版29・32)



a分布状況 調査区西側のグループに属している。ブロックはIII A-77,78区を中心として、更にはその周辺にも及び、長軸7 m、短軸5 mという範囲にひろがっている。しかし遺物総数は14点であるので、平面分布は極めて疎らである。遺物は5点の石器と9点の礫とからなるが、両者共に偏在することなく、処々に点在するという状況を呈している。垂直分布状況は、投影図(第32図)による限りV層下部に集中しているように見えるが、遺物台帳にはほとんどの遺物がVII A層検出と明記されており、両者は一致しないことになる。しかしながら、投影図などというものは、便宜的に産出傾向の一端を示すものにしすぎないという前提に立ち、調



第32図 第8ブロック①

表15 第8ブロックの石器組成

母岩番号	ナイフ形 石器	用器形 石器	削片 剥片	石核	剥片	石核	原石	礫	総数	数量比(%)	総重量(g)	重量比(%)
安山岩 17	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7.1	1.3	<0.1
安山岩 18	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7.1	89.6	3.5
砂岩 9	0	0	0	0	0	0	0	0	2	14.3	9.3	0.3
砂岩 10	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7.1	215.9	8.4
砂岩 11	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7.1	228.3	8.9
砂岩 13	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7.1	217.2	8.5
チャート	0	0	0	0	1	0	0	0	0	7.1	546.0	21.3
凝岩 8	0	0	0	0	0	1	0	0	0	7.1	4.7	0.2
チャート 3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	7.1	156.0	6.1
珪化岩 6	0	0	0	0	0	1	0	0	0	7.1	5.2	0.2
凝灰岩 4	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7.1	842.0	32.9
ホルンフェルス 2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	7.1	22.2	0.9
ホルンフェルス 3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7.1	224.2	8.6
総数	0	0	0	0	1	3	1	0	9	14	2561.9	100
組成比 (%)	0	0	0	0	7.1	21.4	7.1	0	64.3			

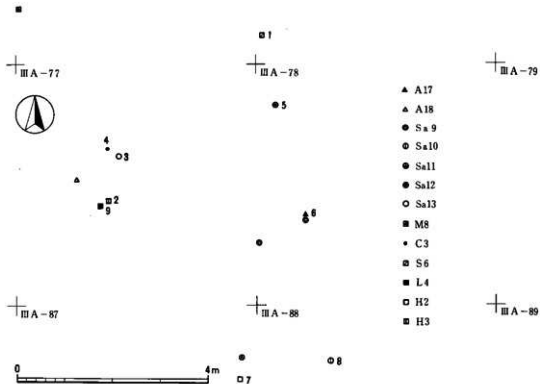
査時の所見にこそ従いたいと思う。事実、本ブロックと同一母岩（珪化岩6）を含む第9ブロックは、投影図においても、また、現場における所見においてもVI層下部からVIIa層に到る垂直分布状況が把握されている。

b 出土遺物 石核1点、剥片3点の他は礫、若しくは礫素材の石器であり、むしろ礫を中核とする組成を示しているものと理解される。はじめに石器について、次に礫について観察しよう。

1は石刃である。珪化岩6（多分珪質粘板岩）を素材とし、整った形態を呈している。打面は自然面で、加撃痕（パンチマーク）が中央部にのこされている。背面には尾部側からの剥離面を切る打面側からの剥離面が並行し、背後も大略併走している。打面に接して小型の剥離痕が2面あり、剥離工程には、簡略化した頭部調整が介在するのかもしれない。2は打角の大きな礫面付きの剥片である。石核の打面を準備するためのものかもしれない。

3はチャート製の石核としたが問題が残る。素材は節理面で割れた羊羹状の円礫で、節理面を打面として、長軸の両端に数次に亘る剥離が加えられている。この加撃によって小型で矩形の剥片が作出されており、石核としての機能もここから導かれるが、これ自体を打割器の一種と見る見解も否定することはできない。4は棒状の細長い礫の一端に剥離痕があり石槌の仲間かとも見られるが、端部の加撃痕はこれ以外に看取し得ず、用途の特定は困難である。

礫は9点、8個体分ある。このうち2点が同一母岩（砂岩9）の細片、2点（安山岩17、18）は小型の破砕礫であったが、残りの5点は完形、若しくはほぼ完存するものであった。これらを見ると長径10cm前後の長円形を呈するものが意識的に選択されているようである。また、肉



第33図 第8ブロック②

眼観察による限り、顕著な敲打痕や研磨痕は見い出せず、更に火熱を受けた痕跡も乏しい。分布状況からも判るとおり、これらの礫は一箇所に集中することなく、むしろ散在する状態にあり、礫群としての評価は不可能である。

c 石器石材 石器の素材としては、泥岩、珪化岩、チャート、ホルンフェルスなどがあるが、いずれも単独資料しか含んでいないことが大きな特徴である。一方、礫種を見ると、流紋岩1個体、安山岩1個体、砂岩4個体、ホルンフェルス（粘板岩質）1個体となり、下総台地におけるごく一般的な組成を示しているが、砂岩の占める比率が高い点に注意したい。なお、次項で触れるが、第9ブロックにおける礫種を見ると、砂岩・チャート各2個体・安山岩・泥岩・流紋岩各1個体であり、本ブロックとよく一致する構成をとっている。

d 小結 本ブロックは礫を主体に、少量の剥片から構成されている。礫、剥片共に比較的広い範囲にまばらに散在しており、特に著明な集中箇所をブロック内部に保有しない。礫はほとんど焼成を受けておらず、その中には一端に加撃痕を有するものなども含まれている。また、剥片中に石刃が1点あり、それは次項で触れる第9ブロックにも関連する資料として重要である。産出層準に就いては若干の疑義も残るが、VIIa層、それも比較的上部であろうと推定したい。

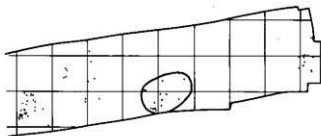
表16 第8ブロックの石器属性

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	未端	使用状況	断面	母岩
1	ⅢA-67-1	剥片	33 × 21 × 7	4.7		-	-	-	C	-	-	t-M	泥岩 8
2	ⅢA-68-1	剥片	49 × 17 × 8	5.2	1	1(0)	12.5×8	105°	B-1→H-6	F	-	-	珪化岩 6
3	ⅢA-77-1	石槌	146 × 34 × 28	196.0	4								チャート 3
4	ⅢA-77-2	石槌	132 × 60 × 51	546.0	3								チャート
5	ⅢA-77-3	剥片	48 × 37 × 13	22.2	2	1(0)	21 × 15	115°	C	F	-	-	ホルンフェルス 2
6	ⅢA-77-4	礫	143 × 78 × 55.5	842.0	9								流紋岩 4
7	ⅢA-77-5	礫	80 × 37 × 34	89.6									安山岩 18
8	ⅢA-78-1	礫	21 × 17 × 3.5	1.3									安山岩 17
9	ⅢA-78-1	剥片	24 × 19 × 6.5	2.4		-	-	-	H-3	F	-	-	砂岩 9
10	ⅢA-78-3	礫	19 × 28 × 14	6.9									砂岩 9
11	ⅢA-78-4	礫	98 × 37 × 48	217.2	5								砂岩 13
12	ⅢA-87-1	礫	97 × 56 × 37	228.3	6								砂岩 11
13	ⅢA-87-2	礫	101 × 46 × 33	224.2	7								ホルンフェルス 3
14	ⅢA-88-1	礫	113 × 41 × 44	215.9	8								砂岩 10

第9ブロック

(第34・35・66・69図)

(図版16・30・33)

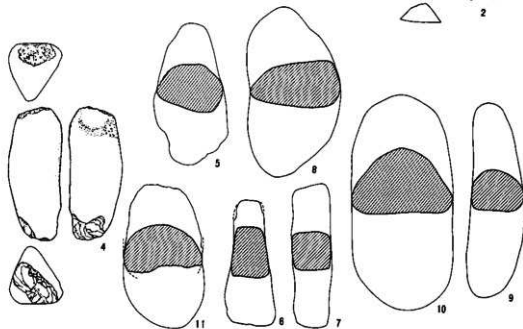
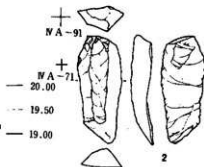
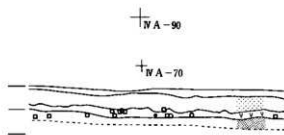
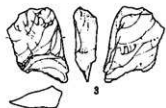
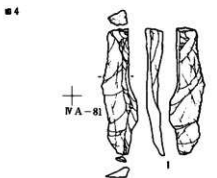
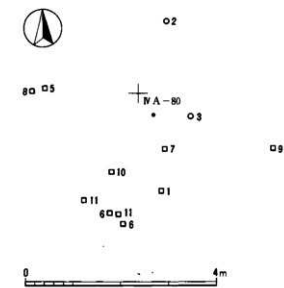


a 分布状況 IVA-80ポイントの周辺、東西6.4m、南北3.6mの範囲内に遺物の散布が認められた。この地点は第8ブロックのすぐ東側にあたり、2つのブロックがあたかも並存する状態で検出されたことになる。

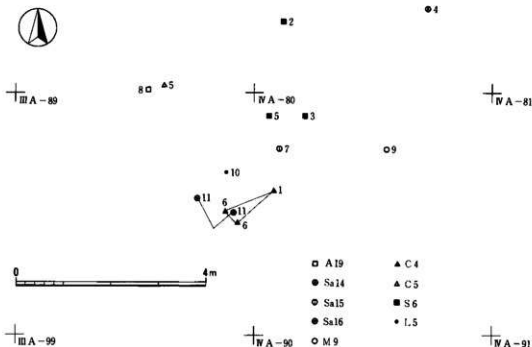
平面分布状態は、IVA-80ポイントのすぐ西側に剥片が3点あり、この南側に東西に長く礫のみからなる集中部分がひろがっている。また、ブロックの西縁には礫2点が近接して置かれていた。また、東縁に石槌が単独で検出されている。このようにブロックの内部に様相を異にする遺物の集中が4単位認められる点は重要であろう。

次に垂直分布を見ると、投影図(第34図)による限りVI層下部を中心としているが、遺物台帳による限り、VIIa層に帰属するものが大半であり、第8ブロックほど極端ではないにせよ、両者間に若干の齟齬をきたしているようである。ここでは前項と同様の立場からVIIa層の上部あたりを産出層準と考えておくが、自信がある訳ではない。

b 出土遺物 遺物の総数は10点である。その内訳は剥片3点、石槌1点の他は全て礫であり、礫を主体とする地点である。



第34図 第9ブロック①



第35図 第9ブロック②

1～3が剥片。全て同一母岩（珪化岩6）で、第8ブロックにも共有母岩があった。剥片のうち、1、2は石刃としてよいであろう。自然面を打面とする粗製のものだが、背縁と側縁とがそろい、横断面も台形状を呈している。2の打面に接する小き目の剝離痕は前項でも注意した一種の頭部調整かもしれない。3は幅の広い剥片で、B-H型の背面構成を呈している。やはり自然打面をもち、下端には微細な刃こぼれが著明である。4は長手の礫の両端に敲打痕の認められる石槌である。敲打痕はアバタ状の集合凹点で、その一部は裏面にも及んでいる。

表17 第9ブロックの石器組成

母岩番号	ナイフ形 石器	粗製形器	細製形器	剥片口 剥片	石核	剥片	石槌	原石	礫	総数	数量比(%)	総重量(g)	重量比(%)
安山岩 19	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	7.1	364.0	14.1
砂岩 14	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	7.1	175.2	6.8
砂岩 15	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	7.1	169.7	6.6
砂岩 16	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	14.3	261.2	10.1
泥岩 9	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	7.1	273.5	10.6
チャート 4	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	21.4	176.0	6.8
チャート 5	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	7.1	271.4	10.5
珪化岩 6	0	0	0	2	0	1	0	0	0	3	21.4	34.4	1.3
流紋岩 5	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	7.1	850.0	33.0
総数	0	0	0	2	0	1	1	0	10	14	100	2575.4	100
組成比(%)	0	0	0	14.3	0	7.1	7.1	0	71.4				

礫はチャートの細片を除いて全例を示した。断面蒲筍状のやや幅広のもの(8、10)、細長い棒状のもの(6、7、9)、両者の中間的な形態を示すもの(5、11)という大雑把な分類ができよう。被焼成痕、使用痕みに観察することはできない。表面に黒色斑状の物質の附着するものがあるが、その性格は不詳である。

c 石器石材 剥片の素材が珪化岩であることは既に述べたので、礫種について触れよう。礫には、岩山岩1個体、砂岩2個体、泥岩1個体、チャート2個体、流紋岩1個体があり、ごく一般的な下総型の礫種構成を示しているものと評価される。なお、流紋岩としたものには凝灰岩や石英斑岩などを包括されているので、広義の流紋岩類と理解していただきたい。

d 小結 目的的剥片と石槌以外は礫によって構成されるブロックであり、第8ブロックとほぼ同様の内容を示している。遺跡から出土する礫に関しては、岩宿遺跡の報告以来の長い研究史をもっているが、現在では野川遺跡報文における小田、小林らの見解(小田、小林ほか1971)が最も一般的のものであろう。両氏の分類に従えば、第8、第9ブロックの礫のあり方は、礫群というよりも配石に近いとも言えよう。また、所謂配石の機能に関しては、保坂の考察に従いたい(保坂 1985)。既に再三指摘したが、両ブロック間には珪化岩6という共有母岩があり、その大半が石刃であることから、両ブロック間の密接な関連が知られる。さらに剥片と礫との比率がほぼ一定であること、遺存する礫の属性の一致、石槌が1点ずつ含まれていることなど、共通する要素が多く、内的構成を等しくする2ブロックの並存状況が推定される。また、石器組成上、加工具に偏った構成を呈しており、この点ではこれまで記載してきた下層のブロック群とも一脈の関連性があるのかもしれない。しかし、限定された調査範囲内の知見であり、これ以上の推論は不可能であろう。

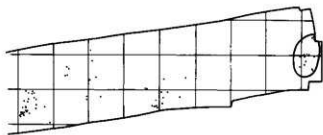
表18 第9ブロックの石器属性

No.	遺物No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	先端	使用痕	折痕	母岩
1	III A-79-1	礫	102 × 55 × 41.5	271.4	5								チャート 5
2	III A-79-2	礫	123 × 71 × 34	364.0	8								安山岩 19
3	III A-89-1	礫	158 × 76 × 50	850.0	10								流紋岩 5
4	III A-89-2	礫	60 × 58 × 14.5	67.3	11								砂岩 16
5	III A-89-3	礫	69 × 22 × 25	38.8	6								チャート 4
6	III A-89-4	礫	116.5 × 58 × 23	193.9	11								砂岩 16
7	III A-89-5	礫	88 × 35 × 37	130.2	6								チャート 4
8	IV A-70-1	剥片U	56 × 24 × 10	13.8	2	100	16 × 7	107°	C-H-2	F	+	-	珪化岩 6
9	IV A-70-2	石槌	96 × 39 × 39	175.2	4								砂岩 14
10	IV A-80-1	礫	23 × 30 × 9	7.0									チャート 4
11	IV A-80-2	礫	107 × 36 × 33	189.7	7								砂岩 15
12	IV A-80-3	礫	144 × 43 × 31	273.5	9								泥岩 9
13	IV A-80-4	剥片U	41 × 30 × 13.5	13.0	3	100	17 × 10	113°	H-2-B-1	F	+	-	珪化岩 6
14	IV A-80-5	剥片	66 × 20 × 7	7.6	1	100	9.5 × 8	97°	H-3	F	-	-	珪化岩 6

第10ブロック

(第36・37・66・67・69図)

(図版30・31・33)



a 分布状況 調査区最東端に位置し、辛うじてブロックの全容を捕捉し得たが、東側は既に削平を受け、崖下には民家が建てられている。ブロックは、IVA-64、74区を中心に、南北4.4 m、東西2 mの狭小な範囲にひろがる。遺物数は少なく、散漫な分布状況を呈しているが、IVA-74ポイントの東側に多少集中的な分布域が認められそうである。産出層準はVII a 層の下部かと考えられるが、上下に移動している遺物もある。第7、第8、第9ブロックよりは明らかに下層にあり、第5、第6ブロックなどに近い位置を占めるようである。

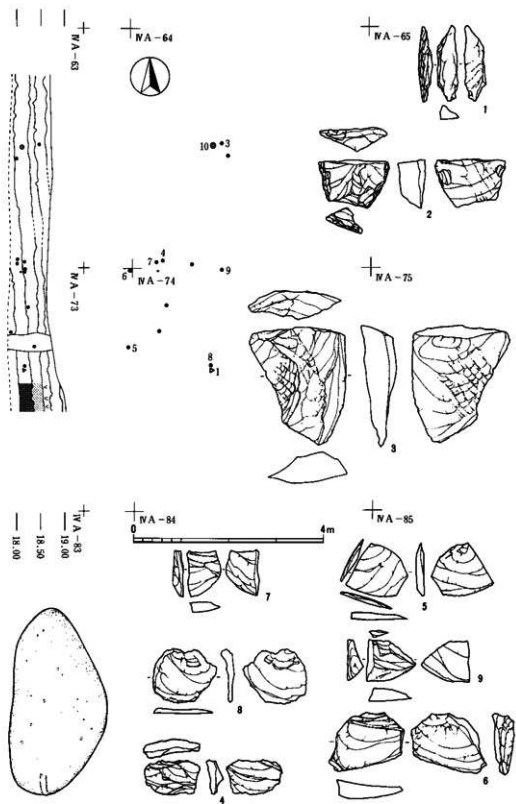
b 出土遺物 本ブロックの石器総数は、ナイフ形石器1、剥片12、原石1、それに近傍採集であるが、剥片と同一母岩の削器を含めると15点となる。礫は含まれていない。以下順を追って観察をすすめたい。

1はナイフ形石器である。変成を受けた粘板岩質の石材の薄片を縦長に整形するような剥離が側縁に加えられている。石材の関係もあり、表裏の剥離方向が読み取れない。2と3は同一母岩（流紋岩質の細粒凝灰岩で、部分的に石英質の脈状流理が認められる）に属する。2は折断剥片の折断面を除く全周に2次加工が看取される。3は比較的大型の剥片で打面部が最大幅と一致する先細りの形態を示している。打面は1枚の剥離面からなる平坦打面で、剥離角は118°である。刃部には特に使用痕は認められない。

4～9に安山岩20の同一母岩の剥片類を掲げた。9以外は全て打面のはじけた薄手板状の剥片である。5～7の3点は側縁部の一部が折断されている。打面を留める9も背面左側縁に折断面がある。全体的に矩形的の形態を呈するものが一般的であり、折断加工自体があるいは一種のトリミングであったのかもしれない。これと同題の特徴ある剥片は、八千代市井戸向遺跡S-7ブロックにあり、楔形石器のプランクと考察したことがある（田村 1987）。井戸向例はやは

表19 第10ブロックの石器組成

母岩番号	ナイフ形石器	削器	形器	剥片 U 剥片	石核	剥片	石核	原石	礫	総数	数量比(%)	総重量(g)	重量比(%)
安山岩 20	0	0	0	0	0	11	0	0	0	11	78.6	37.8	12.6
安山岩 21	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	7.1	232.8	77.4
凝灰岩 1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	7.1	27.6	9.2
結晶片岩 1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7.1	2.7	0.8
総数	1	0	0	0	0	12	0	1	0	14	100	300.9	100
組成比(%)	7.1	0	0	0	0	85.7	0	7.1	0				



第36図 第10ブロック①

り安山岩を素材としており、素材の生産から消費の過程をトレースすることができたが、産出層準も本ブロックに近く、下総台地における楔形石器の多出する層準である点を特に指摘したい(奥田他 1976)。

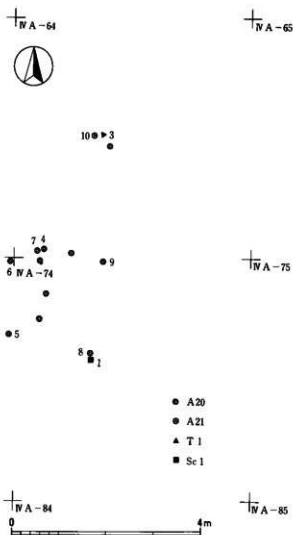
c 石器石材 本ブロックにおいて使用されている石器石材としては、安山岩2個体、凝灰岩、片岩各1個体がある。このうち、安山岩の1個体(安山岩20)の使用頻度が14例中11例と高く、石材の大半を占めている。この石材はa項で解れたIVA-74ポイント東側の剥片集中地点を構成しているが、その大半は比較的規格的な剥片で、微細な不整形剥片(削片)をほとんど含んでおらず、この地点で剥離されたものとは考えられない。

d 小舗 このブロックも下層検出の諸ブロックと同様に少数の遺物から構成されている。石器組成にはナイフ形石器や削器が含まれ、一応の

器種をそろえているが、主体は薄手板状の安山岩製の剥片類である。これらを楔形石器のプランクと考えたが、楔形石器は含まれず、別地点での供用があったのであろう。該期の1側縁加工のナイフ形石器の類例は佐倉市腰巻遺跡(石倉 1987) A、B、E各ブロックに好資料がある。これらの各ブロックは共に産出層準が良く把握されていないが、いずれも本ブロックに近いものと考えられる。なお、Aブロックは斜面部の検出で、第2黒色帯にまでローム層のソフト化が及んでいる。このため報告者はソフトローム層中からの石器の検出を、III層出土と認定し、上層の石器群に位置づけていることを付記しておこう。

(注) 母岩別分布図に使用した略号は以下のとおりである。

A安山岩 Agメノウ Cチャート Hホルンフェルス L流紋岩
M泥岩 O黒曜石 S珪化岩 Sa砂岩 Sc結晶片岩 T凝灰岩



第37図 第10ブロック②

表20 第10ブロックの石器属性

No.	遺物No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	器	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	母岩
1	IV A-64-1	剥片	25 × 29 × 6.5	4.5		1(0)	21 × 2	120°	C→H-1	F	-	-	安山岩 20
2	IV A-64-2	剥片	61 × 51 × 16	27.6	3	1(0)	50 × 18.5	118°	L-1→H-3	F	-	-	凝灰岩 1
3	IV A-64-3	剥片	97 × 51 × 40.5	232.8	10								安山岩 21
4	IV A-64-4	剥片	18.5 × 29 × 16.5	3.3	4	-	-	-	B-1→H-2	F	-	t-B	安山岩 20
5	IV A-64-6	剥片	16.5 × 25 × 4	1.3		1(0)	7.5 × 4.5	115°	H-1	-	-	t-H	安山岩 20
6	IV A-64-7	剥片	18.5 × 23 × 5	2.4	7	-	-	-	H-3	F	-	t-B	安山岩 20
7	IV A-73-1	剥片	28 × 41 × 8	10.4	6	-	-	-	H-3	H	-	-	安山岩 20
8	IV A-73-2	剥片	27 × 26.5 × 3.5	3.1	5	-	-	-	H-1	-	-	t-H	安山岩 20
9	IV A-74-1	剥片	22 × 26.5 × 8.5	4.0	9	-	-	-	C→H-2	F	-	t-B	安山岩 20
10	IV A-74-2	剥片	30 × 31 × 4	3.6	8	-	-	-	C→H-1	F	-	t-B	安山岩 20
11	IV A-74-3	剥片	18 × 19 × 6	1.6		-	-	-	H-1	-	-	t-M	安山岩 20
12	IV A-74-4	削片	14 × 14 × 3	0.4									安山岩 20
13	IV A-74-5	剥片	27 × 18 × 6.5	3.0		-	-	-	C→H-1	H	-	t-B	安山岩 20
14	IV A-74-6	ナイフ	40 × 12 × 6.5	2.7	1								結晶片岩 1

遺物属性表の見方

遺物属性表は、「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書V」において示した表記方法に改良を加えて使用した。多くの略号と省略法を用いているが、下記の基準によるものである。

No. 全資料の通し番号であり、報告書作成時に付した。

遺物No. 遺物の注記番号であり、調査時に記入した遺物台帳登録番号でもある。

分類 剥片Uは Utilized Flake、剥片Rは Retouched Flake である。削片は微細な剥片で、大体10mm以下のものが多い。

打面 打面を構成する剥離面数を示し、括弧内はそのうちnegative bulbを有するものの数を示す。

背面構成 背面を構成する剥離面の加撃方向一同一加撃方向をもつ剥離面数の順に示し、矢標はこれと別方向の加撃面をもつ剥離面との切り合い関係をあらわす。 \dot{C} は原礫面、 \dot{H} は腹面の加撃方向を基準にして、頭位からの加撃、 \dot{B} は尾部側からの加撃、 \dot{R} は背面に向かって基準線より右方からの加撃、 \dot{L} は左方からの加撃方向を表示している。従って、例えば、R-4→H-1という表記は、右方よりの連続する4面の剥離面の一部を頭部側からの1面の剥離面が切る状態を示している。

末端 Fは Feather end、Hは Hinge fracture、あるいは Step fracture、Oは Outrepassé あるいは、石核底面を保持するもの。

使用痕 肉眼的に識別可能な刃こぼれがある場合を+、ない場合を-とする。

折面 剥片はしばしば折損しているため、横折tと縦折vとを区別し、横折の場合は、遺存部が頭部側の場合 \dot{H} 、尾部側の場合 \dot{B} 、頭部、尾部を折損し胴部のみの場合M、縦折の場合は、腹面の加撃方向を基準として背面に向かって右側R、左側Lとを区別する。左右両側を欠損する場合もMとする。

D 表面採集の遺物（第70図、図版34）

上層遺構の検出、精査に際して少量の先土器時代の石器類が採集されている。これらのうち5例を示した。

1は珪質頁岩製のナイフ形石器である。基部を若干欠損している。石刃状の縦長剥片素材の2側縁にブランディングが加えられている。背稜中央から背面左側縁に向って小剥離痕が連なり、稜形成の作業面調整かと見られる。2、3は剥片である。2は黒曜石製の折断剥片。3は稜付の石刃である。安山岩を素材とし、腹面打面側に剥離痕が認められる。4は石核で、黒曜石製。5は安山岩製の剥片で、典型的な *outrépassé* による *éclat concave* を呈している。これら以外に剥片が若干あるが、帰属時期が不詳のものもあり、割愛した。

E 彦八山遺跡石器文化の編年的位置

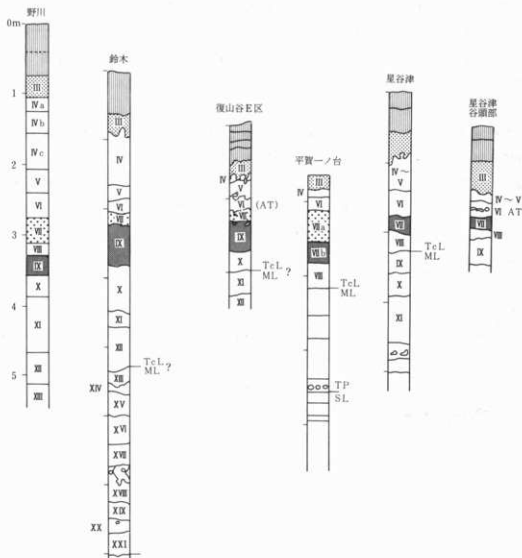
彦八山遺跡における今回の調査によって得られた10か所のブロックを上層、下層に大別して記載してきたが、最後にもう少し詳しくその編年的位置を考察しておきたい。

一般に石器群の帰属時期はその産出層準によって大よその見通しが得られるので、はじめにローム層の堆積状況に就いて検討する。次に、彦八山遺跡は多層遺跡であるので、そこにおける石器群の重なり方を瞥見し、下総台地の様相との比較を行いたい。

● 下総台地西縁部の立川ローム層 下総台地における立川ローム層の層序区分に関しては澤野弘が要領良く問題点をまとめている（澤野 1987）ので、これに従って記述をすすめた。澤野によると、佐倉市星谷津遺跡においてエポックメイキングな基本層序が確立され、ATの層準をもとに西部関東との大雑把な対比が可能となったにも拘らず、第2黒色帯の前後においては、なお不統一な部分が認められるという。この要因としては、星谷津遺跡を含めて、「下総台地の中でも成田～佐倉市周辺から北側及び東側にいくにしたがって、第2黒色帯が不明瞭になる」点が指摘されている。すなわち本来的に「不明瞭」な地域において初めに「基本層序」が提示され、これが人口に膾炙した点に不統一や、混乱の原因があるのではないかと考えられる。

一方、織笠昭は下総台地のVI層の層準認識について、次のような重要な指摘を行っている（織笠1987 a）。「では下総台地ではどうかというと、（AT層準が）VI層という点では同一であるといえますが、その中のどこであるかということになると、これが問題となるところです。V層は薄くて肉眼では見えないことが多い。V層とVI層に区分されている場合でも例えば権現後遺跡では、あるいは星谷津遺跡、復山谷遺跡B地区ではVI層が非常に厚いという傾向があります。そういった遺跡のVI層の厚さは武蔵野のVI層とは比較にならない厚さをもっています。層厚の著しい相模野や武蔵野では、まず見ることでできない現象です。」

VI層の層厚が武蔵野や相模野の当該層序と比較して厚くなることは、何よりも、他地域と比較してそれだけVI層及びその前後の土層の色調が微妙であることを反映しているが、星谷津遺跡における分層結果に影響されるところも大きかったのではないかと推定される。ところで、第2黒色帯は、白井町復山谷遺跡における所見から、VII a～VII c層の3枚に分層されることになる。これは、一般に第2黒色帯の上部と下部で色調の差が認められることから、VII a層を明色部、VII c層を暗色部に対応させ、この間に間層帯の視認される場合に限り、これをVII b層にしよう、とする見解をとった結果であるが、先の織笠の指摘にあるように、VI層とVII a層との境界をどのへんに定めるのか、という問題を残すばかりか、VII b層の性格やそのテフロクロロジーにも未解決の問題を多く残していたのだ。これらの細部に亘る諸問題を解決するこ

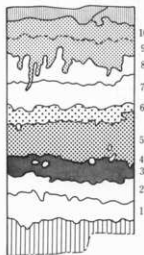


第38図 主要遺跡の地層柱状図(澤野1986を改変)

となく、武蔵野台地との安易な対比を行うことは不可能であり、この意味において復山谷遺跡における見解は一応ペンディングしておくことにしよう。

この間の問題が集約的にたち現れた事例として、八千代市権現後(橋本 1984)、北海道(橋本 1985)両遺跡があげられよう。両遺跡においてはVII b層が顕著な発達を見せ、従来下総各地では十分に層順の把握されていなかった第2黒色帯間層帯の位置づけに新知見をもたらすことになった。また、北海道においては、VI層とVII層との間にVI'層が設定されたが、必ずしも一般的ではなかったようであり、認定される場合は多くないようである。萱田地区におけるVII b層は、層厚30cm以下の明褐色ローム層であり、第2黒色帯の中央より下位に層状に発達している場合が多い。このような安定した堆積状況は、その後の発掘調査の蓄積に従って八千代市の周辺では多くの地点において確認され、当該地区における鍵層としての位置づけも可能であるが、今のところ下総台地西縁部以外での報告例はない。ところで、萱田地区においてVII層が3枚に分層された結果、橋本勝雄らによってVII a、VII b、VII cの各層が武蔵野台地VII層、VIII層、IX層に対応するものであるとする見解が重ねて打ち出されることになるが、このような対比は武蔵野の状況に照らしてはたして妥当なものであろうか。

織笠昭の指摘にもあるように、武蔵野台地においてもVIII層の位置には大別して2種類あり、VII層下面～IX層の上部に認められる場合と、IX層中位に観察される場合とがある。はたして武蔵野台地VIII層なる土層が1枚なのか、あるいは2枚以上あるのかは別として、橋本らの見解が成立するためには、萱田地区のVII b層が、野川遺跡や平代坂遺跡のVIII層と対比されることが前提となるが、直接的な検証ははなはだ困難かもしれない。



第39図 井戸向遺跡の層位

ところで、昭和61年度に、八千代市井戸向遺跡において直接観察し得た所見によれば、第2黒色帯は4枚に細分される。既にこの細分結果は公表した(田村 1987)が、重要であるので再録したい。第39図に同遺跡P 19-54区の土層断面図を掲げた。各層の特徴は以下のとおりである。

1層 立川ローム層の最下層と言われている。非スコリア質の黄褐色粘質ローム層。

2層 黄褐色の硬質ローム層で粘性を帯びる。赤色、青灰色等の有色スコリアが少量含まれる。

3層 暗褐色ローム層で、粘質の硬質ローム層である。やはり有色スコリアを多量に含んでいる。色調は最も暗く、部分的には薄墨を流した様に見える。

4層 明褐色ローム層である。萱田地区においては層厚30cm以下の間層帯として確認されることが多いが、本地点においてはブ

ロック状に点在している。

5層 暗褐色硬質ローム層で、有色スコリアの含有量が多い。色調は3層に次いで暗い。

6層 暗褐色硬質ローム層であるが、色調はかなり明るい。5層と同様にスコリア質であるが、上部の7層が不規則に貫入している。

7層 黄褐色硬質ローム層であり、始良 Tn 火山灰が点在している。

8層 淡暗褐色硬質ローム層で、有色スコリアが顕著である。大半は第1黒色帯に相当するものと考えられている。

9層 黄褐色軟質ローム層で、軟化の著しい硬質ローム粒、ロームブロックが多量に含まれている。硬質ローム層(IV層相当か)の膨軟化した層準と扱えられる。

10層 淡褐色軟質ローム層で、立川ローム層のトップである。

以上のうち、3層～6層の4枚を第2黒色帯としたいが、これには異論はないであろう。従来の見解では、3層がVIIc層、4層がVIIb層、5層と6層をあわせてVIIa層としていた。VI'層とされたものは6層であるのかもしれない。次に、以上の各層が武蔵野台地第2黒色帯のどの層準に対応してくるのかが問題である。格別の根拠があるわけではないが、武蔵野台地における層相や層厚をもとにして最も無理がないと思われるのは、6層がVII層に、そして3～5層がIX層に対応するという仮定である。これは橋本らの見解とは異っており、早急に正否を問うことはできないにせよ、今後、石器群のあり方などもからめて討議していかなくてはならないだろう。とまれ、暫定的にはあれ、叙上の推定に従い、仮に6層をVII層、5層をIXa層、4層をIXb層(VII層)、3層をIXc層と呼んでおこう。

7層以上の各層に関しては(田村 1982)の見解を修整する必要はないが、彦八山遺跡ではV層が明確に認められ、この見解を検証するものとなっている。

さて、以上の検討によって、下総台地西縁部における基本層序が想定されたのであるが、彦八山遺跡の状況と比較し、もし、可能であるならば、そこにおける石器産出層準を基本層序の内部に位置づけておきたい。この場合、上層の石器群がV層に帰属することは明らかであるが、下層の第6ブロックに関しては困難な部分があるようである。すなわち、下層のブロックのうち、第7～第9ブロックがVI層下部からVII層上部におかれることは明らかであるにしても、VIIa層下部からVIIc層の上部に位置する第5、第6、第10の3ブロックに就いてもは、VIIa層とVII層～IXa層との対応関係が曖昧であること、調査時にIXb層が確認されなかったこと、等の要因から、VII層からIXa層のいずれかの層準に対応する可能性の高いことが指摘されるものの、確定的なことは言えない。しかしながらいずれもVIIa層の下部、VIIc層の上面あたりが生活面であると推定されることから、IXa層が産出層準であると判定しておこう。

以上の考察に従い、彦八山上層はV層に、彦八山下層はIXa層に帰属するグループ(第5、第6、第10ブロック)と、VII層に帰属するグループ(第7～第9ブロック)に分けて考えることが

でき、ようやく西部関東との層準対比が可能となった。しかし、この対比自体、上で述べた様に、いろいろな制約の上に成立する仮説であるにすぎず、今後の検討が必要であることは言うまでもない。

b 彦八山下層石器文化 彦八山下層としたAT降灰に先行する時期のブロックは6か所あり、これらは産出層準の上下に従って、IX a層に帰属するブロックと、VII層に帰属するブロックに分離されることは前項で述べたとおりである。前者を彦八山下層 a、後者を彦八山下層 bとし、両石器群の特徴をまず検討したい。

彦八山下層 a としてのブロックは、第5、第6、第10の3ブロックである。これらのブロック間には直接的な関連性が認められず、あるいは多少の時間差をもつのかもかもしれないが、便宜的に一括しておこう。いずれも零細なブロックであり、石器組成や技術基盤を十分に知る事ができない。

第5ブロックでは2種の剥片剥離工程の存在が指摘されている。(1)打面を固定し、打点位置を横にずらしながら比較的縦長の剥片が生産されているが、打面周辺の調整剥離の認められないもの。(2)打面と作業面を置換し、横長の剥片を生産するもの。第6ブロックに関しても、これとほぼ同様の状況が看取される。第10ブロックでは、安山岩20による薄手板状の剥片がまともに出て検出されているが、この種の剥片の生産過程は不明である。

石器組成は、第10ブロックに1側縁加工の半月形のナイフ形石器、削器があり、第5、第6ブロックには類形器、あるいは削器状の2次加工のある剥片もあるが、全体に単純な組成で、欠落する要素も多いのであろうか。

一方、彦八山下層 b についてはどうであろうか。この仲間に加わるのは、第7ブロック～第9ブロックの3ブロックであるが、第8、第9両ブロックが礫を主体とするブロックであるため、資料数は更に限定されている。特に、2次加工の認められる石器が1例も含まれておらず、全般的な石器組成に言及する余地はない。剥片剥離技術に関しては、第7ブロックの珪化岩5の接合資料に見られるように、多打面の糞子状の石核と共にメノウ1や珪化岩6の諸例から明らかのように、石刃が組成の一翼を荷なうあり方に注目しなくてはならないだろう。

以上の如く、彦八山下層石器文化の変遷は、剥片製作上の差異によく表象されているように思われるが、この間の変化が個別的な遺跡の粹を起えて、はたして一般的なものであるのか、周辺地域の動向を踏まえて、若干の検討を加えてみたい。第2黒色帯中の石器群の重なり方に関しては、八千代市萱田地区の諸遺跡において重要な層位的知見が得られており、橋本らにより詳しく報告されているので、この成果を中心に検討を始めよう。また、この概要は(田村 1986 a) 他に公表しているが、掲載誌の関係で、一般の眼に触れる機会が少ないようなので、再論することにする。

今回の調査に際しては、IXc層中からの遺物の検出は認められなかったので、IXb層の前後の状況から考察する。萱田地区においては、IXb層を包含層とする地点は知られていないがIXb層の直下に権現後遺跡第10、第11ブロックがあり、IXb層直上に白幡前遺跡S20、23ブロック（田村 澤野 1987）がある。賽子状の多面体石核から剥離された矩形的の剥片、あるいは貝殻状の剥片を素材とする台形石器を特徴的に保有している。これに長楕円形を呈し、広い研磨面をもつ舌状の刃部を有する磨製石斧が伴出する。土持台遺跡（三浦 1986）も内容的には近似するが、産出層準の詳細が不明であるのが惜まれる。台形石器は剥片の尾部周辺に微細なリタッチを加えるものが多い。これに比較的縦長をした剥片の基部側に2次加工を加える剥片製小型ナイフ形石器が少数件出する場合もある。これらに石刃を明確に伴出する例は未報告であり、総体として非石刃石器群であると評価することが可能である。

VIIa層下半、IXa層中には、権現後の第24ブロックがある。剥片剥離技法には前代と大きな差異は認められないが、剥片製小型ナイフの卓越する段階と把握することができる。現状による限り台形石器、磨製石斧等の検出例は知られていない。これには復山谷遺跡E区IX層（田村 1982）が並行しよう。復山谷にはこの上層にW区IX層上面の文化層が重複しており、IXa層に包括される石器群の様相をかなり具体的に描くことができる。以上の諸遺跡における所見を総合すると、IXa層段階における剥片離工程は

- 1類 賽子状多面体石核によるもの
- 2類 打面—作業面交代型石核によるもの
- 3類 剥片製横打盤状石核によるもの

の3者から構成されている。これ以外に権現後の第25ブロックには打面を固定し、縦長剥片を連続的に剝取する両設打面の石核がありこれを4類としてもよいかもしれない。ナイフ形石器の検出例は各遺跡共に僅少で、十分にその形態組成を知悉することができないが、縦長剥片の基部、側縁に細かいブランティングを加えるものが多く、定型的な2側縁加工の類品を欠落している。全般的にたいへん小型のものが目につく。また、この時期には楔形石器が頻出し、遠山天ノ作遺跡（奥田ほか 1986）のように大量の楔形石器を出す例がある。井戸向遺跡S7ブロック例も先に引いたとおりである。

VII層からVI層への変化は、北海道遺跡第3文化層から、権現後遺跡第4文化層とが対応している。IXa層の石器文化とは、復山谷VII層石器群との、権現後でVI層石器群との層位的な重畳関係が確認される。

VII層石器群の特質を一言で述べるならば、多様な横打剥片技法と石刃打法との複合構造であるとするのが許されよう。このあり方は、今回の考察の埒外に置いたIXc層石器文化と共通し、AT降灰以前の東部関東において2波に亘る石刃技法の波及が知られ、これが時期区分における細分基準たり得ることは再三指摘したとおりである。また、IXc層段階における石刃

石器群が山形県笹山(加藤 1973 a)、同岩井沢(加藤ほか 1973 b)等と系統的脈絡を辿り得るのに対し、VI、VII層段階の石刃石器群が群馬県岩宿Ⅰ、後田(麻生 1987)、善上(三宅 1986)等の北部関東と直接的な繋関の糸が見い出され、また、特にVI層石器群に就いては、大分、熊本など九州方面のある石器群との対応を示唆する向きもあり、少なくとも、第2黒色帯の下部と上部～VI層とが異なる系譜に連なる石刃石器群の影響下に形成された文化層を保有している可能性を指摘しないわけにはいかない。

この石刃技法と共に、各種の剥片剥離手法が存在している。石刃技法を仮に系列Aとすればこれら種々の手法は系列Bとすることができる。具体的資料を挙げての検証は紙面の都合上不可能であるので、要約的に示せば以下の如くなる。

系列A 石刃技法

- 1類 所謂砂川型刃器技法に近いもの
- 2類 平坦打面を有し頭部調整の認められるもの

系列B 諸種の横打的剥片剥離手法

- 1類 齶子状多面体石核によるもの
- 2類 打面—作業面交代型石核によるもの
- 3類 剥片製横打技状石核によるもの

これから分るとおり、系列Bは前段階における剥片剥離手法を原則的に踏襲し、X層以降、最も基調的な、そして累層的なあり方を示している。そして、この種の剥片剥離過程が、あたかも竈の中に堆積する灰のように累層する地域は、今のところ南関東地方において他に認めることはできない。

これまで瞥見してきたところから従って、彦八山下層の様相を再検討しよう。彦八山下層aに看取された剥片剥離手法は、大きく2種あるが、この産出層準において知られる4種の剥片剥離工程のうち、2類と4類がこれに該当している。ところが、彦八山下層b期には、あらたに系列A 2類と考えられる石刃の存在が特筆され、周辺における石器群の変遷過程とパラレルな

表21 編年表

時期	地域	常磐道	置田	その他	彦八山
II c	若葉台・水砂聖人塚・水砂	権北	現後 海道	芝山西ノ台・空瀬No7・木苅峠 東林跡・復山谷・御山上層	下層b
II b	中山新田II	権白	現後 幡前 権後	復山谷・楨田 復山谷・逸山天ノ作 御山下層	下層a
II a	聖人塚 中山新田I 聖人塚	坊山		空瀬No55	
I	中山新田II	ヲサル山・坊山		草刈六之台	

関係が指摘される。すなわち、彦八山遺跡下層の石器群の変化には、周辺地域をも含めた、下総の第2黒色帯期前後の様相によく一致する傾向が看取され、またa項での層準対比に大過のないことをも物語るものと評価し得よう。

c彦八山上層石器文化 ここで彦八山上層とした石器群が、第1黒色帯を産出層準とする4つのブロックの遺物の総体を指示するものであることは既に述べたところであるが、下総台地において確実に第1黒色帯検出と確定し得る遺跡は極めて少なく、今後これらの石器群が当該地域における基準資料となり得るものと考えられる。

このように、第1黒色帯中の石器群が、十分な層位的裏付けを持ち得ぬ根拠は、下総台地においては、IV層の層厚が極めて薄く、かつ膨軟化が顕著であるため、その大半がソフトローム中にとりこまれていることを挙げることができる。以上は常識的な話であるが、ローム層の軟質部と硬質部の境界付近をもう少しよく観察すると、これら両層にまたがるように黄褐色の明るい色調の帯を視認することができる(第39図の9層がこれにあたる)。この帯は一般に軟質部において厚く、硬質部において薄い。そこであるいは、この帯域が本来のIV層であるかとも推測しているが、積極的な根拠がある訳ではない。従ってこれからは、土層断面図にこれをうまく表現したい。更に、この層の上下での石器群の差異にも十分な注意を払いたい。

次に上層石器群の内容、特に剥片剥離手法について整理しておこう。第1ブロックには、(1)打面と作業面とを入れ換えながら剥離のすすめられるもの、(2)盤状横打剥片石核の両者が、第2ブロックには、(3)打面を固定し縦長剥片を連続的に作出するものがあり、諸種の手法を示す資料が存在する。第3ブロックには、(4)剥片素材で石核底面を切り取る様に横長剥片を組織的に生産する類型が知られるが、この典型例は第4ブロックにある。第4ブロックでは、これに打面を頻繁に入れ換える例や、固定された打面をもつ縦長剥片作出の工程が加わるらしい。これらの諸例を通観して気づくのは、彦八山上層の諸ブロックの保持する剥片剥離技法の諸相が、下層において既に抽出された系列Bに帰属する諸類型に収斂する剥片剥離手法と基本的に一致することである。

次に、石器組成の中核を占めるナイフ形石器について観察しよう。ナイフ形石器は第3ブロックに5点、第4ブロックに3点、合計して8点あるが、これから破片を差し引き、形態を窺うことのできるものを抽出すると6点となる。これらを大別すると、

- a類 縦長の2側縁加工のもの
- b類 切出形石器
- c類 角錐状石器の類するもの
- d類 不定形のもの

の4種に分類することができる。このうち、a類の2点は縦長剥片を素材とし、基部が尖り気

味であり、打面を完全に除去し、かつ部厚いバックを保持するなど特徴的な形態を示している。問題はこの種のナイフ形石器の素材である剥片の様相であるが、本遺跡内にその種の資料を見出すことはできなかった。ナイフ形石器の特徴としては、VII層段階でのそれに最も近く、VII層に於けるこの種の石器の素材が例外なく石刃であることから、a類の背景に石刃技法の残存若しくは、影響を想定し得るのかもしれないが、今の段階では、なお資料的制約が大きい。

第4ブロックにおいては、a類とb類が共存したが、この組成は神奈川県寺尾遺跡第VI文化層（白石 鈴木 1980）で安定的な成立を見ており、VI層段階での西部関東～東海地方の様相がたいへん気にかかるところである。というのは、下総各地における調査事例の中で、VI層という時期は石刃石器群の卓越を特徴とする時期であり、剥片剥離においては、系列Bが後景に退き、系列Aの席巻が指摘されるからである。例えば、VI層内部における時間的先後関係の明らかな事例を観察すると、AT降灰に先行する権現後例から、AT降灰に後出すると考えられる。柏市水砂遺跡Cブロック（鈴木 1982）、流山市若葉台遺跡第6ブロック（田村 1986b）の両例を比較してみると、それはほぼ純粋な石刃石器群であり、この傾向はV層下部と見られる北海道遺跡第24ブロックに及ぶかと考えられる。従って、今のところ東部関東に於いては、多彩な横打的剥片剥離を技術的基盤とするV層以降の石器群は、VI層石器群と不整合な状態と言わざるを得ず、南関東全域における動向の中で考察されねばならない情勢であろう。

一方、北部関東に於いては、この段階の推移は、後田、大竹（篠原 1985）、岩宿II（杉原 1956）と変遷しているが、大竹段階で既に石刃とナイフ形石器との対応関係が崩壊しており、多種の剥片作出手法の顕在化と相俟って、北関東暗色帯期の伝統的の石刃技法の終末を告知し、岩宿II石器文化の成立条件を形成している。VII層段階における下総台地の諸集団が、古利根川・古鬼怒川の両水系を介して北部関東の諸集団と緊密な関係をきり結んでいたことは既に指摘した（田村 澤野 1987）が、おそらく大竹段階の集団関係が下総におけるV層石器文化の成立とその後の命運にも大きな影を落とすことになったのであろう。従って、現状では、東～北部関東における後田系列と、西部における寺尾系列の両系の分立状況を統合するものとしてV層石器文化を把握しうるかに見えるが、この間の詳細な情況は今後に残された大きな課題である。

下総におけるVII層～VI層における系列Aのあり方は、北部関東との脈絡の中でこそ理解されるのであるが、上に推定された経緯を経て再び系列Bの支配下におかれることになる。彦八山上層の石器群は、この過渡期から、武蔵野台地IV下層石器群という極めて、斉一性の強い石器文化の成立期の様相をよく反映するものと考えてよいであろう。また、この時期には、各処で国府型ナイフ形石器が散見されるが、この種のナイフ形石器の素材が、彦八山遺跡第4ブロックに認められたような、翼状剥片とは異なる在地色の濃い横打剥片であること（織笠 1987b）は、該期における文化的基盤の鞏固さと、南関東における横打技法への依存の歴史性をも垣間見る思いがする。

2 遺構から出土した遺物

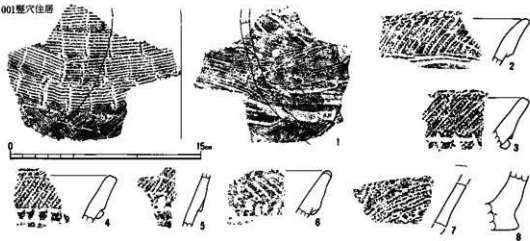
001 竪穴住居出土土器 (第40図1~8、図版35)

弥生土器が出土している。いずれも破片で形が明らかになるものは認められない。1は甕形を呈する土器の頸部と考えられる。遺存部から復原するとかなり大型であったとみられる。表側は全面にハケ目調整が行われ、肩から上にかけて多段の罫状文が施されている。内面は外面と異なる工具によって、ハケ目調整状の跡を残す横方向のなでが加えられる。胎土に白色の細粒を含むのが目立つ。色調は黄褐色である。2~6は甕形に近い器種の口縁部である。それぞれ折り返し口縁に作られ、3~6の折り返し下端部には刻み目がつく。また、2~5の表側は附加条第1種の附加2条、軸縄がRLで附加した縄がRの原体を用いた附加条縄文が施される。6の口縁上端部は小さく波状をなし、表側にはヘラ先で斜め方向の沈線文をつけている。7は底部に近い部分の破片で、8は外に張り出す底部の断面である。色調は茶褐色、黒褐色を示す。内面調整は2が磨きであるほかは、横方向を主とするなでである。

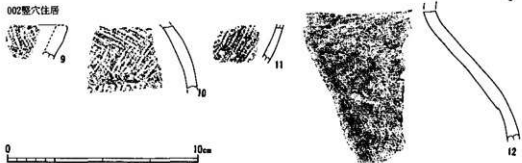
002 竪穴住居出土土器 (第40図9~12、図版35)

弥生土器の小破片が出土している。9はRLを原体とする縄文が施文された口縁部である。10・11は胴部的一部分で、附加条縄文が施される。ただ10の遺存部下位については縄文である可能性が高い。12は甕の肩部で、無文となっている。外面の調整はなでである。

001竪穴住居



002竪穴住居



第40図 001・002竪穴住居出土土器

遺構遺存度が高かった西壁側から土師器の埴・壺・台付壺・甕・高杯が出土している。実測固体数14を数えるが、杯あるいは碗形を呈する器種を全く欠落する。

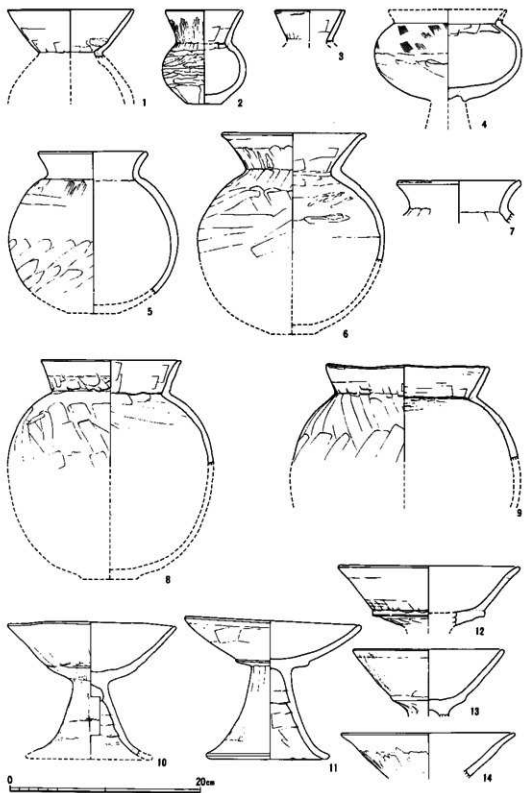
1～3は埴で、大型のもの(1)と、小型のもの(2・3)に分けることができる。いずれも床面に密着するような状態で出土した。大型の部類の1は、かなりすばまっていたと考えられる頸部から、口縁部は開きながら立ち上がっていく。口縁部の3分の1のみで胴部の形状が不明である。復原口径は13cm内外になる。2は復原口径7.9cm、器高9.9cm、底径3.5cmと小型である。外面調整は、胴部中位が横方向のヘラ磨きで、口縁部には縦方向に雑なヘラ磨きを加えられる。色調は黒褐色を呈する。3は部分的ながら2と同形態と考えられる。

4は台部を欠損するものの、台付壺になるであろう。壺部は8cmの割りと低い胴部高の中位に15.5cmの最大径をもち、口縁部は短く立ち上がっていたものと考えられる。台部は10・11の高杯の脚部と同様な作りであったと思われる。胴部外面調整は横方向のヘラなでであるが、上半部の所々にハケ目状の調整痕を残している。色調は外・内面および断面とも赤褐色を呈す。

5～7は壺である。球形の胴部から頸部で絞られ、口縁部が外反して短く立ち上がるもの(5・7)と、大きく開くもの(6)がある。5・6とも口縁部を床につけた逆位の状態で出土したにもかかわらず、両方の口縁部は、一部分が残っているのみで遺存度が悪い。復原口径は5が11.0cm、6が14.4cmである。胴部外面は最終的にヘラ磨きによって仕上げられており、初めに施されたハケ目調整痕やヘラ削り痕を消している。胴部内面は雑なヘラなでの上に部分的なヘラ磨き痕を認めることができる。色調はいずれも黒褐色となる部分が多くを占める。

8・9は甕である。胴部は球状であったと考えられ、口縁部は頸部から「く」の字状に直線的に立ち上がる。8の復原口径は14.4cmになり、肩から上を残す9の口径は16.7cmである。口縁部の調整は内外面横方向のなで、8の内面にはヘラ当て痕がついている。胴部外面は2点ともヘラなでである。内面はなでの後に磨きを一部に施すが丁寧さに欠く。胎土に砂、スコリアが少量含まれ、焼成は2点とも良好である。色調は黒褐色を示す。

10～14は高杯である。いずれも杯部の下位に稜を有するものと考えられる。稜部から上の口縁部形態を基準にすると、僅かに内彎するようなもの(10・11)、上端部を少し外反させて終わるもの(12)、直線的に開くもの(13・14)に分けることができる。10は口径17.4cm、復原器高14.2cmになる。脚部は開きながら下降し、裾部を広げて安定させている。杯部外面はヘラなで、脚柱部には磨きが施され、中位に焼成前につけられた線刻が残る。内面の保存状態は不良で、器表面が剥がれやすい。11は脚部から裾部への移行がなだらかである以外、10と大差はない。口径18.2cm、器高14.3cm、裾部外径12.9cmである。12は稜がかなり張り出し杯部がやや深くつくられる。内外面とも横方向のナデ調整が施され赤彩される。復原口径は15.5cm。14は口縁上端部に横なでが施され、復原口径は14.0cmになる。



第41圖 004竪穴住居出土土器

005 竪穴住居出土土器（第42図1）

床面から出土した遺物に壺・台付甕・高杯がある。しかし、どれも部分的な破片で、1の壺が唯一復原実測可能となった。1は胴部最大径が下位にある壺で、頸部の径がかなり小さくなる。復原値を示すと胴部最大径17.8cm、底径は4.6cmである。外面は横方向のヘラ磨きで調整され、全体に赤彩がなされる。内面をなでによって整えるが、保存状態が悪い。

006 竪穴住居出土土器（第42・72図2～13、図版37）

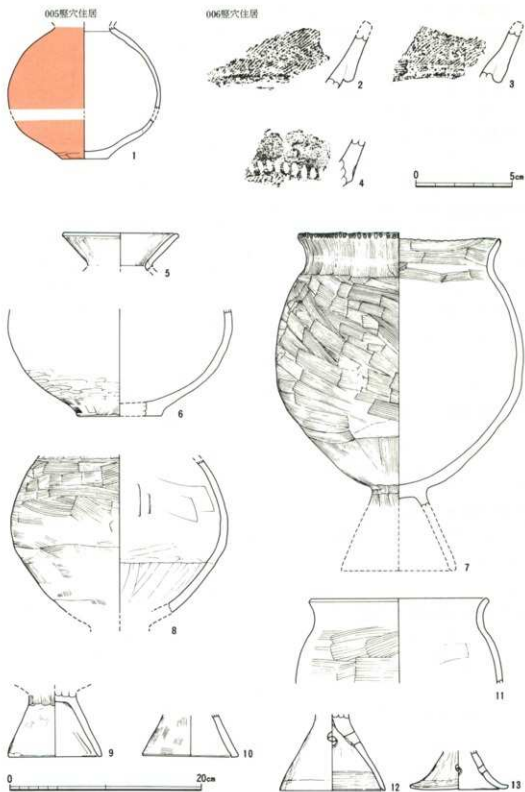
遺存度の高いものは少ないが、壺・台付甕・甕・高杯が床面から出土している。

2～4は壺の口縁部で複合口縁になっているものである。2・3の複合部には縄文が施文され、中位と下端部の一部へ横方向のハケ目を加えている。内面は入念な横方向のヘラ磨きが認められる。4の下端にはハケ目をつける工具によって連続的に押捺が施される。

5は直線的に開きながら立ち上がる壺の口縁部である。内外面とも縦方向のヘラ磨き調整で仕上げられ、焼成は良好である。6は胴部下位に最大径をもつ壺と考えられる。復原口径は、8.6cm前後になり底面に木葉痕を残す。外面の底部下端にハケ目痕がついているが、胴部は横方向のヘラ磨きを行っている。内面も同様にヘラ磨きで、色調は黒褐色を呈する。

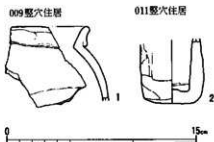
7～10は台付甕の胴部と台部である。7は住居の南半分から出土し、甕部の大部分が復原できたものである。胴部は中位に最大径があり、全体に丸みをもつ。胴部から口縁部へはゆるやかに移行し、頸部に特に絞っていない。口縁部は幾分外反して立ち上がり、端部に刻目が加えられる。台部は開きながら直線的に下降するものと考えられるが、甕との接合部から僅かを残すのみであるため、全体は明らかでない。胴部の外面調整は、下半部が縦方向のハケ目で、上半部が斜め方向を基調とするハケ目になっている。口縁部は、胴上半部の調整の後に縦方向のハケ目調整を行う。内面については、口縁部が横方向のハケ目調整、胴部は磨きが施されるが、火熱によって器表面が荒れている。口径は20.2cm、現存器高28cm、胴部最大径25.8cmである。色調は黒褐色。8は、かなり丸くなると思われる胴部を4分の1のみを残す。最大径は中位に位置すると思われ、復原すると22.5cm前後になる。調整は内外面とも、胴中位からやや下で変換する。外面の下半部は、縦方向のハケ目調整の後に磨きを加えられ、上半部は横方向のハケ目を残存させる。内面はなでであるが、下半部は縦方向、上半部は横方向でその違いは明瞭である。9・10は台部である。外面調整は縦方向にハケ目を施し、さらになでて仕上げられる。底径は9が9.7cm、10が10cmになる。

11は甕と考えられる。胴部からゆるやかに外反して口縁部に至り、端部に面を作って納める。外面にハケ目状の調整痕がみられ、内面はヘラなでから磨きを施す。復原口径は18cm内外。12・13は高杯の脚部になるであろう。脚柱部中位に4孔が穿たれていることでは共通するが、2点の形態は全く異なる。12は直線的に下降し、脚高7.8cmになるのに対し、13は脚高が低く、裾部を外に広げて終わらせている。外面調整は両者ともヘラ磨きである。



第42圖 005・006罍穴住居出土土器

昭和61年度に実施した確認調査の際、竪穴住居の検出面で土器が出土した。それぞれ量的には少ないものの、プランの確認だけで終わった住居の時期を、ある程度比定できる資料となり得るのではないだろうか。以下これらについて簡単に紹介しておきたい。



009 竪穴住居出土土器(第43図1)

折り返し口縁となる甬の破片である。調整は口縁部外面が横なで、胴部は外面横なで、内面がヘラなでによっている。色調は黒褐色を呈する。

010 竪穴住居出土土器(第44図1～3、図版38)

土師器の甬・高杯が出土している。1は甬で口縁部のみ4分の1遺存する。口径は13.9cmである。絞られた頸部から外に開きながら立ち上がり、上部で僅かに直立するように納める。外面は縦方向にハケ目を施した後、上端部に横なでを加えている。内面は横なでで調整される。2は高杯の杯部である。球の一部を切りとったように、全体に内彎しながら立ち上がる。内外面とも磨きを施し、赤彩される。3も高杯の杯部になる。下端に稜があり、幾分内彎しながら外上方へ大きく開いていく。調整は乾燥があまり進んでない段階で行われ、外面は斜め方向のヘラ磨き、内面がヘラなでである。口径20.5cm、色調は暗黄褐色。

011 竪穴住居出土土器(第43図2、図版38)

土師器の小形土器が出土している。コップ状を呈し下端はヘラ削り、中位はヘラなでによって調整される。口縁部の形態が不明であるが、千葉市の東寺山石神遺跡33号住居址(沼沢ほか1977)などに類例が認められる。

012 竪穴住居出土土器(第44図4・5、図版38)

土師器の甕が2点出土している。胴部中位に弱い張りがあり、口縁部はゆるやかに外反して端部を丸く納める。口縁部は内外面とも横なで、胴部は外面がヘラ削りで調整される。内面については、ヘラなでを行う。口径は4が16.6cm、5が15.9cmである。保存状態が不良である。

004・006 竪穴住居出土土製品(第45図、図版40)

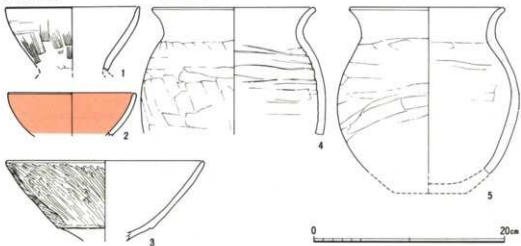
004竪穴住居から1点、006竪穴住居から2点、合計3点の砥石状土製品が出土した。1は床面から発見され使用痕のついた幾つかの面が認められる。石材は浮岩で重さは34.1gである。2・3には溝状の使用痕が残り、石材は浮岩である。重量は2が9.7g、3が4.0g。

202 土坑出土土器(第46図・第48図1、図版38・39)

縄文土器が出土している。第46図1は体部下半に丸みを持ち、僅かに内彎しながら立ち上がるもので、浅鉢になるであろう。口縁部に二列の角押文が巡り一個の突起がつけられる。胎土に多量の雲母が含まれ、黒褐色を示す。2は寸胴の深鉢である。口縁部の内側に稜を持ち、外面は輪痕残して装飾としている以外文様が加えられていない。口径は10.8cmである。3・4

010 斲穴住居

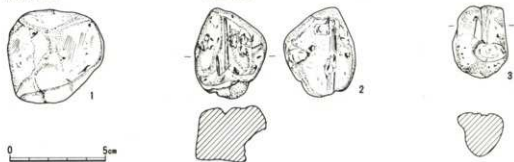
012 斲穴住居



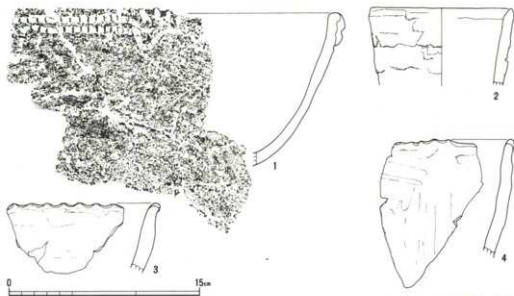
第44图 010・012斲穴住居出土土器

004 斲穴住居

006 斲穴住居



第45图 004・006斲穴住居出土石製品



第46图 202土坑出土土器

は無文の深鉢の同一個体になる。口縁部は押捺によって小波状を呈している。胎土に少量の雲母を含み色調は黒褐色を示す。第48図1の底面には製作時に敷いた編物の圧痕が残る。

204 土坑出土土器(第47図)

底面から縄文土器の破片が4点出土した。1は微隆起が貼り付けられた胴部の一部である。2は沈線文による区画内に縄文を充填し縄文施文以外の部分を磨いている。



第47図 204土坑出土土器

205 土坑出土土器(第48図2～6、図版38)

炭化材とともに、壺・甕・高杯が出土している。2は壺で、中位からやや下に最大径を設け、球を押し潰したような胴部形態を有する。また最大径の位置で下半部と上半部の接合が行われていることが判る。外面の調整は磨きで、内面の上半部は指頭によるなでが認められる。3も壺といえるだろう。最大径は中位にあり、胴部の立ちが高い。外面は全体にヘラ磨きを施し、内面をなでによって調整する。4は甕の口縁部で、5は壺の底部になる可能性が高い。6は直線的に外方へ開きながら下降する高杯の脚部である。杯部は脚部との接合部から急激に外に開くようであるが、遺存度が低いため明らかではない。いずれも火熱のためか器面が荒れる。

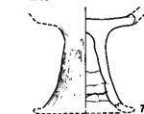
209 土坑出土土器(第48図7・8)

7は高杯の脚部である。杯部は下端に稜を有するものと考えられ、脚柱部は僅かずつ開いて裾部を広げる。8は甕の胴下半部と思われる。内外面とも器表面が剝落し、調整は不明。

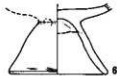
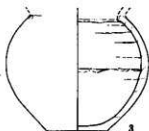
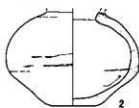
202土坑



209土坑



205土坑



第48図 202・205・209土坑出土土器

3 グリッド出土遺物

遺構に伴わないで出土した遺物を、グリッド出土として扱う。縄文土器・弥生土器・土師器・土師質土器・陶磁器などの土器のほか、土製品・石器がある。

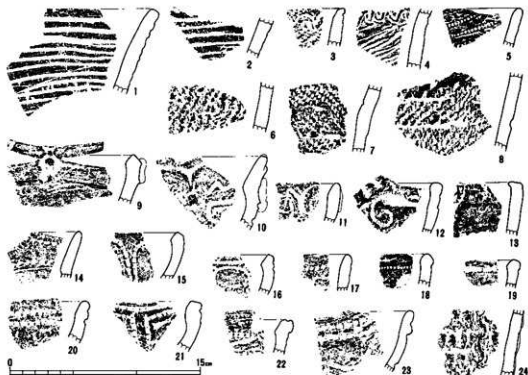
縄文土器(第49図・第50図25～36、図版39・40)

遺構検出中、古墳時代の竪穴住居・竪穴状遺構の覆土から、整理箱で1箱に満たない少量の縄文土器を得た。従来縄文時代の遺跡として知られていただけに、出土量の少なさは意外という感じであった。以下6群に分類して説明を加えていく。

第1群土器(第49図1・2) 早期中葉の田戸下層式土器である。2片出土しているが同一個体になる。器形は口縁部が開いていく深鉢になると考えられ、口唇部は角頭状となる。口縁部直下から横方向の浅い沈線文が、連続的に施される。胎土に石英の微細粒・スコリアを含み、内面は磨かれた様子をとどめる。

第2群土器(第49図3～8) 前期前半の黒浜式土器である。3・4は竹管による装飾がある以外は、地文としての縄文が施されている破片のみである。内面調整は磨きである。

第3群土器(第49図9～24) 中期前半の阿玉台式土器である。今回の調査では本群が最も多く出土し、大部分が西村編年(西村 1984)による阿玉台 Ia・Ib 式に対比できるもので占められる。9は隆起線文によって、口縁部に椀状の区画が作られており、突起が伴う以外は装飾が加えられていない。10は隆起線文と沈線文とによって文様が描かれ、口縁部は波状になる



第49図 グリッド出土遺物①

ものと考えられる。9・10とも内面は丁寧に磨かれ、胎土に石英の微細粒が見られる。11～23は文様として角押文が施されるものである。16・21を除くほとんどの胎土に石英・長石の細粒と雲母を含有する。11は杵状に貼られた低い隆起線文の内側に沿って角押文がある。12の口唇部は押捺されて小さく凹み、曲線的な角押文が展開する。13の口唇部の一部は上から押されて内側に張り出すようになり、口縁部の上方に角押文がある。14の角押文は、引く時の力を弱くしたためか、押した部分だけが強調されている。15は角押文が杵を作るように見える。17～19は口縁上端部に1列に施文され、20・22・23は低い隆起線文と共に1列の角押文が施される。17・23は波状口縁になるだろう。24は胴部の破片である。ひだ状の輪積痕を残し、縦方向に隆起線文を貼って、その上の所々を指でつぶしている。色調は暗褐色・黒褐色となるものが多い。

第4群土器(第50図25・26) 沈線文によって口縁部に無文帯を設けた、中期末葉の加曾利EIV式と考えられる土器である。口縁部が内彎する鉢形土器で、口唇部は丸く納められている。

第5群土器(第50図27～35) 後期初頭の称名寺式に比定される土器である。沈線文の区画内に縄文を充填するもの(27～32)と、沈線文の区画の中に刺突文や列点文が加えられた(33～35)二種が認められる。

第6群土器(第50図36) 後期中葉の加曾利BI式に対比される土器で、この1点だけが出土している。内外面に磨消縄文帯が構成され、小さな突起がつく。深鉢形土器になろう。

弥生土器(第 図37～41、図版40)

口縁部は出土していない。37は櫛歯状工具を用いて施文された菱形の文様が残る。部位は胴上半から頸部あたりになると思われる。38は001竪穴住居で出土した簾状文を有する壺形土器と手法を同じくする。遺存部分では簾状文は1段で、その下は細密なハケ目状の調整痕がつく。39は底部の下端でRLを原体とする縄文が施されており、底に近いところでは原体の末端がばらけて、繊維束のものが施文されている。40も縄文で飾り、41とともに底面に木葉痕がある。

土師質土器(第50図42、図版40)

42は底部から直線的に開く皿である。底部は回転糸切り無調整で板状の圧痕がつき、内面の底部下端を凹ませる。口径10.5cm、器高2.7cm、底径5.2cm。

土製品(第50図43～51、表22、図版40)

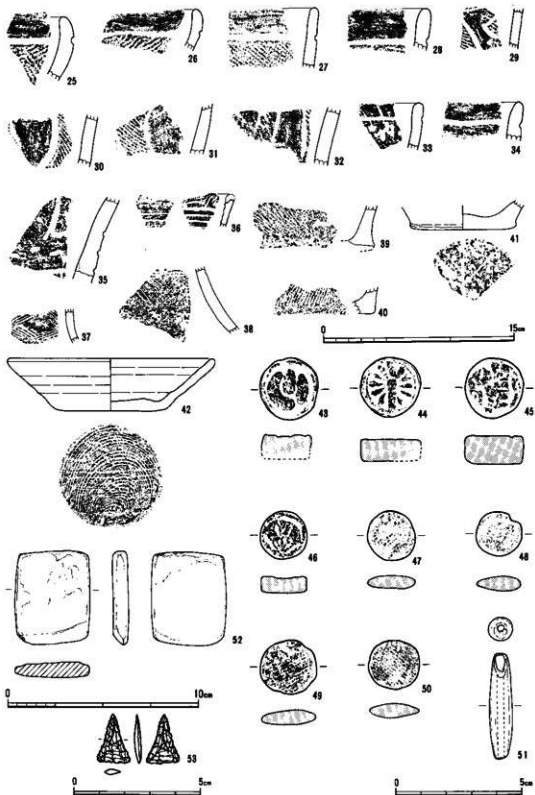
型押で製作された泥面子(43～46)、手捏の善石状土製品(47～50)、管状土鍾状土製品(51)がある。

石器(第50図52・53、図版40)

52は扁平片刃状の石器であるが、石材は結晶片岩で大変脆そうな状態を呈す。長さ47.5mm×幅39mm×厚さ8.2mm。53はチャート製の石鏃で、長さは19mmである。

表22 土製品計測値

押図番号	種類	大きさ(mm)		重さ(g)
50-43	泥面子	径 23.9	厚 —	(4.9)
-44	〃	23.7	8.7	(5.0)
-45	〃	23.7	11.1	6.9
-46	〃	18.2	6.3	2.4
-47	(善石)	19.6	5.0	1.7
-48	〃	17.0	5.7	1.6
-49	〃	21.5	5.8	2.5
-50	〃	19.3	5.4	2.1
-51	(土鍾)	長 40.6	径 9.4	2.8



第50図 グリッド出土遺物②

引用参考文献

- 麻生敏隆 1987 「後田遺跡(旧石器編)」 『関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第15集』
- 石倉亮治 1987 「佐倉市腰巻遺跡」 『佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 大原正義ほか1978 「佐倉市星谷津遺跡」
- 奥田正彦ほか1986 「遠山天ノ作遺跡」 『主要地方道成田松尾線Ⅲ』
- 小田静夫 キーリー編 1973 「武蔵野公園遺跡Ⅰ」
- 小田静夫 小林達夫ほか1971 「野川先土器時代遺跡の研究」 『第四紀研究第10巻第4号』
- 織笠 明 1987a 「A T降灰以前の下総・武蔵野・相模野の土層対比」 『シンポジウム房総の先土器時代—A T降灰以前の石器群』
- 織笠 明 1987b 「殿山技法と国府型ナイフ形石器」 『考古学雑誌第72巻第4号』
- 加藤 稔 1973a 「ある研究史—最上川・荒川流域における後期旧石器文化研究の諸問題」 『山形考古学第2巻第2号』
- 加藤 稔ほか1973b 「山形県岩井沢遺跡の研究」 (山形考古学文獻刊行会)
- 澤野 弘 1987 「下総台地における立川ロームの層序区分」 『シンポジウム房総の先土器時代—A T降灰以前の石器群』
- 篠原 正 1985 「大竹遺跡」 『関越自動車道(新潟線)埋蔵文化財調査報告書第Ⅱ分冊』
- 白石浩之 鈴木次郎 1980 「寺尾遺跡」 『神奈川県埋蔵文化財調査報告8』
- 杉原荘介 1956 「群馬県岩宿発見の石器文化」 『明治大学文学部研究報告考古学第1冊』
- 鈴木定明 1982 「水砂遺跡」 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』
- 田村 隆 1982 「復山谷遺跡」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』
- 田村 隆 1986a 「ナイフ形石器の地域相—下総台地における変遷過程—」 『千葉県立房総風土記の丘年報9』
- 田村 隆 1986b 「若葉台遺跡」 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』
- 田村 隆 澤野 弘 1987 「先土器時代の石器石材の研究」 『千葉県文化財センター研究紀要11』
- 田村 隆 1987 「八千代市井戸向遺跡」 『萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』
- 西村正衛 1984 「阿玉台式土器の編年」 『石器時代における利根川下流域の研究』
- 沼沢 豊ほか1977 「生活跡篇」 『東寺山石神遺跡』
- 橋本勝雄 1984 「八千代市権現後遺跡」 『萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』
- 橋本勝雄 1985 「八千代市北海道遺跡」 『萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
- 藤岡孝司 1986 「八千代市ヲサル山遺跡」 『萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
- 保坂康夫 1985 「糠群および配石」 『寺谷遺跡発掘調査報告書』
- 三浦和信 1986 「土持台遺跡」 『多古工業団地内遺跡発掘調査報告書』
- 御堂島正 上本進二 1987 「遺物の水平・垂直移動」 『神奈川考古28号』
- 三宅敦気 1986 「善上遺跡」 『関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書(KC-Ⅳ)』

IV ま と め

1 先土器時代について

彦八山遺跡の発掘調査によって検出された石器集中域—ブロック—は10箇所であった。この数字は大きなものではないが、調査範囲と、そこにおける分布状況を見れば分かるように、比較的密度の濃い部類に入るのであろう。しかし、この10箇所のブロックが全て同一時期の所産でないことは既に詳細に論じた処であって、大別3期に及ぶ文化層の重複が認められるのである。

各時期毎のブロックの概要は次のとおりである。

彦八山下層 a 期

第5、第6、第10の3ブロックが本期の所産と考えられる。産出層準はVII a 層の下半であり、これは武蔵野台地IX層の上半分に相当し、下総台地西縁部では今後IX a 層と呼称するのがよいであろう。ブロックの分布は、調査区の西側に第5、第6ブロックが、調査区最東端に第10ブロックが位置し、調査区域内に点在する状態になっている。

第5ブロックは、剥片5点、礫の細片1点の合計6点から構成され、分布範囲も狭隘である。第6ブロックも、遺物総数8点とたいへん小規模なものであるが、その内容は、類形器1点、使用痕のある剥片2点、剥片5点であり、剥片類を主体とする点で第5ブロックに近似した様相を呈している。これら両ブロック共に、石核や細かい剥片(削片)を含んでおらず、数種の母岩から剝離された1枚～数枚の目的々剥片のみを組成内容とし、かつ極めて限定された空間に廃棄されているという共通する性格が窺われる。また、両ブロック間には共通の母岩が含まれていない。

一方、第10ブロックは、ナイフ形石器1点、側削器1点、剥片14点、原石1点と、第5、第6ブロックに比較して多少異った様相を呈している。また、剥片14点のうち、11点は同一母岩に属する安山岩の剥片類で、特に薄手板状のものが多く、楔形石器の素材ではないかと考えられる。ナイフ形石器は剥片素材の小型のものであり、よく該期の特徴を示しているようである。

この段階の剥片剝離技術の実態を窺うには資料の欠落する部分もあり、不十分な成果しか得られなかったものの、大旨、IX a 層段階の様相に一致している。石器組成も極めて不完全にしか把握できなかったが、他の同期の遺跡においても2次加工の認められる石器は僅少で、未だ十全な内容を知悉するには至っていない。特にナイフ形石器は少数であり、反面、楔形石器の卓越が指摘される。この2つの現象が相関的なものであるのか否かは十分な資料的裏付けを俟ちたいが、骨角製尖頭器の盛行と関係があるのではあるまいか。

彦八山下層 b 期

第7～第9の3ブロックがこの時期に包摂される。産出層準はVI層からVII a 層上部であるが、これは武蔵野台地、並びに下総台地西縁部の標準土層ではVII層に相当する。平面的な分布状況

を見ると、第7ブロックが調査区の西側に孤立するが、第8、第9の両ブロックは東側に近接して並存している。

第7ブロックでは、削器1点、使用痕のある剥片2点、剥片4点、石核1点が小範囲内から散漫に出土している。ブロックの構成としては、下層a期の第5、第6ブロックの内容に近く、尖頭器が欠落し、目的剥片を主体とするブロックである。

ところが、第8、第9ブロックでは全く様相が異っている。第8ブロックは石核?1点、剥片3点、の他は、9点8個体分の円礫から構成されている。石刃の存在に特に注意したい。分布状況を見ると、比較的広い範囲に礫と剥片が点在している。第9ブロックは、剥片3点、石核?1点、10点7個体分の円礫がやはり散在する状況を呈しており、この2つのブロックの内容が極めて相似的であることは明らかであろう。また、両ブロック間には同一母岩から作られた剥片が存在し、2ブロック1ユニットとなる公算が強い。

下総台地に於いても、武蔵野台地IV下層期を中心に礫群の形成が著明となるが、彦八山の事例はそれらの礫群の様子とは異質な部分が多い。彦八山例を見ると、礫の分布が集中せず、広範囲に疎らに散在し、典型的な礫群に看取されるケルン状の集積形態をとらない。また、礫群構成礫の場合、殆ど例外無く被熱による赤色や黒変が認められる。更に、破砕化したものを中心とするが、本遺跡例は、明確な焼成痕を留めない完形礫、若しくはそれに準ずる大型礫から構成されている。また、10点未満の個体数であることも、礫群としての一般的性格を逸脱するものであろう。このように、非礫群の属性を保有する礫の検出は、先土器時代各期に認め得るにしても、彦八山例のように、礫自体がブロックの中核的存在となる例は、従来、本地域においてはあまり注目されることがなかったようである。この種の礫の性格はよく分らないが、それ自体が何らかの加工具であった可能性があろう。

彦八山上層

第1～第4ブロックが相当する。調査区の西側に第1～第3とした3ブロックが連続し、東側にやや離れて第4ブロックが位置している。産出層準は第1黒色帯であるV層であり、良好な資料が検出されている。ことに、第4ブロックには、ナイフ形石器や横打剥片の接合資料が含まれ、本地域に於いても、漸くV層石器文化の内容を理解する端緒となった。

第1ブロックは、若干の下層石器の混入が疑われ、清楚な理解は困難であったが、剥片8点(うち2点に刃こぼれあり)、石核2点が検出された。小範囲からの散漫な出土であり、性格の規定が難しい。

第2ブロックは、剥片類を主とし、5点の石核を含む73点の資料から構成されており、泥岩と珪化岩の2個体を中心とする剥片剥離を背景に成立したブロックである。本ブロックで特筆されるのは、鍋底状を程する特殊な遺物出土状況である。このような出土状況は、東京都多聞寺前遺跡で注意され、下総においても類例が増加しつつあり、積極的に掘り込みの存在を仮定

する立場に立ちたいが、そのためには、掘り込み自体の検出が前提とされよう。発掘調査時の精査に期する処が大きい。

第3ブロックは剥片剥離の場と、礫片を中心とし、それに少量のナイフ形石器を加える別な場とが接するように複合したブロックである。典型的なキャンプサイトの状況が再現されよう。

第4ブロックは32点の資料からなる。ナイフ形石器、目的剥片を主体とするが、ブロック内において、安山岩製のナイフ形石器が製作された痕跡を留めている。第3ブロックとは器種組成は近いものの、礫群を伴っておらず、あるいは未調査区に礫ブロックが存在するのかもしれない。

以上の如く、彦八山遺跡には多彩な問題点を秘めたブロックが多くあり、能う限りその抽出に努めたつもりであるが、なお論じられねばならない問題は多い。本報告においてはブロックの機能的側面に関しては、殆んど触れるところがなかった。このことは調査自体が路線に沿う限定された部分を対象としたため、間ブロック的検討が困難であった事由によるところが大きい。また、近年のエスノアーケオロジーの成果によれば、廃棄の実態は極めて多様であり、安易な類推を戒めるに十分なものがあるからに他ならない。

2 遺構・遺物について

今回の調査は、彦八山遺跡の限定された範囲であるが、そこから検出された遺構・遺物は、遺跡の性格を知る貴重な事実を提示してくれたと思われる。先土器時代に続き、その成果を時期ごとに見てまとめたい。

縄文時代の遺構として捉えられるのは、003竪穴住居と、201～204・210の5基の土坑である。003竪穴住居は柱穴と炉が検出されたのみで、明確な住居形態や構築時期は明らかにし得なかった。しかし、隣接する八反割A遺跡で検出されている加曾利EIV式期の竪穴住居と、003竪穴住居には共通する特色を見出すことができる。おそらく003竪穴住居も中期末から後期初頭に位置づけて大過ないものと考えられる。次に土坑について触れておきたい。201・202土坑は不整形の平面形で大変浅いものである。この2基のうち202土坑は、プランが明らかなる直上から遺物が出土し始めているので、実際はもう少し掘り込みがあったはずである。また4個体以上の土器(阿玉台 Ia)が出土しているが完形品はない。いずれにせよ両土坑ともその性格にまでは言及できない状況である。203・204・210の3基の土坑は近接して検出されており、規模・形態ともよく似ている。現況では同筒形を呈しているが、構築時には開口部が小さくなるフラスコ形であったと思われる。僅かな出土遺物から推定すれば、いずれも中期末から後期初頭、003竪穴住居と同様な時期に比定できる。

グリッドから出土した縄文土器は早期から後期にわたる。早期では田戸下層式が発見され、

従来彦八山遺跡周辺で未報告であった沈線文系土器の存在を明らかにした。前期の黒浜式、中期の阿玉台 Ia・Ib 式、加曾利 EIV 式を得ているが量的には少ない。また以前から知られていた後期の称名寺式、堀之内式も少量で、加曾利 BI 式以後の土器は認められなかった。

弥生時代に比定される遺構は、001・002・005・006 の 4 軒の竪穴住居と、205 土坑である。4 軒の竪穴住居は、その形態および規模が一様でない。001 竪穴住居は 4.5m×3.9m の隅丸長方形、002 竪穴住居も隅丸長方形になるとは思われるものの、全体の形とか内部施設は 001 竪穴住居とは異なっている。005 竪穴住居は直径約 5.5m の円形で、ベッド状遺構を伴っている。さらに 4 軒のなかで最も規模が大きい 006 竪穴住居は、6.4m×6.6m の隅丸方形で、床面の一部にロームを削り残した施設を作っている。さて各竪穴住居から出土した遺物であるが、006 竪穴住居を除く 3 軒は、時期を論ずるのにあまりに微量な量しか検出されていない。001・002 竪穴住居からは、いわゆる印旛・手賀沼系と呼ばれる附加条縄文を施した土器片が出土しているが断片的である。ただ注目されるのは、001 竪穴住居から出土している薫状文を施した壺である。これは、南関東の土器群にはない主文様で、東部関東の土器とも異なるものであろう。より厳密な分析が必要であろうが、他地域からの搬入品と考えて間違いない。いわゆる印旛・手賀沼系の土器に伴出するものとしては興味あるものである。以上の 2 軒は大略的に後期の前半～中葉と考えておきたい。005 竪穴住居からは赤彩された壺が 1 点出土しているにとどまる。006 竪穴住居からは、壺・台付甕・甕・高杯が出土した。ほぼ完形に復原できた台付甕は口縁上端部に押捺による装飾を加えたものである。また、205 土坑は祭祀的な遺構と考えられ、壺・甕・高杯が出土している。この 3 遺構は弥生時代末期の所産になろう。

古墳時代の遺構は、004 竪穴住居と、205・207～209 土坑である。確認調査で判明した 012 竪穴住居も当期である。004 竪穴住居は、一辺 7.5m のほぼ正方形を呈し、北壁に近い位置に炉を設置している。遺物は杯・椀類を欠落するが、埴・壺・台付壺・甕・高杯がそろっており、和泉期のセットとして捉えられる。土坑についても同様な時期が考えられ、012 竪穴住居はカマドをもつことから鬼高期と断定できる。

中・近世の遺構と考えられるのは、竪穴状遺構、溝状遺構、焼土遺構である。調査区の東端に集中的に検出された竪穴状遺構は、402・403 が一定の規模を意識して構築されているほかは不整形である。しかし、底面が平坦にされ、101 焼土遺構のような焼土が 007・401・406 竪穴状遺構に形成されている点に特徴がある。問題となる点は、切り合い関係があつて、ある程度の期間使用されていたにもかかわらず、遺物がほとんど伴わないことと、303 溝状遺構とそれに直交する 305 溝状遺構の内側に検出されていることである。今後居館跡的な遺構群になるか否かの検討を含め、なぜこうした遺構がこの地に構築されたのか、その背景の有無を探り、より明確な性格と時期を究明していかなければならない。

以上、彦八山遺跡の変遷を調査結果から概観し、調査報告のまとめとする。

図面・図版

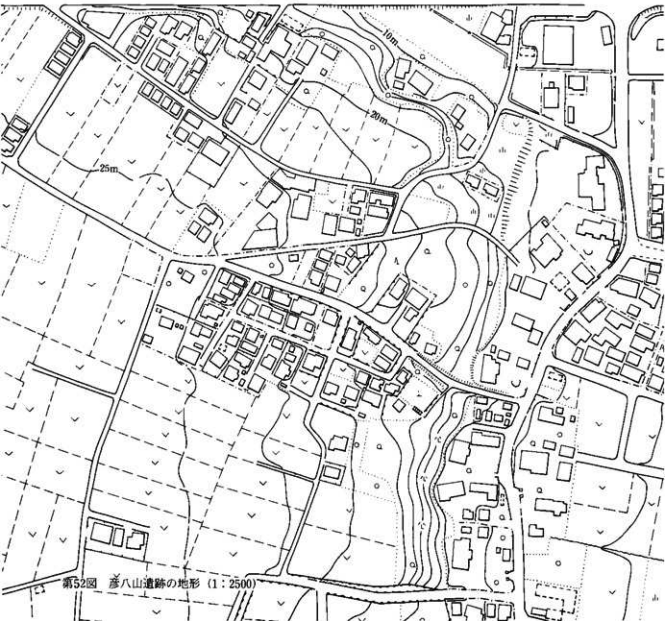
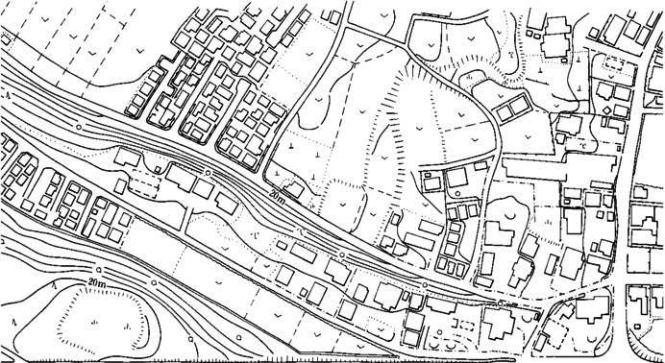


第51図 産八山道跡と周辺の地形 (1:10000)

昭和5年



彦八山遺跡



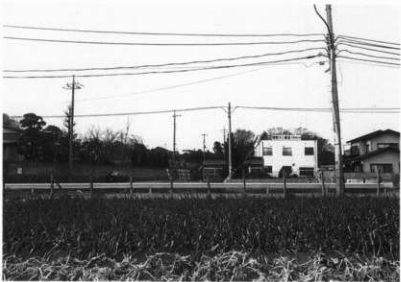
第52図 彦八山遺跡の地形 (1:2500)



道跡の遠景
(松戸秋山高校から)



国分谷から見た道跡

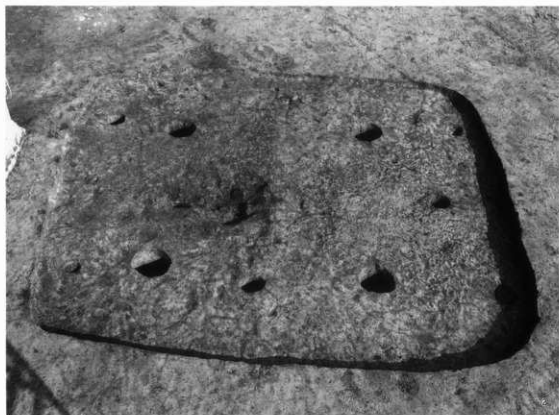


道跡の近景
(西から)





調査後の全景(西から)



001竪穴住居



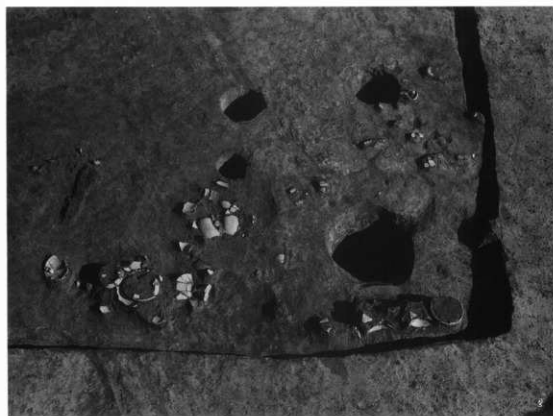
002 鑿穴住居



003 鑿穴住居



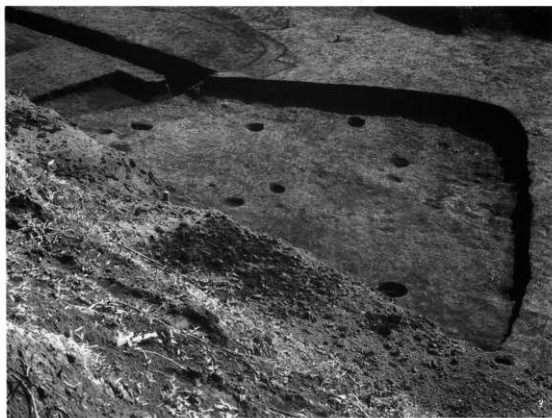
004 竖穴住居



004 竖穴住居 遺物出土状況



005 竖穴住居



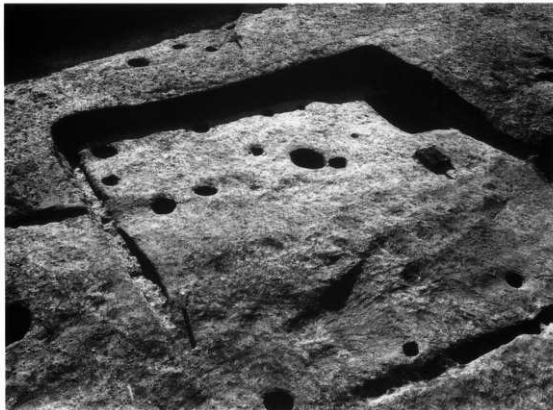
006 竖穴住居



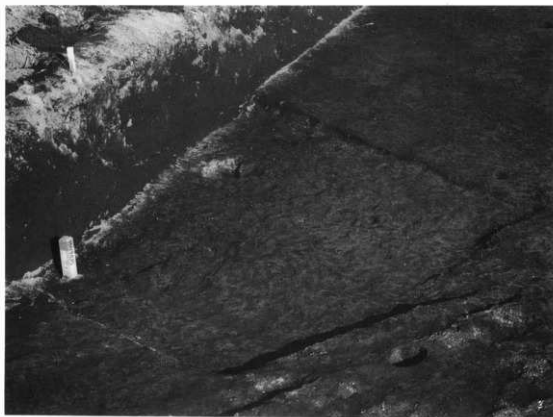
竪穴状遺構検出状況



401竪穴状遺構



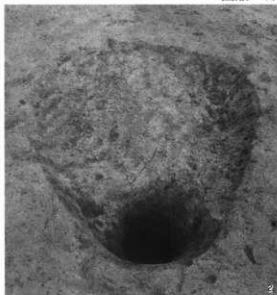
402 竪穴状遺構



403 竪穴状遺構



201土坑



202土坑



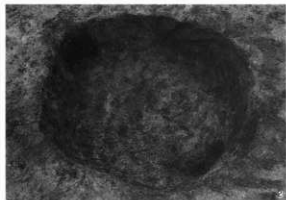
203土坑



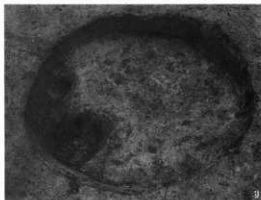
204土坑



205土坑遺物出土狀況



207土坑



208土坑



209土坑遺物出土狀況



210土坑



302溝状遺構



303溝状遺構



303溝状遺構土層断面



009・303検出状況



011検出状況



305検出状況



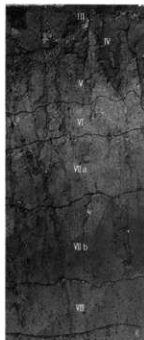
第1ブロック



第3ブロック



第4ブロック



1 土層断面
2 第5ブロック



第6ブロック



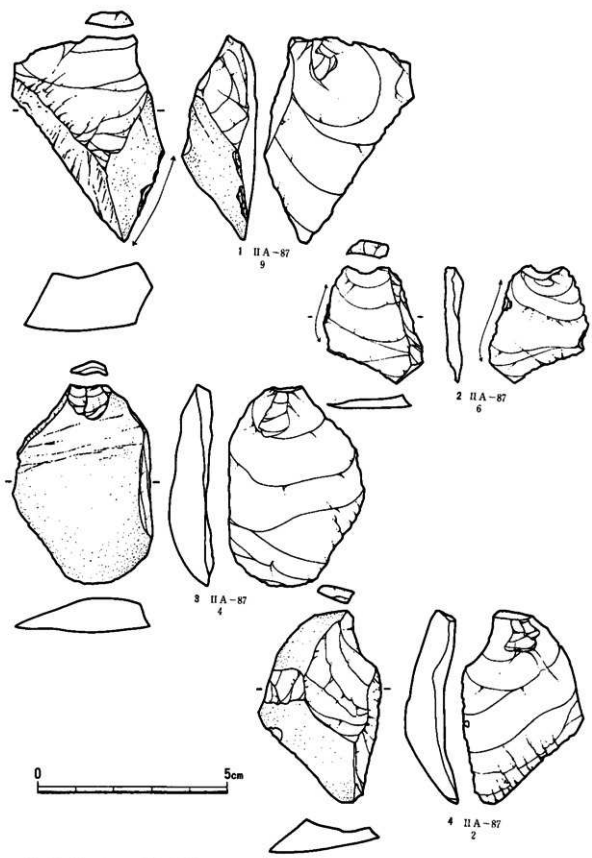
第7ブロック



第9ブロック



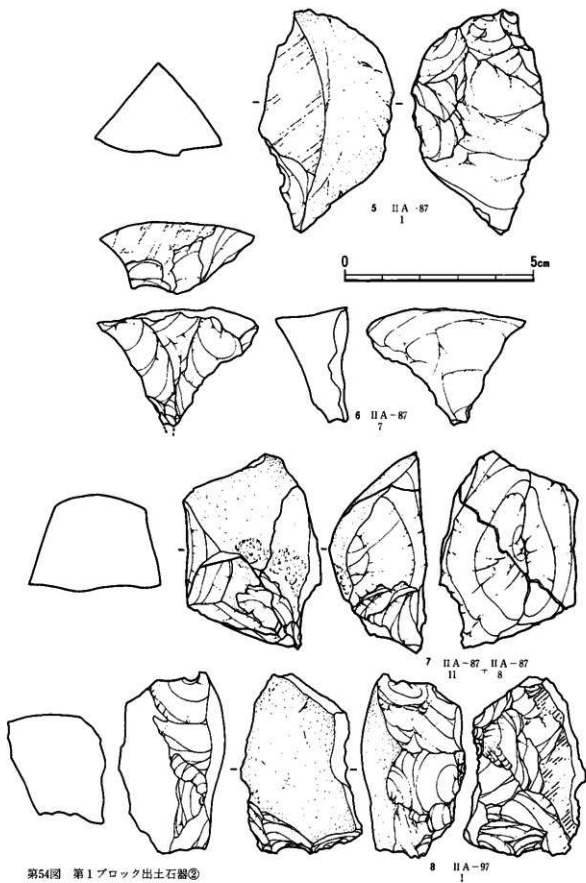
第9ブロック



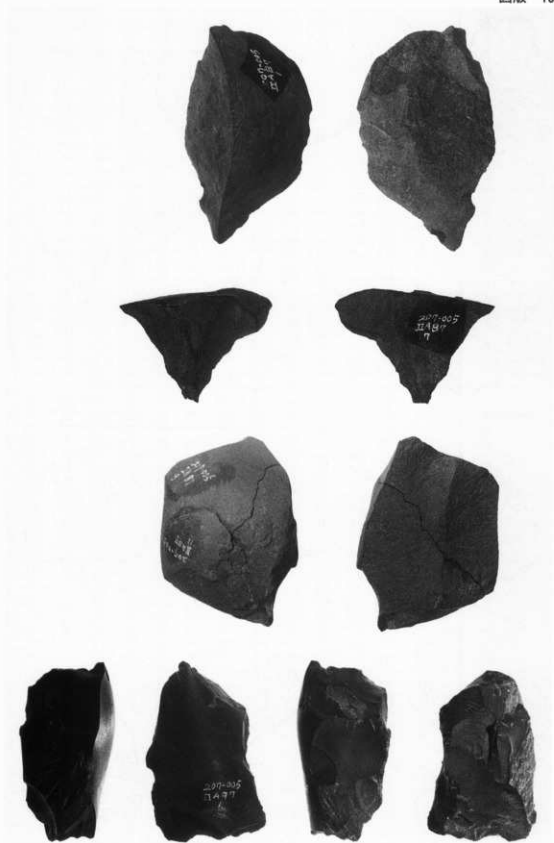
第53図 第1ブロック出土石器①



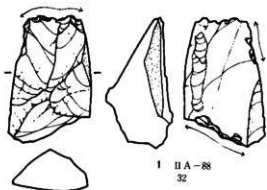
第1ブロック出土石器



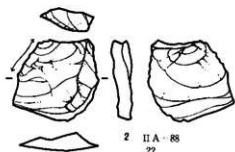
第54図 第1ブロック出土石器②



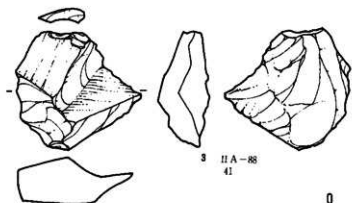
第1ブロック出土石器



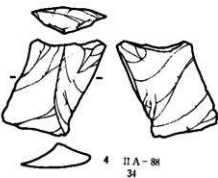
1 II A-88
32



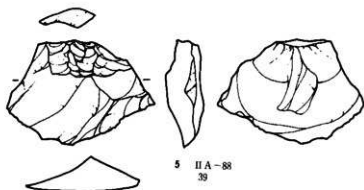
2 II A-88
22



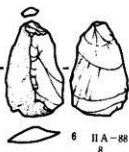
3 II A-88
41



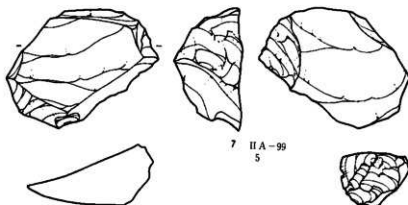
4 II A-88
34



5 II A-88
39



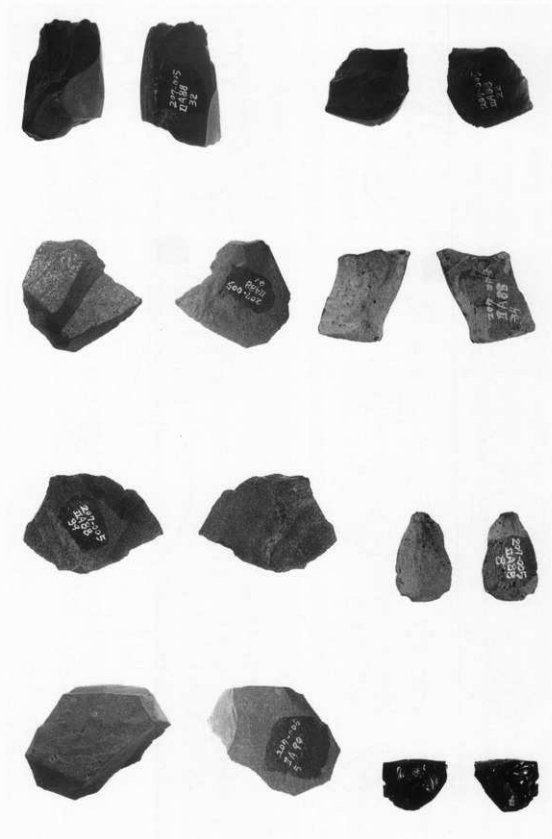
6 II A-88
8



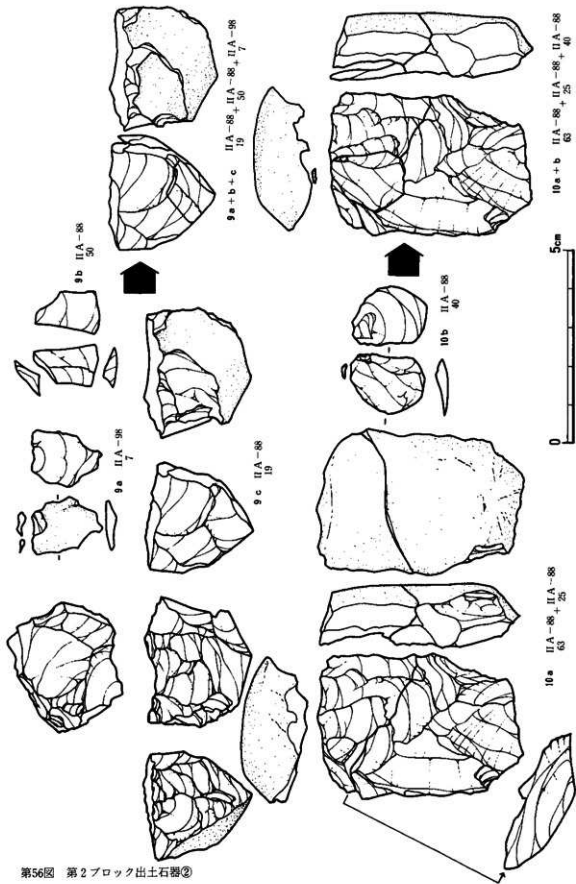
7 II A-99
5



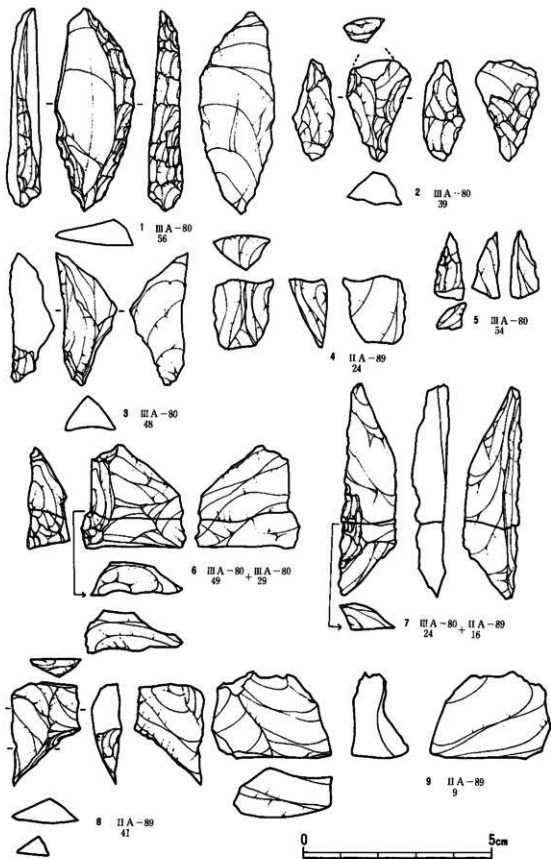
8 II A-88
37



第2ブロック出土石器



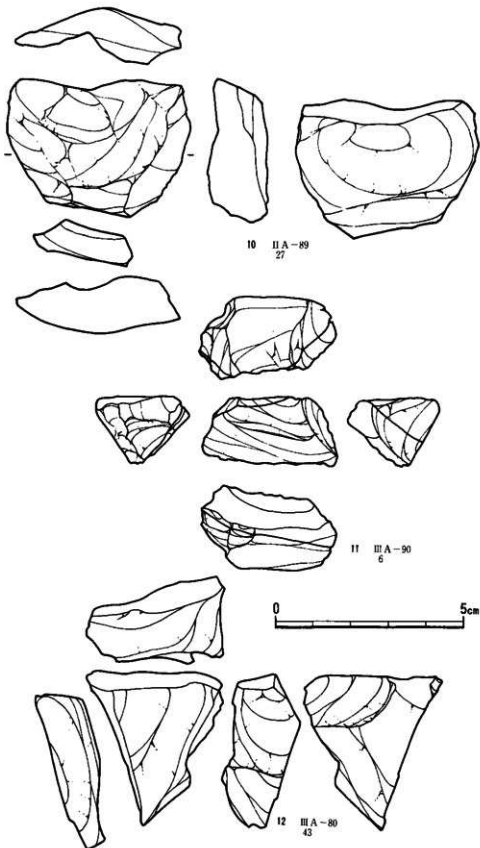
第56図 第2ブロック出土石器②



第57図 第3ブロック出土石器①

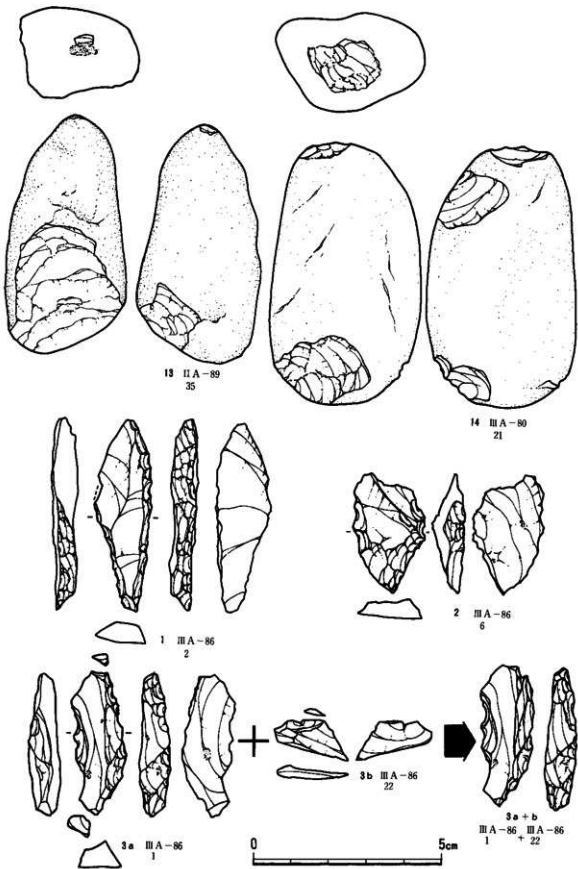


第3ブロック出土石器

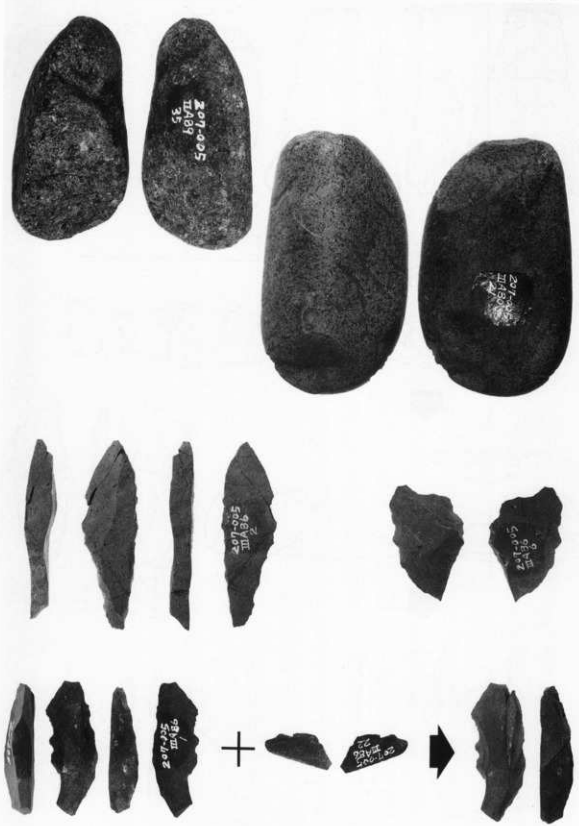


第58図 第3ブロック出土石器②

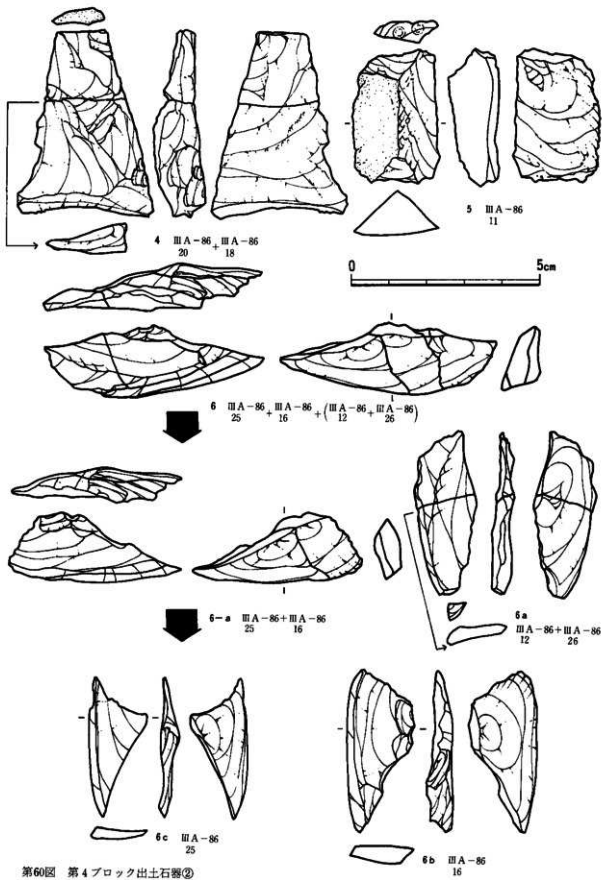




第59図 第3ブロック出土石器③・第4ブロック出土石器①



第3・4ブロック出土石器

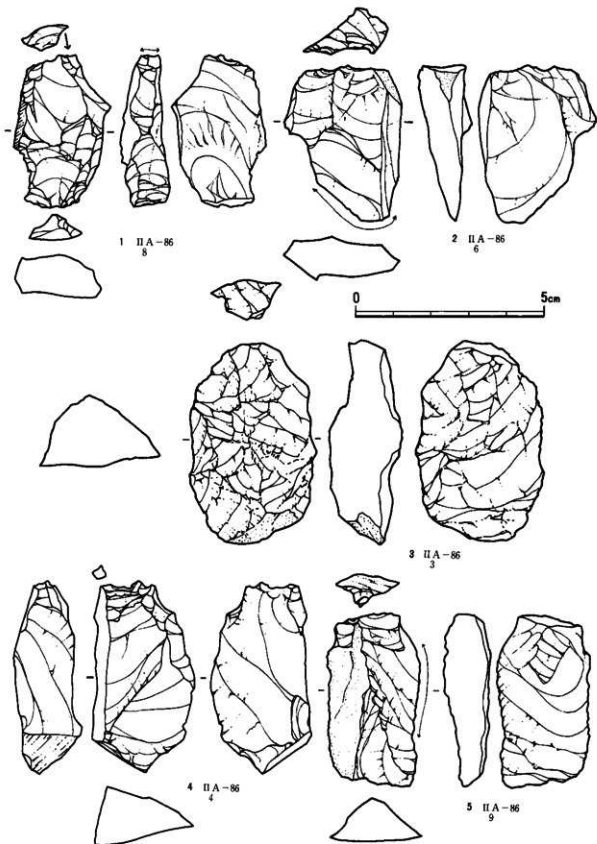


第60図 第4ブロック出土石器②



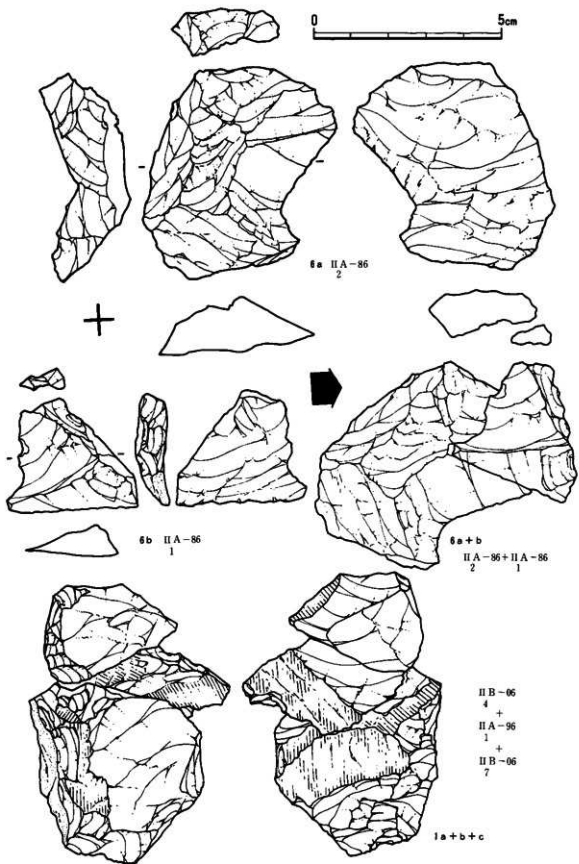
第4ブロック出土石器



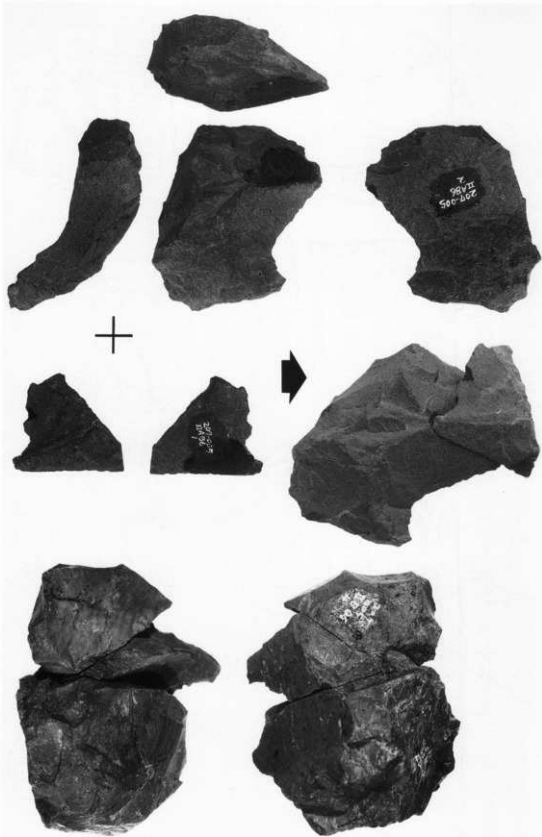


第62図 第6ブロック出土石器①

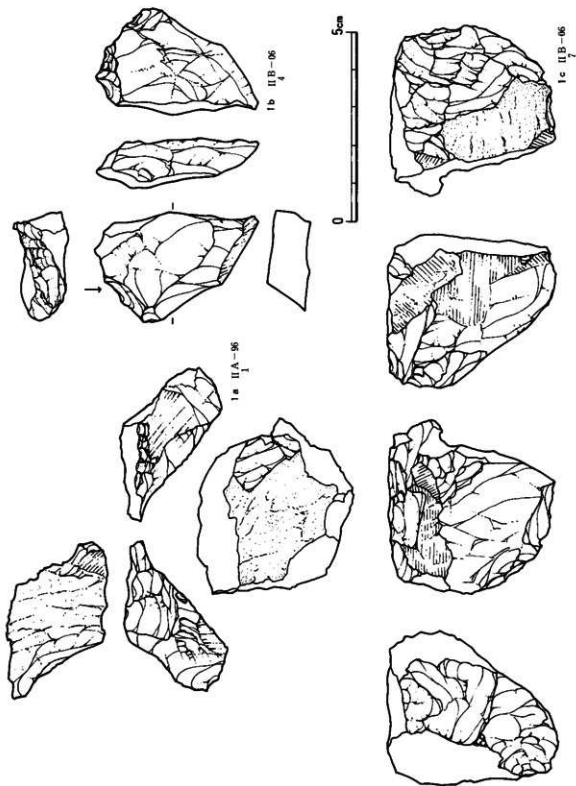




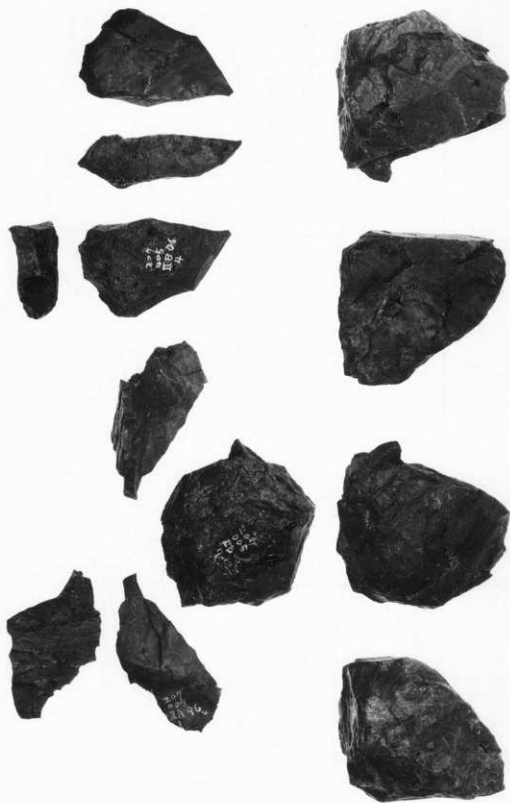
第63図 第6ブロック出土石器②・第7ブロック出土石器①



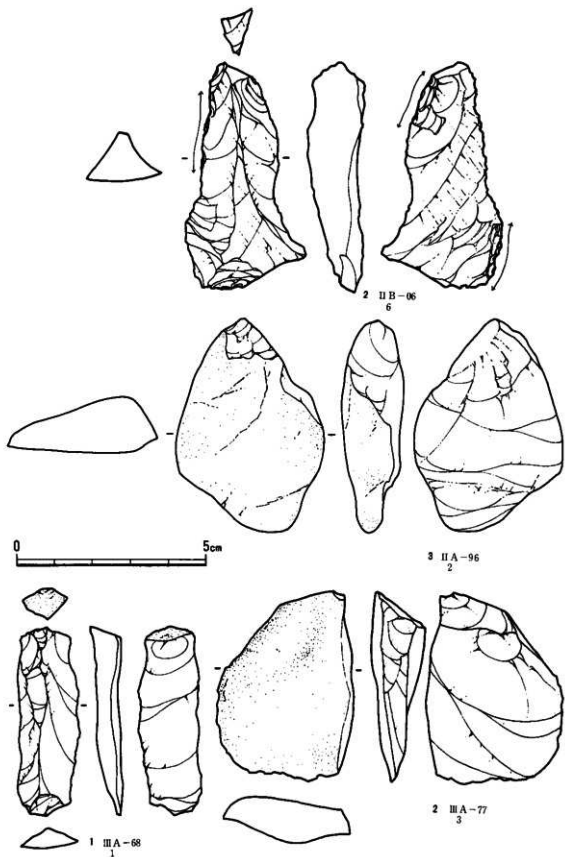
第6・7ブロック出土石器



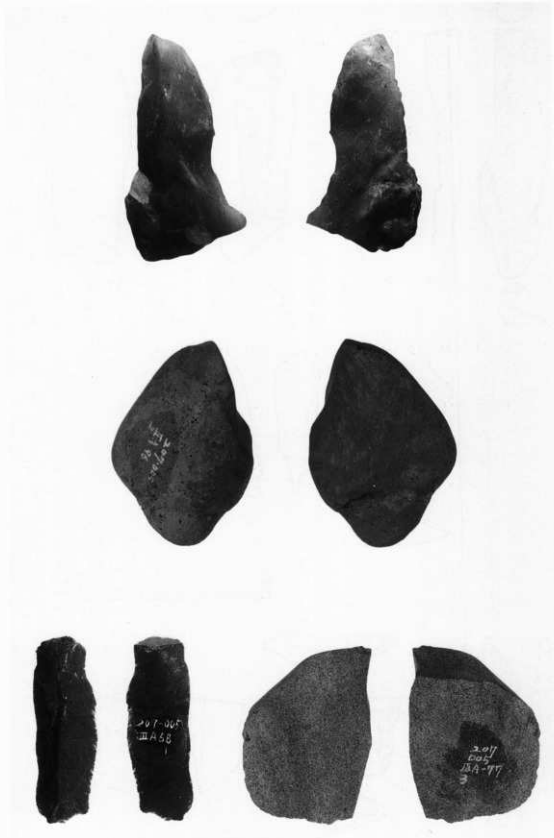
第64図 第7ブロック出土石器②



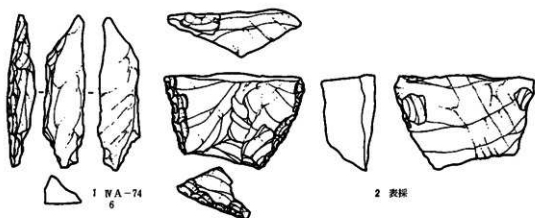
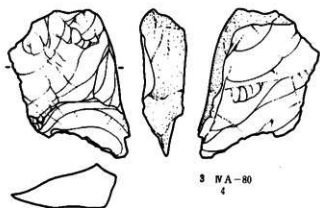
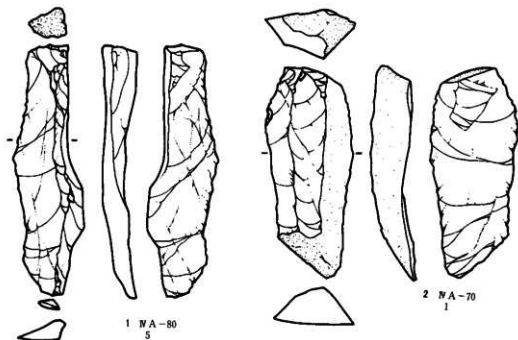
第7ブロック出土石器



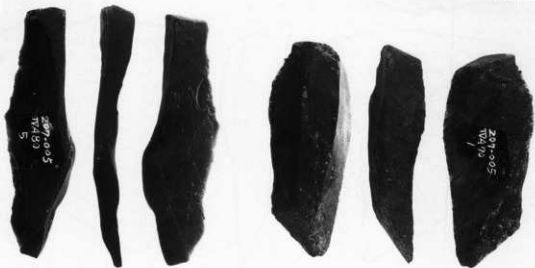
第65図 第7ブロック出土石器③・第8ブロック出土石器①



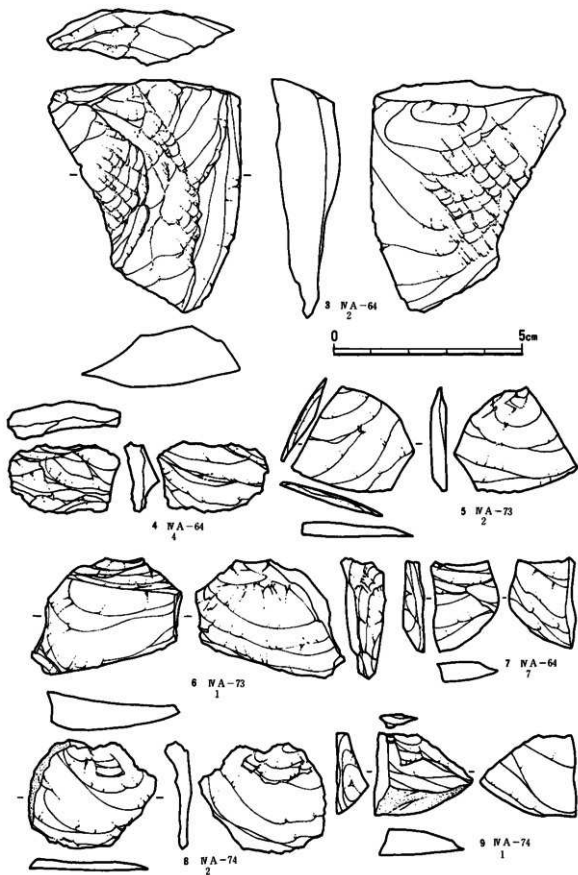
第7・8ブロック出土石器



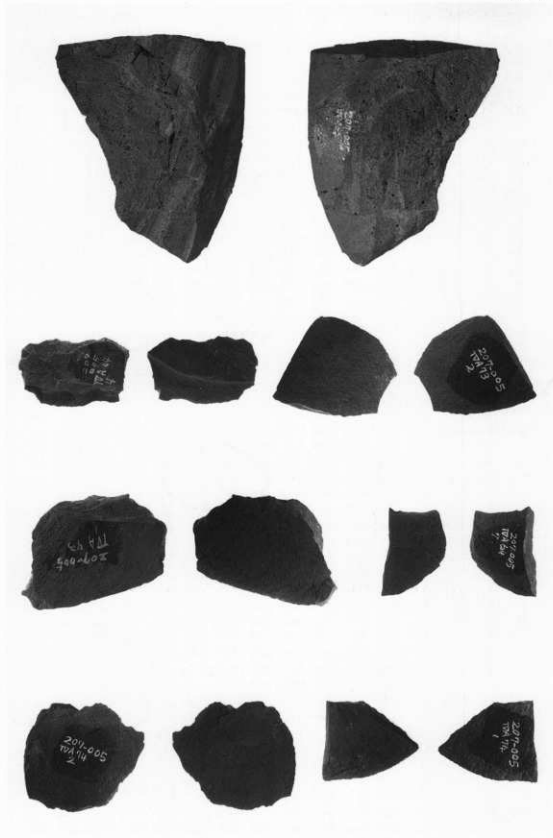
第66図 第9ブロック出土石器①・第10ブロック出土石器①

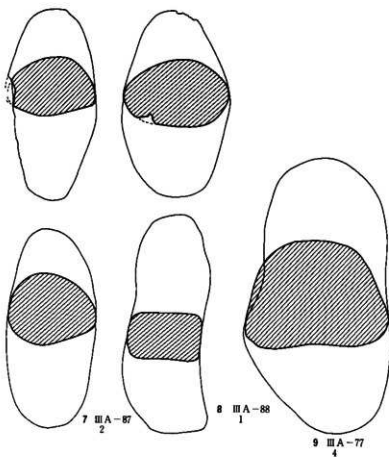
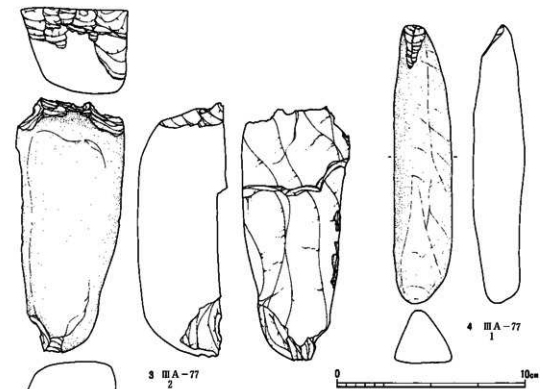


第9・10ブロック出土石器



第67図 第10ブロック出土石器②

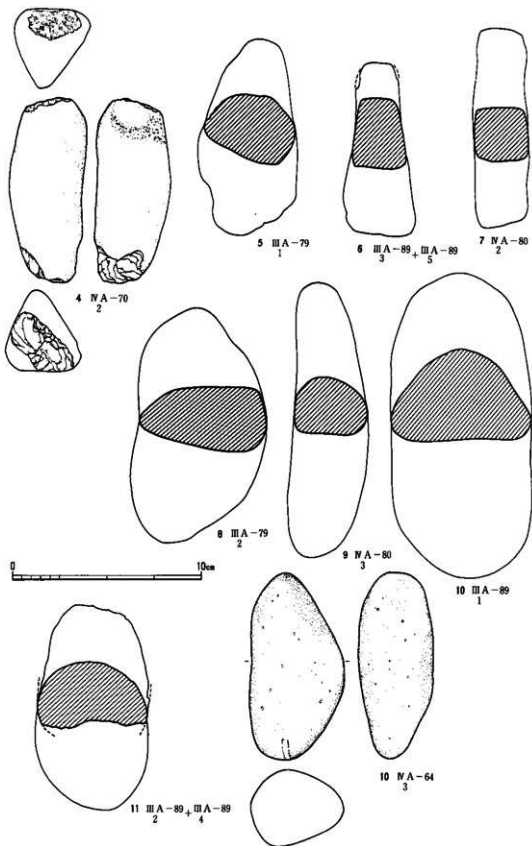




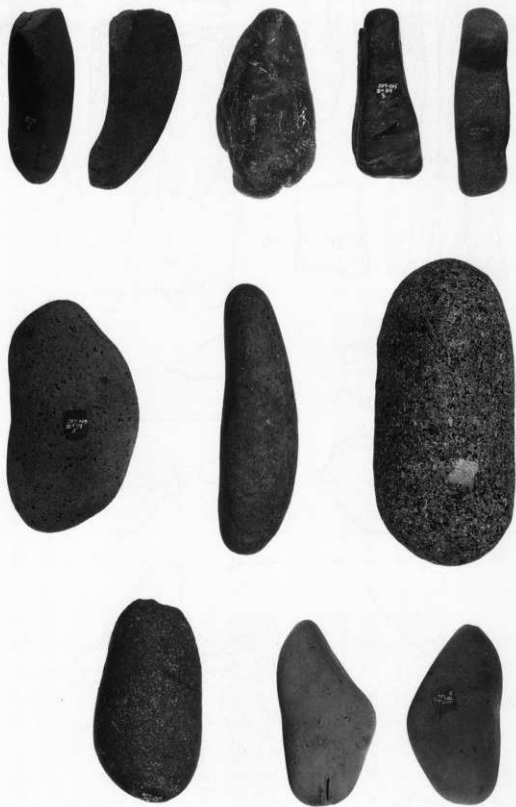
第68図 第8ブロック出土石器②

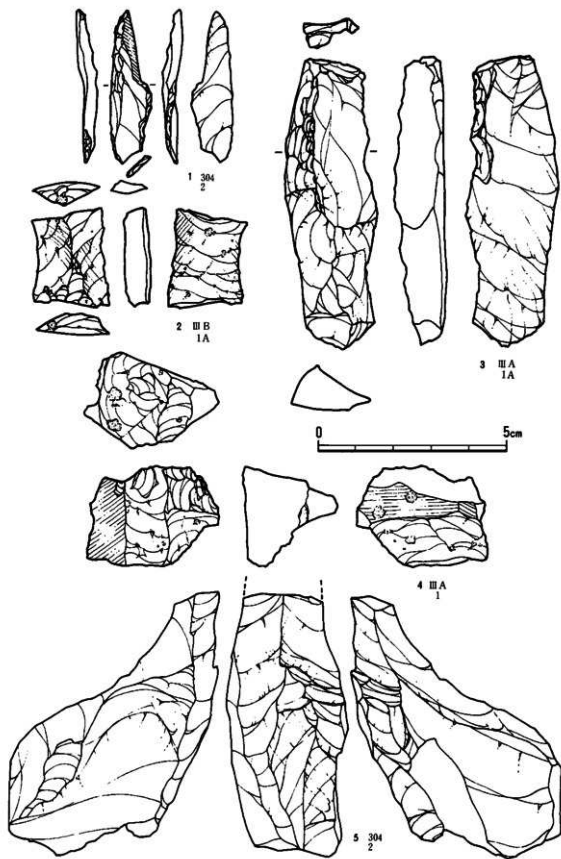


第8ブロック出土石器

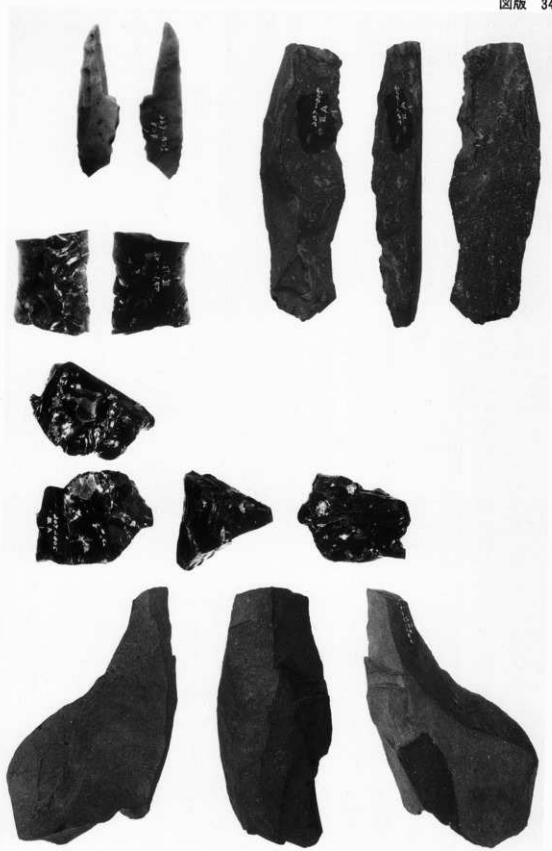


第69図 第9ブロック出土石器②・第10ブロック出土石器③



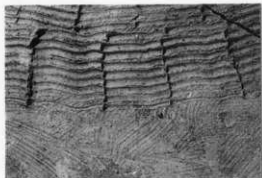


第70図 ブロック外出土石器



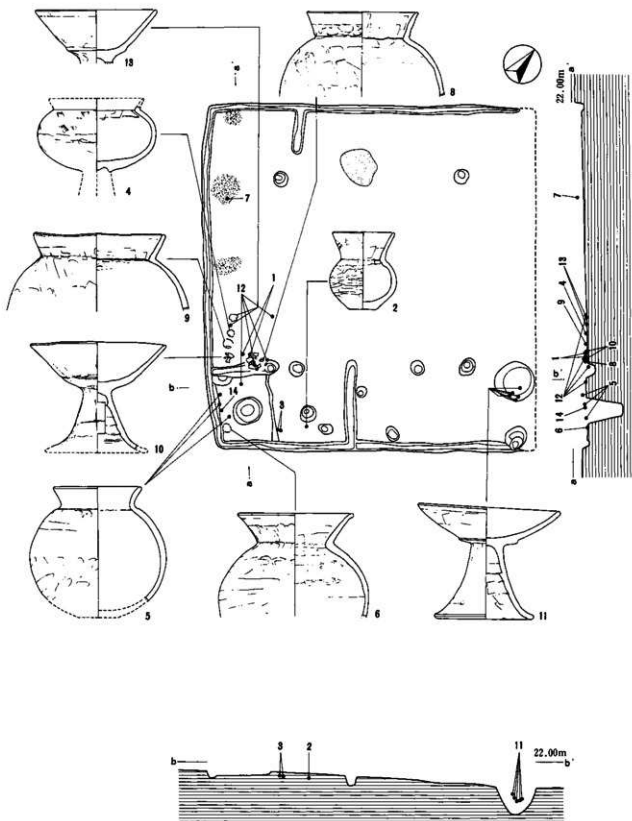
ブロック外出土石器

001 竖穴住居



002 竖穴住居





第71圖 004豎穴住居遺物出土狀況



004-1



004-10



004-2



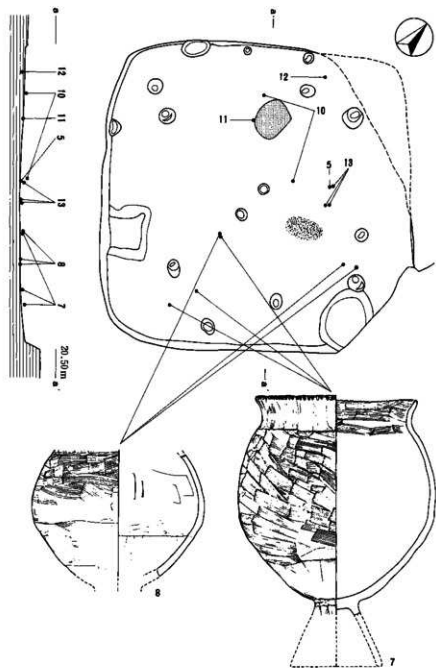
004-11



004-4



004-13



第72图 006竖穴住居遺物出土状況



004-5



006-7



004-6



004-8



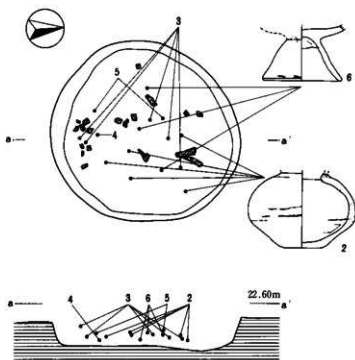
006-8



004-9



006-13



第73图 205土坑遺物出土狀況



011-2



010-1



010-3



012-4



012-5



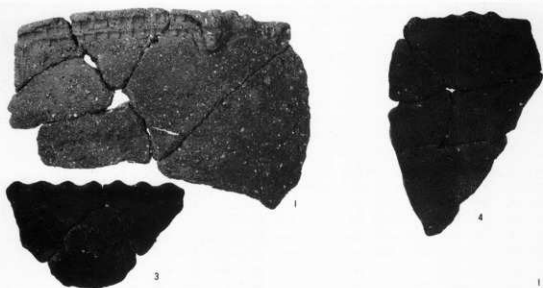
205-2



205-6



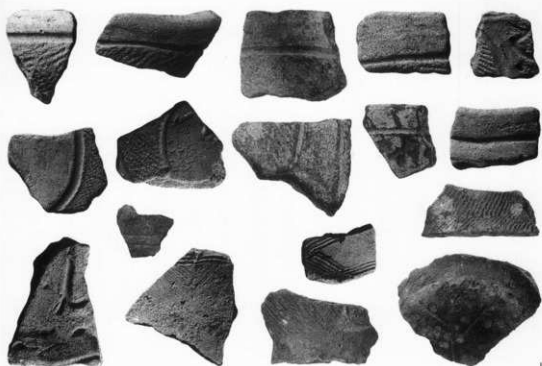
202-2



202土坑出土土器



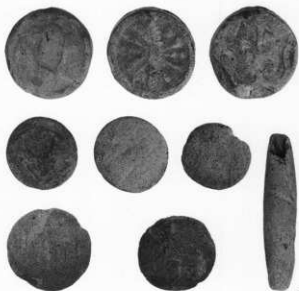
2
绳文土器



1
繩文土器・弥生土器



2
土師質土器



3
土製品



004・006竪穴住居出土石製品



5
石斧状石器



6
石鉄

松戸市彦八山遺跡

北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

昭和62年12月20日 印刷

昭和62年12月25日 発行

発行 日本鉄道建設公団
千代田区勲町4丁目2番

編集 財団法人 千葉県文化財センター
千葉県葛城2丁目10番1号

印刷 有限会社 正文社
千葉県都町2丁目5番5号
